

569

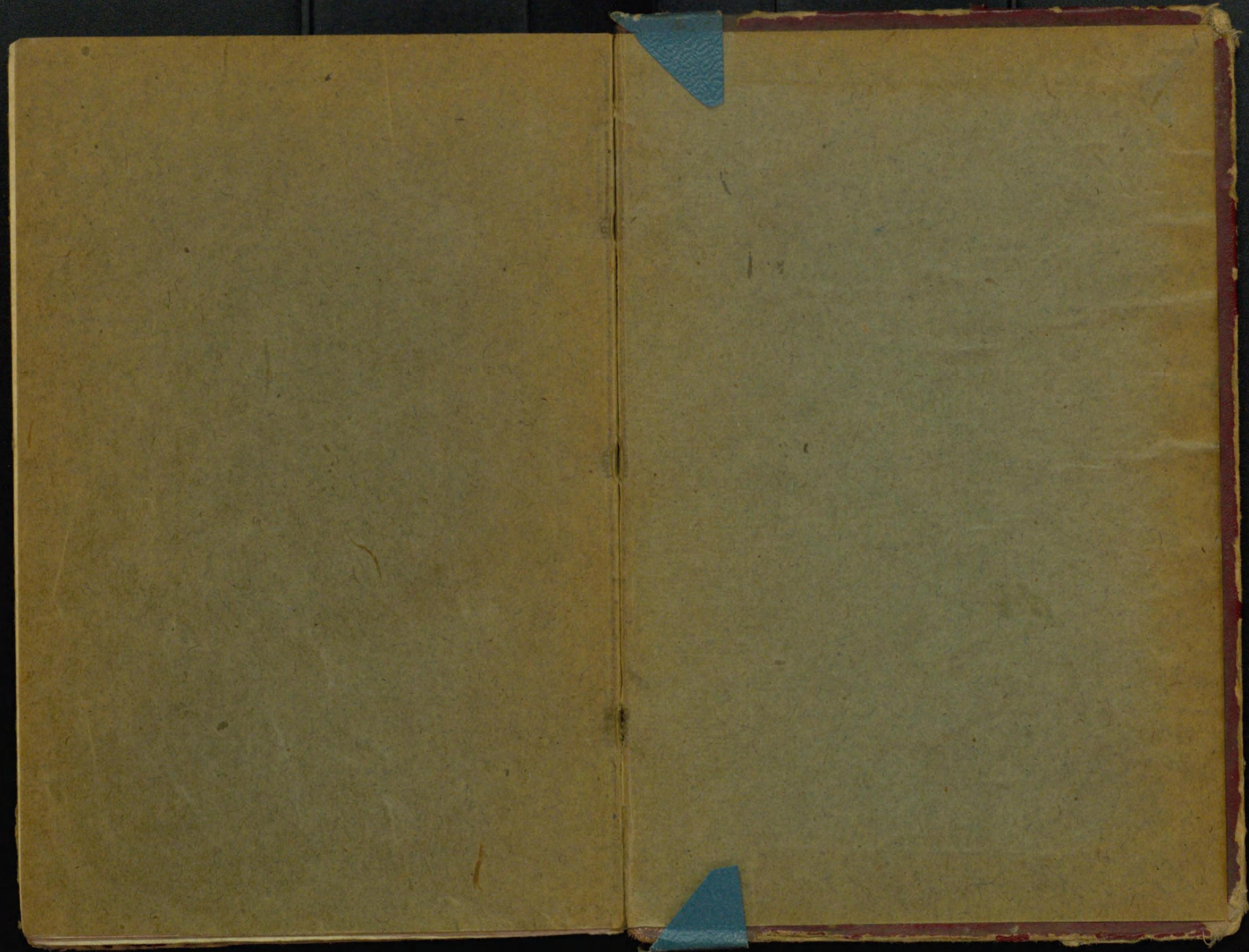
569-61



1200501517095

口
複
写





世界大衆文學全集

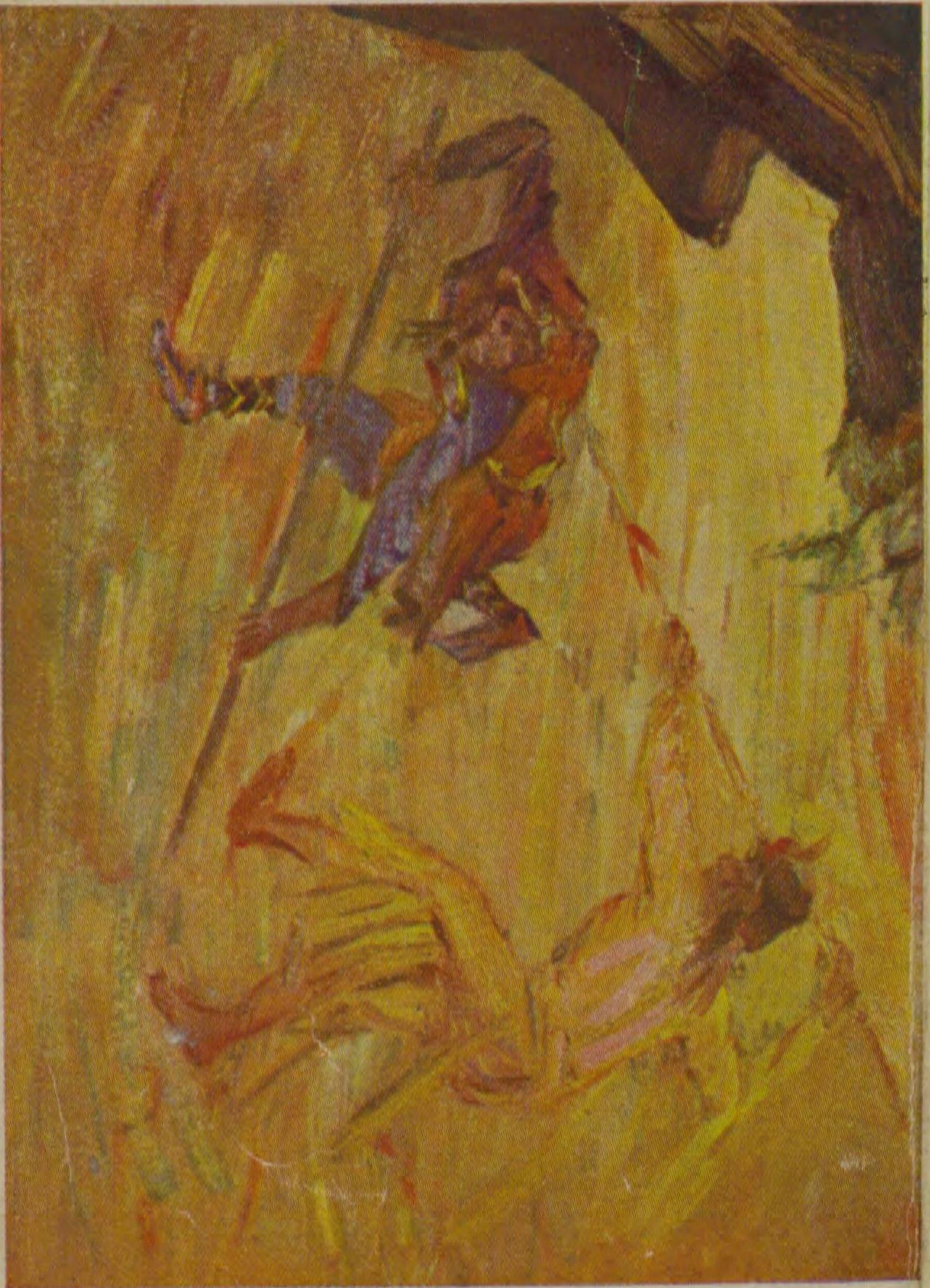
西遊記

弓館小鱈



改造社





けかき樂く舞てけが目空唇きごしを繪、やるす愁敵は怪女しせ致真體に常尋あさ、め嶺山るす魔邪の路標の人丁
(照參頁一七二) 〇た



譯者

はしがき

支那四大奇書の一たるこの西遊記は、日本では一般に元の長春真人邱處機の作だと稱されてゐる。ところが民國文學者の考證によると、邱處機作の西遊記は、成吉思汗が西征の際、その命により四年間に亘つて西方の地理を調査した報告書で、小説の西遊記とは關係がない。小説の方は唐の僧慧立の著慈恩三藏法師傳と玄奘三藏（三藏は實在の人で西曆六〇三年出生、支那史中著聞なる偉僧）自ら著すところの大唐西遊記に據り、明朝の中葉以後の小説家（或は吳承恩ともいふ）が潤色したものだらうと言つてゐる。その他にも出所について、いろいろの説があるやうだが、かういふことの穿鑿は、全く私の能ふところではないから、暫くわが國先人の説に従つて邱處機の作として置く。

また内容の意義に就ても、三藏法師が經文を求めに行くことを叙した、單なる旅行記ではなく、人の心に藏する意馬心猿を制御して、人世の遭遇すべき幾多の魔障を押のけて行くべき教訓を寓意したものと、理窟をつけてゐる學者がある。その解釋の如く、著者の意中にも或はそんな氣があつて書いたのかも知れない。しかしその寓意を受け入れるも入れぬも讀む人の心次第で、何も堅苦しい教訓が含まれてゐるなどと解釋して讀まなくも宜しい。たゞ我々は内容に盛られてある興味、そのものに接し樂しめばそれでいゝのだ。

今はナンセンスばやりの時代だが、西遊記のやうな偉大なるナンセンスはない。眞に荒

唐無稽、怪誕奇異の極だが、それでゐて讀む者をひとりでに篇中の人物と同化せしめ、覺えず臆を冷したり、呵々大笑させたりする。舞臺の雄大なものはもとより、その構想が天馬空を往くが如く無碍且つ奇抜にして、千變萬化の妙を極めてゐるのには、實に途方もない空想家があつたものだ。とツク、感服させられる。さればこそ數百年來（日本では今より百二十餘年前文化年間に初篇が翻刻された）引續いて、人に愛讀されてゐるのだらう。この譯述の大半、牛魔王降服に至るまでの章は、數年前時の東京日日新聞主幹城戸元亮氏の勧めにより執筆し、小杉未醒氏の挿繪を得て、百餘回に亘り同紙上に連載したものだ。後半は最近改造社の慫慂に接して、漸く大團圓までを書き終へたので、丸つきりの素人が本務の餘暇に仕上げた粗製品だから、原作者に對しては全く氣の毒だと思つてゐる。（尤もとうの昔に亡くなつてゐるからいゝが）たゞ成るだけ「今向き」にと、心掛けながら書いたのは事實だ。漢文乃至はその直譯より、幾分讀易いだけが、取得でもあらうか。

昭和五年十二月

弓館 小 鰐

目次

169-61

悟空の生立ち 三六

仙術修業——天軍と合戦——幡桃園の暴行——五行山の監禁

天竺へ出發 三六

緊箍呪——黃風魔王降参——八戒お目見得——毒瓦斯魔王
——沙悟淨も入門——

師弟揃つて 三六

色に迷ふ八戒——人參果竊盜事件——大仙も感嘆——悟空を破門

破月洞危難 三六

三藏さらはる——悟淨も捕虜に——虎にされた三藏——悟空に頼
んで——魔王の化の皮

金角銀角兄弟 三六

八戒また失敗——泰山壓頂の法——瓢箪の詐欺——兄弟が瓢の
中に

烏鷄國王救助 三六

夢中の哀訴——死骸を盗みに——三藏が二人に

紅孩兒と水魔 一六六

小兒の詭計——悟空大穴傷——八戒を袋詰め——觀音に救を乞ふ
——乗船の沈没

和尚地獄車遲國 一九四

三仙人の悪虐——木像に化けて——小便の味は？——仙人と術
競べ——首斬られ競争

通天河の主 三三

小兒を犠牲に——夜陰に神祠へ——雪降りには計略——金魚のお
化け

獨角魔王 三四一

三八を生捕り——恐ろしい金輪 釋迦にも策なし

女人國の難 三五

三藏八戒孕む——女王の花婿に——女怪に凌はる——倒馬毒

二人 悟空 二七七

賊手を逃る——悟空また放逐——悟淨の大憤慨——お釋迦の鑑定

牛魔王降参 三〇一

暑い火焰山——芭蕉扇の偉力——玉面女の驚き——本妻を欺いて

八戒に變装——天上の變化競べ

金光寺と木仙庵 三三七

泥龜に鯨の精——賊は萬聖龍王——九頭駙馬と夫人——惚れられ

た三藏

黄眉魔王調伏 三五六

奇瑞の大風呂敷——胃袋でダンス——柿の糞山突破

朱紫國を救ふ 三六八

嘔吐者悟空——デレ／＼太藏——閨房の虱の群——魔王は唐獅子

女郎 蜘蛛 三六三

裸婦と八戒クン——脇の下に千の眼

悪魔 三兄弟 三九一

名器陰陽二氣瓶——腹の中で越年——水漬になつた八戒——釋迦
如來が來援



西

遊

記

白鹿と蛇女

赤ん坊徴發——悟空の肝、家老の肝——妖女に騙されて——三藏と結婚式——李天王と對決

四〇八

滅法國に入る

おしやべり女將——宮中みな丸坊主——強飯の誘惑——三藏の嘔首

四三九

天竺玉華州

王子が門弟に——武器を攫はる——老妖九頭獅子——佛體は油泥坊——四木星神の應援

四四六

天竺二人王女

荒園に泣く姫——天授の花婿様——女王實は兔の怪

四七〇

寇長者の家

萬僧歡迎の高札——強盜團を膺懲——一行に殺人の嫌疑——閻魔王に頼む

四八五

大雷音寺到着

凌雲渡の危難——庫番が賄賂強要——受難八十一度目——十四年目に歸國——皆佛菩薩に化す

五〇一

西遊記

悟空の生立ち

(一) 仙術修業

西遊記の大立物は何といつても孫悟空、話の順序としてこの立役者がどうしてこの世界に生れ出て来たか、まづその戸籍を調べて見よう。

出生地は東勝神州傲來國といふ國の附屬島華果山。時はといふと、この世界が半熟でもフワ／＼でもなく、とうに立派に出来上つて、天地人の三才がチャンと備はつてから後のこと、くだんの華果山の上にあつたデコボコの石が何時か天地の精氣をはらみ、年月満ちて、ある日ポコンと石を破つて飛び出したのが、猿そつくりの形相をした後日の孫悟空その人(？)だつたんです。

だから両親もなければ氏名もない。しかし天地の精をうけて生れたんだから、猿とはいへど凡庸の猿ならず、生れながら兩眼より金色の光を發して、大空を輝かしたといふくらゐ。いはゆる幼にして穎悟の質で、遊び仲間の猿どもや鶴、鹿の類の間にあつて隠然牛耳をとり、常に餓鬼大將といつた

かたち。

ある時、猿仲間と瀧の近所で遊び戯れてゐたが、一疋の猿が瀧を見上げ見下して、

「誰か水をくゞつて、瀧の中に何かあるか見届けて來る者はないか、そしたら俺たちの王様にしてやるが……」

「賛成々々。」

もとより非凡で且つ物に恐れぬ石猿、これしきのことでは王様になれるんなら、こんなうまい話はないと、

「ようし、俺が見てくるぞ。」

ザンブとばかり飛び込んだ。さてあたりを見廻すと瀧の中には却つて水がなく、仲間の住家として恰好な洞穴、橋の傍に「水簾洞」と刻んだ石の標柱が立つてゐます。

「いゝ、住居を見つけた、これからあの洞穴にゐることにしよう。」

歸つて一同を案内すると、いかにも結構な場所なので、猿ども手を打つて大喜び。約定に従ひ王様に奉られて美猴王といふ洒落れた名をつけ、晝は華果山の邊に飛び出して遊び、夜は水簾洞を宿として暮してゐる中に、いつか三百餘年の星霜を経て、呑ん氣な美猴王も漸く智慧づき、人間ならば「人生問題」といふやうなことを、考へ出す年頃となつた。ある日つく／＼嘆ずるには、

「俺は今、何も恐ろしいといふものはなく、楽しい生活をしてゐるが、いつかは閻魔王に召し出されて、死んでしまはなくちやならんかと思ふと、それが悲しい。一つ世界をめぐつて仙人を尋ね出し、不老長生の術を學ぼう」と當今ならスタイナツハ氏か榊博士を捜さうといふ目算。

そこで家來の遠どもに別れをつけ、枯松の筏に乗つて大海に乗り出しました。岸には別れを惜しむ群猿、おさらば、さらばの聲も追々に遠ざかり、さすがの美猴王の眼にも哀別の一滴、華果山海岸の別離とでも名づくべき悲痛な一場面。

やがて風のまにまに到着したのは南瞻部州といふ大陸。海邊にゐた漁師は異様な大猿がノコノコ上陸したので、吃驚して逃げ出すのを、一人をつかまへて著物を剥ぎ取り、それを著用に及んで町に出かけ、先づ人間の言葉、人間の作法の修業をはじめ出した。

その修業に八九ケ年、立派な人間並になつたので、再び筏に打ち乗つて、西牛賀州といふところに赴き、こゝで須菩提祖師と呼ぶ老仙人をたづねあて、懇懇に入門を乞うた。

祖師は門弟三十餘人を従へて引見し、美猴王の出生から經歷を聞いたが、一見して氣に入つた様子です。

「お前は猿そのまゝの、實に痛快な顔をしてゐる。ヨシ、わしが相應な名をやつて弟子にしてやらう。」

こゝで初めて孫悟空といふ名をもらひ、一心不亂に不老長生學の研究をはじめました。



悟空何しろ非凡な智慧者、釘といへば金槌、エヘンとせけば灰ふきといった具合だから、恰も猿面冠者藤吉郎が信長に認められたやうにその才智を知られ、六七年目に學術優等といふ譯で、特に他の弟子達に先んじ、無病息災、不老長生の結構な祕傳を授けられた。何せ多年の念願が届いたので非常な喜び、毎日毎晩その祕傳の復習をして磨きをかけてゐます。

かくて又三年、ある日、須菩提先生が悟空の練習中のところへ来て、「うむ、大分腕が上つたやうぢやが、將來お前の身の上三つの災難が降りかゝつてくる。先づ今後五百年目に雷に打たれる、次の五百年目には火災、その後の五百年目には風に吹飛ばされる。これを防ぐ法があるか、どうぢや。」

こんな大災難が襲ひ來るんでは、折角の長生術も何にもならない。悟空は驚きおそれて災難除けの法をと嘆願すると、もとより愛弟子のことゆゑ、祖師は悟空の耳に口をあて、祕中の祕ともいふべき七十二種類の忍術、變化の術を教授されました。

悟空この法を練磨することまた三年、遂に空中を飛び歩く法をあみ出し、得意になつて稽古してゐ

ると、先生これを見てカラ／＼と笑ひ、
「お前のは空中を飛行するのぢやない、たゞ雲の中を這つて歩くのだ。宜しい、わしが筋斗雲の術を授けてやらう。」

とてまた一つの秘法を教はつた。

この筋斗雲といふのは後日悟空の活躍に一番役立つた秘術、これに乗ると一時間に十萬八千里を造作もなく飛んで行ける。支那の六町一里にしても日本の一萬八千里、即ち四萬六千マイル、或は七萬二千キロメートル。ガソリンはいらず、天候もお構ひなし、雲を呼んでヒヨイと乗りさへすりや、思ふところへ自由自在に飛んで行けるんだから、太平洋横断飛行どころか、世界一週無著陸飛行ぐらゐは朝飯前といふ調法至極な術だ。悟空また數年間この稽古を積み、天地間の妙法何一つとして心得ぬものなしといふ、大家になりすましました。

だから習ひ覺えた藝を人に見せたくてたまりません。ある日、仲間の門弟達と松の木の下で漫談をしてゐたが、兄弟子ながらボンクラなため、まだ何一つ術を覺えてない一人が、

「おい悟空、貴公はこの間變化の術を教はつたとかいふ話だが、どれだけ出来るか、一つ試しに松の木に化けて見せい。」

何が餘なことが出来るかといふ肚で、悟空に藝術の發表を求めた。發表慾でウヅ／＼してゐる悟空

としては、寧ろこつちから望みたいところ。

「何の造作もないこと、しからば一番松の木と變つて御覽に入れませう。アイキタ……」

掛聲諸共お尻をピヨイと振つたかと思ふと、忽ち見上ぐるばかりの松の大木となつたから、一同さすがに感に堪へてヤンヤ／＼の大喝采。

須菩提先生この聲を聞き、何を騒いでゐるのかと、門外に出て見るとくだんの始末。先生眉をひそめ、先づ他の弟子を遠ざけて戒めるには、

「何といふ眞似をするのぢや。お前があんな術を遣つて見せると、みんなが教へてくれといふに違ひないではないか。それをいやだと言へば命もとらうとするだらう。早くどこかへ立退いてしまへッ。」

悟空しかられて涙ポロ／＼、

「先生の前を去つて私は一體どこへ行きますせう。どうか勘辨して下さいませ。」

「意氣地なしめが、お前は元來どこの生れだつかを忘れたのか。」

かういはれて悟空ハツと悟り、これまでの高恩を謝した上、例の筋斗雲に乗つて、生れ故郷の傲來國葦果山へ舞戻つて來ました。

これより先葦果山水簾洞は、北方の山寨に住む混世魔王に攻め荒され、留守の小猿が防戦の甲斐もなく、落城は目前に迫つてゐた。悟空歸つてこのことを聞いたから齒をむいて憤り、筋斗雲を降り

る暇もなく、直ぐ様魔王の城門に飛んで行つて大音聲。

「俺は水簾洞のあるじ孫悟空だ。眷属どもの仇討ちに來たから、出合つて尋常に勝負しろ。」

魔王この聲を聞いて出て見ると、身のたけ四尺に満たぬ猿面冠者が威張りくさつてゐるのだから、フンと鼻先で打ち笑ひ、

「生意氣な小僧め、今俺がひねり潰してくれろぞッ。」

とて六尺餘りの大刀で斬つてかゝる。悟魔この時チツとも騒がず、須菩提塾で修得した身外身の法をつかひ、自分の身體の毛をむしり取り、口に含んでフーツと吹き出すと、忽ち三百餘の小猿となり、魔王の顔といはず手足といはずキヤツ／＼群がりついたからたまらない。魔王閉口頓首して藻掻いてゐるところへ、悟空得たりと走り寄り、大だんびらを奪ひ取つて西瓜を斬るやうにスバリと眞ッ二つ。

それから小鬼どもをみな殺しにし、捕虜を救ひ出して意氣揚々、萬歲聲裡に水簾洞へ凱旋しました。

(二) 天軍と合戦

混世魔王との一戦以來、國際間の風雲險惡たるを覺つた孫悟空、ミリタリズムを奉ずるやうになつ

て、日々手下の猿どもに軍事教練を施し、倣來國に行つては劍戟兵器の類を奪ひ取つて來たり、ひたすら國防に備へてみました。

しかし水簾洞に造兵廠の設備がなかつたから、思ふやうな武器を得ることが出来なかつた。何でも風のたよりに聞けば、龍宮城には立派な甲冑刀劍の類があるとの話、一つ行つて當つて見ようと、潜水の法をつかつて波間をくぐりぬけ、また／＼間に東海龍王の都城に到着する。何せ飛行ばかりでなく、潛航の方も達者なから調法です。

海底の邏卒巡海夜叉といふ役人、この不思議な關人者を誰何すると、俺を知らんか、俺は華果山の大王孫悟空様だとおどしつけられ、驚いて龍王にしか／＼の旨を奏上する。龍王も心におそれ、御殿に招じ入れて來意をたづねると、武器が譲つてもらひたいとの所望。

龍王はわざと三千六百斤の大槍と、七千二百斤の大薙刀を取出し、かう重かつたら閉口するだらうと思つて見せると、悟空手にとり軽々と振り上げ振り下し、
「こりやいかん、葶藶同然、輕過ぎて持つたやうな氣がしない。もつと／＼手答へのするやつがありませんかね。」

と平氣な顔。龍王益々おそれをのゝき、しからばといふので倉庫に案内し、王家秘藏の神珍鐵如意棒といふのを見せる。長さ二丈餘りで兩端に黄金の輪をはめ「如意金箍棒重二萬三千五百斤」と

はりつけてある美事な鐵棒、これを換算すれば千四百七十貫、即ち五トンにもあまる代物です。悟空は空しばらくこの棒をいぢつてゐたが、

「なるほど結構な棒だ。たゞ惜しいことにはちと長過ぎる。」

といふが早いか棒はスル／＼とちぢまつて、恰度手ごろの得物と變つた。悟空呆氣にとられ眼をパチクリ。

「おや／＼これは不思議、一體これはどうしたんです？」

「いや、これは昔大禹王が治水工事をされた時、海の深さを測量した物差で、のばせば地獄から天國にも届くし、またちぢめると一二分ぐらゐの縫ひ針となつて、耳の中にしまつて置ける珍無類な棒なんです。」

「それは調法、うまいものが見つかつた——それからこゝにある黄金の鎧と紫金の兜も、頂戴して行きますぜ。」

龍王かくれるともいはないのに、サッサと獨りぎめで頂戴に及び、大満悦で水簾洞へ引上げた。右の金箍如意棒は、筋斗雲とともに、後日悟空が無二の戦具として愛用した逸物です。

さてこのやうに軍備が充實したものゝ、別に他國から戦さをさしむけてくるものもない。さればといつて無名の師を起す譯にも參らんから、悟空は日々近國の魔王をよんでは酒宴を開き、泰平のつれ

づれを慰めてゐる。

ある日、大いに酔つ拂つて松の下に眠りこけてゐると、青鬼と赤鬼が來て悟空をしばりあげ、とある城門の前に引立てゝきた。見れば「幽冥界」と書いた大きな鐵の門標がかゝつてゐるので、悟空大いに怪しみ、

「こゝは閻魔王の城ぢやないか、何用あつて俺をこんなところへ連れて來たのだ？」

「貴様の娑婆の命が盡きたからさ。大王様のお召しだ、サッサと門の中へ入れ！」

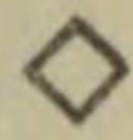
かくと聞いた悟空、さらでだも赤い顔を負ッ赤にして憤り、うんと力んで縛つた繩をたち切るや、耳の中から如意棒を取り出して一丈餘りの鐵棒とし、青鬼赤鬼を膾のやうにたゞき潰して、城内に躍り込んだ。

「さあ閻魔の野郎め表へ出る、不老長生のゆるしを受けてゐるこの悟空様を、なぜこんなところへ呼び寄せたのだツ。」

八雙三段水車、如意棒をブーン／＼振り廻して威張るので、牛頭馬頭連中左往右往に逃げ惑ふ。閻魔王これを見て大變な奴に舞ひ込まれたと、若狹之助に詰め寄られた師直みたいには、はひつくばつて早速の遁辭。

「大將さう怒らずに——これはきつと同名の人違ひをしたのかも知れませんが、まあ暫く、暫く……」

「なに人違ひ？ しからばお前のところにあるといふ閻魔帳を見せろ。」
大王畏つて、生物の壽命を書き上げてある閻魔帳を出したが、見ると「猿の部」の中に「石猿
孫悟空三百四十二歳」としてある。悟空筆で自分はじめ他の猿の名を墨黒々と塗り消し、閻魔王を
尻目にかけて、悠々引上げたと思つたら、これなん南柯の一夢であつた。
後世の猿及び猿に類した人の壽命が長いのは、閻魔帳を抹殺したためなさりて、これは宜しく悟
空に感謝せねばなりませんまい。



龍宮に行つて兵器を掠奪する、冥土に躍り込んで閻魔帳を塗りつぶす。國際道徳を無視した悟
空の横暴は、列邦怨嗟の的となり、天界を支配する玉皇上帝のもとに、悟空討伐の訴願が頻々とし
て来るから、打つちやつて置けない。即ち、天上の文武百官を召し集めて、討伐可否の會議が開か
れました。

甲論乙説いろ／＼と出た中に、非戦論者の大白金星が申すには、
「あれは仙術を修めた猿で、普通の獸類では御座いません。兎に角、彼を天界に召し上げて何か官職
を與へ、若しそれでも命令をきかなかつた時には、罰するとしたら如何で御座らう。」

上帝もこの説尤もなりと思し召し、大白星を勅使として水簾洞へ差遣、その趣を傳達せしめら
れる。

何せ華果山の石塊から生れた山猿が、天上界に召されてお役人の列に加はるのだから、悟空も悪い
氣持ちやない。すぐお受けをして、大白星同道雲に乗つて參殿すると、上帝調を賜ひ、その場で「お
厩方に任ず」といふ辭令が下りた。

このお厩方といふ役は、實は馬を養ふ至つて賤しい役なんだが、山出しの悟空には官職の高低が
わからないから、大得意で官僚風を吹かせてゐます。

その中天上の半ヶ月、下界の十數年を過ぎたが、ある日のこと、他の役人仲間が「あの山猿め、馬
扱ひの小役人とは知らず、いゝ氣になつて威張りくさつてケツかる。」と蔭口をいつてゐたのを聞き付
けたから悟空齒がみをして大憤慨。

「俺は華果山で王様にもなつた者だ、よくも俺をだまして馬役人などにしやあがつたな。」
耳の中から如意棒を引出し、厩舎や門などを手當り次第にたゞきこはして、ブン／＼しながら華果
山へと立歸つた。

華果山の小猿どもはその趣を聞いて、ようこそお歸りと慰安の酒宴を開く。ヤケ半分の悟空ガブ
ガブあほつてゐるところへ、獨角鬼王といふ一本角の荒鬼が、赤色の陣羽織を貢物にして、手下に

なつて来たから、悟空これに力を得て戦意一決。この荒鬼を先鋒の大將と定め、自分は齊天大聖と號し、旗指物を洞門に押立て、天軍攻め来らば目にも見せてくれんと、待構へてみました。一方天界では評議の結果、いよく悟空討伐と決し、李天王、哪吒太子の親子を降魔大元帥に任じ、水簾洞を一揉みに攻め落しれんと、三軍勇氣凜々として進發する。先鋒の巨靈神、大斧を提げ洞門近く来て見ると、齊天大聖と記した大旗が翻つてゐます。「猿め、生意氣をしくさるな——ヤア——われこそは李大王幕下の勇將巨靈神だ、馬役人の山猿早く出合つて勝負をしろッ。」

大音聲に名乗り上げれば、悟空は金の甲冑を著、例の如意棒を提下げて現れ出た。

「無駄言をいはずに早く歸つて上帝にかう申せ。俺を齊天大聖の官にすればよし、若しきかぬなら宮城から上帝を追ひ落して、俺が代つてやると——さあ早く足もとの明るい中に立ち歸れ！」

巨靈神カツと怒つて、物をもいはず大斧を振つて斬りかゝつたが、悟空とは全くの段違ひ。忽ち如意棒で斧を打ち折られ、これはかなはんと逃げ出してしまふ。

哪吒太子これを見て、一筋縄ではいかんと思ひ、三身六臂の秘法をつかひ、手に六種の得物をもつて立ち向ふ。悟空の方でも、然らばこつちはと三面六臂に變じ、如意棒を三本にして丁々撥止、丁撥止。劣らぬ手練にいづれが勝ちとも見えぬ時、悟空一本の毛を抜いてこれを自分の身體と變じ、

前方で太子と激り合つてると見せ、正體は太子の後に廻り、如意棒を振り上げ、うんとばかり左の肩をなぐり付けたからたまりません。さしも勇氣の太子も尻古垂れて、本陣へと退却、天軍散々の敗北です。

善後策の御前會議席上、平和論者の大白星が、これはやはり悟空の望みにまかせて、齊天大聖の官職を興へた方が宜しう御座らうと申し上げた。上帝も致し方がないのでその議に従ふと、役人好きの悟空喜んで和睦し、再び天界に参りました。官職をもらつて懐柔されるのは、わが議院の某々會ばかりぢやないと見えます。

(三) 蟠桃園の暴行

そこで悟空は齊天大聖の官職を興へられ、帝室御料の蟠桃園の監督を命ぜられました。今でいふならまづ御料林の所長といつた格。

そもこの蟠桃園には三種類三千六百株の桃の木があり、一番若木で三千年目に一疋實るやつを食へば仙術に通じ、六千年目のは不老長生、又九千年目のを食べれば天地日月と壽命が同じになるといふんだから大したもの、大倉喜八郎さんでも聞いたたら、一つ何百萬圓でも奮發して買つたら

うと思ふ珍果です。

悟空はすでに不老の仙術を得てゐる癖に、この桃を食べたくつて仕様がな。ある日一計を打ち案じ、部下の役人に悉く用をいひつけて、門外に出してしまひ、自分は素ッ裸になつて得意の木登りに、この木あゝの木と飛び廻り、思ふ存分貪り食つた擧句、いゝ心地になつてグーグー木の下に寝込んでしまつた。

恰度この日、皇后王母が天上の仙人たちを招待して、桃のふるまひをする筈になつてゐたから、七人の腰元に命じて桃の實を摘みに遣はされた。腰元たちは所長の悟空に斷つて入らうとしたけれど、どこに行つたか姿が見えない。仕方なく桃林に入つて實を摘んでみると、この物音に目がさめた悟空、自分の盗みは棚に上げて「この泥棒！ 撃ち殺すぞ。」と怒鳴りつゝ、素ッ裸で踊り出したから腰元どもはびつくりした。

「待つて下さい。あの、あなたがお見えになりますから、皇后様の宴會に間に合はなくなると思ひ、お斷りもせずに摘みはじめたので御座います。どうぞ勘辨して下さいませ。」

「さうか、それならまあいゝが、一體その宴會には誰がよばれるんだ！」

「はい、佛菩薩様觀音様はじめ、方々の神様や仙人たちなさうで御座います。」

「それなら仙術に達したこの齊天大聖もよぶべきなのに、俺をのけ者にするとは怪しからん——よし、俺はちよつと行つて見てくるからお前等はこゝで待つてをれ。」

口にムニヤ／＼不動金縛りの呪文を唱へると、七人の女は寒國の土左衛門のやうに堅くなり、一寸も身動きが出来なくなりました。

悟空は雲にまたがり、城内の饗宴場に行つて見ると、テーブルの上には龍の肝、鳳凰の髓、熊の掌、狸々の脣といったやうな珍味佳肴がうづ高く積まれ、甕の中にはトロリとしたうまさうな酒が、なみ／＼とたゝへられてゐる。悟空一目見て涎ダラ／＼、とても見のがして歸るわけにはいかなくなつた。

そこで自分の身體から毛を五六本むしり取り、かみ碎いてフーツと吹き出せば、忽ち無數の睡り蟲に變つて張番の役人に襲ひかゝる。すると不思議や、臉が合ひ首は垂れて、一人残らずグーグー大騒、嗜眠病の病原菌は全くこれぢやないかと思はれるくらゐ。

仕すましたりと飲みあらし、食ひちらし、やがていゝ心持に酔つ拂ひ、鼻唄まじりで歸途についたが、どう戸まどひしたのか太上老仙の家へ迷ひ込んだ。折柄老仙は説法に出かけて留守、これも仕合せよしと蓄へてあつた仙家の寶とする長命丸を失敬し、そのまゝ出奔してまたも古巢の華果山へ歸りつきました。

これがため大事な桃林も、皇后の饗宴もすべて散々。重ね／＼の亂暴に上帝すつかり怒つてしま

ひ、二十八宿九曜星十二辰、その他天兵十萬の總動員を命じ、天國の興廢この一戦にありといふわけ
で、征討の軍を進められる。情報に接した悟空の方でも、獨角鬼王七十二洞の妖王はじめ數萬の猿を
糾合して陣を固める。何しろ天界と下界の戦ひだから歐洲大戦以上の大騒ぎ。

第一戦は天軍の先陣九曜星を打ち破つたが、第二戦には李天王以下四天王二十八宿の中央部隊に攻
め立てられ、鬼王妖王悉く捕虜となり、群猿ちりちりに追ひ散らされる總敗軍。悟空は「いひ甲斐
なき味方の奴原」と齒ぎりしりして、たゞひとり踏み止まり、宿敵李天王、哪吒太子等と大童になつ
て斬結び、やがて隙を見て一掴みの毛を引抜き、分身の法を行ふと、忽ち百千の悟空に變じ、めい
めい鐵棒を揮つて打ちかゝるので、天軍もこれには堪まらず陣を引きました。

悟空も兵法を心得てゐるから、遠くは追はない。元通り毛を集めて水簾洞に歸ると、意氣阻喪した
猿どもは、皆涙を流して泣いてゐる様子。

「何を泣くことがあるか、勝敗は兵家の常だ、明日は敵の大將を擒にして見せるから安心しろ。」
と勵まして、翌日の戰鬪準備にとりかゝりました。



王母の大饗宴に招かれた觀世音菩薩、はるるく南海普陀洛迦山からやつて來ると、會は荒されて

沙汰止みとなり、目下悟空征伐中で、天軍の旗色がよろしくないといふ騒ぎです。捨てゝも置けんか
ら從者の惠岸といふ勇士を、戰情視察かたぐ應援に差向けられたが、さすがの勇士も、悟空の手練
に敵しかね、這々の態で逃げ歸つてくる始末。

敵の頑強に手古摺つた天界では、再三の廟議の結果、上帝の甥で武術通力とも天上一と噂の高い若
武者、二郎眞君に援兵を請ふことになつた。眞君も叔父さんの一大事と、すぐに部下の將卒及び鷹犬
などを動員し、風に乗つかつて一飛びに交戦地華果山へやつて來る。攻めあぐんでゐた四天王李天
王などの大將連が喜んで出迎へ、今までの戰況から悟空が竝大抵ぢやない相手なことを告げたが、二
郎眞君胸中に成算ありと見えてニッコリ打ち笑ひ、

「諸君案じ給ふな、あの山猿いくら通力があつたところが、きつと捕生りにしてお目にかける。僕が
先づ彼奴と戦ひをはじめから、四大天王君は四方を取巻いて下さい。また李天王さんは空中から照
魔鏡を向けて、彼奴が隠れる處を照してくれ給へ。」

その他の諸將にも作戰を授け、自から水簾洞へ押しよせ、名乗りをあげていどみかゝつた。
悟空城門から小手をかざして眺めると、白面瀟洒の青年だから、生意氣な小僧め、たゞ一打ちにと
打つてかゝる。眞君は黄金作りの一刀を抜いて渡り合ひ、一上一下虚々實々、牛若辨慶五條の橋の立
廻りといった風だつたが、雙方互角の腕なので、三百餘合二時間あまりも戦つても、容易に勝負が

つきません。

眞君もこれは尋常ではいかんと思ひ、頃合ひを見はからつて、身體を一ゆすりすると、身の丈十萬尺、碧眼朱髯、さながら毛唐人のやうな顔の大怪物と變じ、二ツ又の刀を揮つて斬つてかゝつた。悟空の方でも、負けじと同じやうな大化物になつて斬り結ぶ。一方は、華頂山上の峰に似、一方は、崑崙崑崙上の天柱の如しといふんだから、共に驚くべき大物、群猿恟々として敢て戦ふ者なしといふ有様です。

この時、眞君の陣中では犬や鷹を放して、敵陣の猿に襲ひ懸らせたので、浮足立つてゐる猿ども、武器甲冑を捨て、散々に敗走しました。大猿の間柄といふのはこの時から起つたのかも知れない。

悟空はこれを見て内心大いに驚き、急に法を収めて元の姿となり、洞内に逃げ歸らうとしたが、かねて四大天王等が取り圍んでゐるから入ることが出来ません。やむなく如意棒を縮めて耳の中に押し込み、雀に變じて大木の上に飛び上つた。

天軍は姿を見失つてマゴクしてゐるが、通力を備へた二郎眞君の眼にはよく見えます。そこで自分分は鷹に身をかへ、飛びかゝつて一つかみにしようとする。悟空驚いて大鳥になり空中へ飛んで行く、眞君も同じく大鳥と變じて追ひかける。こはかなはじと海に飛び込んで魚にかはれば、眞君は魚鷹になり、悟空蛇になれば眞君は鶴になつて嘴で突つかうとする。見てゐる兩軍はこの變化くらべ

に、われを忘れてヤンヤの大喝采だが、追ひかけられる方では氣が氣ちやありません。

悟空今は仕方なく、仙術家間でも、これに變化するのを一番の恥とする鳥の姿となつて飛び出しました。眞君はこれを見てあざ笑ひ、

「フ、ン、奴たうとう苦しくなつて、鳥の中で最も下賤な鳥に變りくさつたな。俺はそんな根性の奴を相手に變化くらべはせんぞ、今射止めてやるから待つてをれ。」

と元の將軍の形に返り、弓矢を携へて追つかけてくる。悟空も辱しめられて癪だつたから、鳥は止めて途中の道端で小さな祠に身を變じ、眞君が立寄つたらば、一嚙みに嚙殺してやらうと待構へてゐました。

眞君追ひ掛けて来て見れば、鳥はゐずに今まで知らぬ神社があつたから、すぐ悟空の變化だなど察した。

「ハ、ア、この扉は彼奴の口で上にある二つの窓は眼玉だな。ようし、この眼玉からつぶしてくれよう。」

拳骨で突かうとしたので、悟空これはたまらんと慌て、虎の姿と變じ、忍術を使つて跡白浪と逃げ去つてしまつた。

さてどこへ逃げたのでせう。

(四) 五行山に監禁

眞君も悟空の忍術に目を眩まされ、どこへ逃げたか行先がわかりません。そこで李天王のもとへ行き、照魔鏡で四方を照らしてもらふと、悟空は眞君の郷里灌家口の留守宅に飛んで行き、眞君の姿に變つて、主人公然とすましてゐるのが寫つたから一同大笑ひです。眞君はすぐさま天を走つて留守宅に歸つてくると、家來の方では旦那が二人になつたといふ騒ぎ。贖主人の悟空、慌て、逃げ出すのを眞君追かけて雲の上で戦ひながら、またも華果山に引返して來る。

この時、天上の上帝は戦の成行に宸襟を惱し給ひ、觀世音菩薩や老君太仙などと共に、南天門の物見臺にお出ましになつて、下界の戦況を御覽になる。サーチライト主任の李大王が一層光力を強めて照しつけるから、眞君對悟空の大立廻りはまるで手にとるやう、丁度議院の傍聴席から、議員さんたちの取つ組み合ひを眺めると同じことだ。

觀音様と老君は心配さうに戦の様を御覽になつてゐたが、やがて二人で何か相談してから、老君は、懷中から鋼鐵の玉を取り出し、悟空目にかけてエイヤツと投げつけられました。天上と下界何千里あることか知らないが、その制球力のいゝことマツシユウソン、ジョンソン糞喰へで、狙ひあやまたず、

ハツシと悟空の眉間に的中した。

さすがの悟空もこれには堪えらん。ウーンと一聲泡を吹いて氣絶したから、眞君幕下の將卒や大とも、群がりたかつて高手小手に縛り上げ、一軍ワツと勝鬨を揚げて天上に凱旋する。二郎眞君はじめ戦功の人々にはそれ／＼論功行賞の御沙汰があり、大勝利萬々歳で天上界は旅順口陥落以上の大賊ひです。

一方捕はれた悟空は高等裁判の結果、騷擾罪強盜犯内亂罪等數罪俱發として斬罪に處すとの判決が下り、大力鬼王に首斬淺右衛門の役を仰せ付かつたが、刀の齒がこぼれるのみで、チツとも傷か付きません。さてはいつぞや不老不死の桃や、長命の仙丹を盗み食つたためだらうと、太仙老君の計らひで、八卦爐といふ鑛山の熔鑪のやうなものに入れて、焼き殺すことにしました。

この八卦爐は乾坎艮震巽離坤兌の八室に分れてゐるのだが、投込まれた悟空は考へた。元來巽は風で火は無い筈だから、こゝにゐれば大丈夫だらうと、巽室にもぐり込んでみると、果して大風だけで火は來ない。兩手で眼をふさぎ、呼吸をつめて七々四十九日の間無事にひそんでゐました。

隠亡の役人たちは、もう焼けて灰になつた頃だらうと思ひ、そつと蓋を開けて見ると、悟空は待つてゐたとばかり躍り出し、耳の中から如意棒を取り出して暴れ出したからまたも大騒ぎ。天上の將軍連押取刀で駆け付けたが、例の三面六臂になつて死物狂ひに戦ふのだから手がつけられない。

折しも西方天竺の釋迦如來様が迦葉と阿難のお弟子をつれて、天上に來られたが、この有様を御覽になつて將軍達の戦ひを止めさせられた。戦相手を失つた悟空は癪にさはつてたまりません。「貴様はこの何奴だ。何ゆゑ出しやばつて戦の邪魔をしたんだ。」
「わしは西方極樂の釋迦といふ者だが、お前の暴れるのを鎮めに參つたのぢや——一體お前は何か仙術を心得てゐるのか。」

「フン、この坊主め失敬千萬なことをいふ。俺は水簾洞の大王で不老不死の法から七十二通りの忍術を心得、また一時に十萬八千里を飛ぶ法も知つてゐるぞ。」

「さうか、しかしわしの手にあがつて、中から飛び出すことが出来るかね。」

短氣者の悟空はうまく、釋迦如來のカマにかゝつた。何をそれ式のこと、釋迦の手の上ををどり上り、筋斗雲に乗つて八九萬里飛んで行きましたが、そこに肉色をした五本の柱がある。悟空は手を抜いて筆の代りとし、眞ん中の柱に「齊天大聖こゝに一遊す」と書き、柱の下にコテコテ小便をして歸つて來ました。

「俺はまた、く間に九萬里の遠方に行つて、五本の柱にそのしるしを書き止めて來た。どうだ驚いたらう。」

大威張りで物語ると、如來カラ／＼と打ち笑つて、

「お前は、わしの手の中を往復して來たのぢや。五本の柱と見たのはわしの指だ。疑ふならこの指を見ろ。」

とて右手を開かれると、先刻自分が書いて來た文字が、墨のあとも鮮かに残つてゐます。

面目玉を踏み潰した悟空、吃驚して逃げ出さうとするのを、如來は手の中に擱んで西天門を出で給

ひ、五本の指を五行山と變じ、悟空をその山の下に封じ込んでしまつた。しかし息だけは出来るやう

にし、山の頂には禁錮の解けぬ六字の呪文の札を張付け、

「腹が空いた時は、この鐵の團子と銅のスープを食つて待つてゐろ。お前の災難が終れば、誰か來て

救ひ出すであらう。」

と仰有つてしづ／＼立ち去られました。成程、鐵の團子と銅の汁では容易に腹の減りつゝはないで

せう。



さすがにお釋迦の徳は廣大無邊、持餘した暴れ者の悟空を手もなく封じ込められました。上帝はじめ天上の神様方は非常な喜びやうで、下にも置かずおもてなしになる。やがて天竺雷音寺に御歸山に相成ると茲でも大した歡迎です。

「この處五百年相立ち申し候」

光陰矢の如く、その後いつしか五百年の歳月を経た。ある秋の盂蘭盆會に、釋迦如來が參會した大勢の佛菩薩達に相談されるには、

「下界四大洲の中で、南瞻部州の人氣が一番よろしくない。わしの持つてゐる三藏の經文を贈つて、人心善導の一助にしたいと思ふが、誰か受取りに来る人を探しに行つてはくれまいか。」

浪花節で民心を善導しようといふ、日本の政治家とは少し違ふ。その時即座にその役をお引受けになつたのは、平素から佛心の厚い觀音菩薩です。如來も好適任者としてお喜びになり、經文受取の人に遣はす袈裟、錫杖及び三つの金輪を託され、何彼と道中の注意を與へて御見送りになる。

觀音は弟子の惠岸をつれて流沙河といふ大きな川のほとりに差しかゝられた。頃しも物寂しい秋の末つ方、蕭條たるあたりの風物に心を奪はれてゐると、川の水をモク／＼巻き上げて躍り出した一人の大人道、いきなり杖を振つて兩人に打つてかゝつた。見れば藥罐頭で顔は赤黒くギョロ／＼團栗眼をした、恐ろしい醜男です。惠岸棒を揮つて應戦しながら、

「何奴だ、無禮を至すなツ！ こゝにおいてなるは觀世音様だぞツ。」

聲も鋭く叱りつける。入道これを聞くや否や持つたる杖を投げ捨て、ピタリと兩人の前に這ひつくばつた。

「どうか無禮の罪をお赦し下さい、それとは存ぜずとんだ失禮を致しました。」

「一體貴様は何者ぢや？」

「ハイ、不憫な身の上一通りお聞き下さりませ。」

芝居ならシンミリした下座につれて物語るところ——この入道は以前天上の御殿で官職についてゐたものだが、罪によつて荑刑の上下界に追落され、今はこの川の中にひそみ、往來の人を殺して食つては、飢ゑを凌いでゐたのです。

「今日も觀音菩薩とは知らず、捕まへて食はうとしたので御座います。どうぞ御慈悲に、この苦難からお救ひ下さい。」

涙を流してお詫びをするので、觀音も憐れに思し召し、

「聞けば罪の深い身の上だが、わしが捜しに行く高僧の供をして、釋迦如來のもとに行けば罪業が消ゆるに違ひない。それまでこゝで高僧の來るのを待つてゐなさい。」

「しかし私はこれまでお經受取の和尚を九人も殺しました。かうと聞いたら、もうこゝを通りませんまい……」

「いや心配致すな、屹度參る。その鬮も何ぞの役に立つことがあらうから、首にかけて待つてゐるがいゝ。」

頭を撫でてやさしく慰め、沙悟淨といふ法名を與へて立去られた。

その後數日、福陵山といふ高山に差しかゝられると、今度は豚そっくりな顔をした怪物が、鼻息で砂塵を巻き起し、熊手を揮つてかゝつて來た。これはもと天の川の役人だったが、生れ付きの色好み、ある時、酔つ拂つて嫦娥姫に戯れた罪により、下界に追放されたもので、豚のやうな顔をしてゐるのは、道を迷ひ猪の胎内に入つたためです。

これも觀音菩薩の御名を聞き、沙悟淨同様詫び入つたから、許して猪悟能といふ法名を與へ、なほその近くに、罪によつて空中に縛り上げられてゐた龍をも放しやり「お前は白馬に變じて天竺に行く高僧のお供を致せ。」といひつけて、また東へと向はれました。

斯くて旅路に目を重ね、悟空の封じ込められてゐる五行山へ差しかゝられた。菩薩は先年——といつても五百年前——悟空がこの山へ禁錮の刑に處せられてゐることを知つてゐられるから、どんな様子をしてゐるかを見にお立寄りになると、さすが強情我慢の先生も弱り切つてゐます。

「おゝ、あなたは太慈大悲の觀音さまでしたね、どうかお願ひですから私を救ひ出して下さいませ。五百年間誰一人見舞つてくれるものもなく、淋しくて苦しくてたまりません。」

「いや全く可哀さうだ——若しわしが今搜してゐる高僧に従つて天竺に行けば、お前の罪も消ゆるだらうとは思ふが……」

「もうすつかり後悔しましたから何でも仰せに従ひます。どうかその和尚様をよこして下さい。」
哀れた聲で嘆願するので、菩薩も氣の毒に思召し、かたく約束して立去られました。



頃しも今の支那、即ち中華民國は唐の太宗皇帝の御代です。かねて佛法に歸依してゐた太宗は、その頃さまざまな奇蹟に遭つたので、一層信仰の度を高くし、都長安に千二百の坊主を集め、大法會を営むことになつた。その時、選ばれて大導師になつたのは洪福寺の玄奘法師といふ和尚。數奇な運命に弄ばれつゝ一心不亂に修行を積んだ高僧で、お布施で妾狂ひをしたり、借金して訴訟沙汰を起したりする今時の和尚とは和尚の種が違ひます。

この時、觀音菩薩主従は、乞食坊主に變装して、長安の木賃宿に泊つてゐたが、玄奘法師の噂を聞いて、いよゝゝ釋迦如來の命を果す時が近づいたと思ひ、預かり物の袈裟錫杖を賣りに出かけた。

「サア〜袈裟は五千兩、錫杖は二千兩、この袈裟を着ると災難を免れ、地獄におちない。」
觀音様もなか〜プロバガンダがお上手だ。何しろ長安城内は、親鸞上人年忌の際の京都以上の

賑ひだから、人々の目にも入るし自然その筋の耳にも入る。皇帝聞し召して兩人を招き、くだんの二品を御覽になると、燦爛たる光輝、世の常の品とは違ふから、心をひかれました。

「實は今執行してゐる大法會の導師に贈りたいのだが、一體いくらで譲つてくれるのか。」

「イヤ、さういふ佛門を尊ぶ殊勝な御心からなら、決して錢はいりません、たゞで差し上げませう。だが、あの和尚さんは小乗の法ばかり説いて、大乘は知つてないやうですな。あれぢや亡者の濟度は出来ませんよ。天竺のお釋迦様の處に大乘を説いた三藏の眞經があります、誰かもらひにお遣はしになつては如何ですか。」

ツケノ、かういひました。太宗はこの乞食坊主利いた風なことをいふと思つたが、もらつた珍品の手前叱り付ける譯にも行かない。

「フ、ウ、お前が大乘を知つてゐるなら、あの法師に代つて説教してくれんか。」
すると觀音菩薩は別に辭退する風もなく、ツケノ壇上に登つたと見る間に、忽ち本體を現し、惠岸を従へ、雲に乗つて西の方に飛び去られました。皇帝はじめ文武百官僧俗男女、さては乞食坊主と思つたのは觀音様の御化身であつたかと、三拜九拜するもの、口をポカンとあけて見送るもの、千熊萬狀の有様。

まのあたりこの奇瑞を見た、太宗皇帝は深く感動し、西天竺に人をやつて、大乘經を手に入れた上、改めて法會を開かうと思ひ、來會の坊主連から志望者を求められる。その時、聲に應じて手を揚げたのは玄奘法師です。

「命がけで行つてまゐりますから、どうぞ私をやつて下さい。」

觀音様も思ふ盡でせう。太宗も大喜びで法師と兄弟の約を結び、一旦御殿にお歸りになる。

師思ひの弟子たちは、玄奘法師を圍んで、天竺の遠いことや、途中に魔物があつることなどを語り合ひ、師僧の身の上を氣遣ひましたが、玄奘の決心は斷乎として動かない。弟子たちも泣いて別れを惜しむばかりです。

いよいよ出立の日になると、皇帝は紫金の鉢、外國旅行免狀のほか、從者二人と乘馬を添へて賜はり、御自分も都のはづれまでお見送りになる。晴れの門出ではあるが、別離の情はなかく盡きない。

「何分身體を大事にして無事に歸つてくれ——それからお前は天竺へ三藏の眞經をもらひに行くんだから、今後は三藏法師といふ號を用ひたらよからう。」

かういつて手にしてゐる盃をさゝれた。三藏手を振つて、

「イ、ヤ、アルユール分は出家の禁物です。私は今まで一滴も飲んだことがありません。」

「かういふな、今日は特別だ。この一杯は餞別だから、快く飲んでほしい。」

三藏も融通の利かない禁酒會員ではなかつたから、さらばとグツと飲み干し、いよく十萬八千里先きの西に向つて、淋しい旅路に上りました。

これからいよく西遊記の本筋になるわけです。

天竺へ出發

(一) 緊箍呪

三藏法師が天竺に向つて旅立つたのは、貞觀十三年九月半ばのこと、世は秋に入つて天地蕭條、殊更行方はるけき旅の身には、物の哀れも一しほに感ぜられる。

數日の後、唐の西端河州を経て、とある峠に差しかゝると、一行は猛獸の精が仕掛けて置いた陷し穴にかゝり、從者二人はすぐ様モリ〜と食ひ殺されてしまった。翌日の御馳走にと取残された法師と乗馬は、幸ひに天界から遣はされた太白星老人に救はれて、そこを逃げ出したが、もとより人跡絶えたる山奥、食を乞はんにも家なく、人馬ともへト〜に餓ゑ疲れて、最早一足も動けないやうになりました。

時も時、前方から恐ろしい唸り聲を立て、突貫して來たのは二疋の大虎、後から火焰のやうな舌を

ペロ〜さして追撃して來たのは、五十尺もあらうといふ大蛇です。三藏法師は身も心もすくんでしまひ、今は命の終りと觀念してゐると、後の笹藪がザワ〜したと思ふが否や、虎も大蛇も慌て驚いた様子で、スタコラ山蔭に逃げて行つてしまつた。さてはこれ以上の妖怪が現れたかと振返れば、見上げるやうな大男、手に三叉の槍を持つて、突ツ立つてゐます。恐し嬉しの法師は地べたへ手をついて助命の禮を述べると、男は至つてやさしく、

「さうお禮をいはれちや困ります。私はこの麓の獵師で伯欽と申すものでがすが、始終獵をしてゐるんで、私を見るとあの畜生どもは皆逃げて行くんでがす。和尚様アお疲れのやうだから、マア私んところへ來てお休みなせえまし。」

と先へ立つて案内する。伯欽の家では恰度明日が父の祥月命日な所へ、出家をつれて來たので、母親はじめ大喜び。請ひにまかせて三藏は翌日一日滯留して讀經を勤め、いろ〜歡待を受けた上、翌朝、伯欽に送られてそこを出立しました。

半日ばかり行くと、非常に嶮峻な山に差しかゝつたが、山の中ほどで、伯欽は急に歸り支度をほじめた。

「この山は兩界山といつて向う側の半分は韃靼國でがす。向うの獸は私を見てもこはがりませんから、お名残惜しうがすが、こゝでお別れ致しやせう。」

三藏はかくと聞いて袂を引留め、行先の心細さに別れ兼ねてゐる時、麓の方に當つて「和尚様、こゝへ来て下さい、来て下さい。」と物凄く呼び聲が聞えました。

猛獣に懲り／＼してゐる三藏、恐れをのゝいて、伯欽に尋ねると、この山は昔、五行山といつて、暴れ者の猿が、お釋迦様のために、石の箱に封じ込められてゐることを話し、三藏を、そこへ案内する。果して石箱の中に、猿が眼をパチクリしてゐたが、三藏が來たのを見て、嬉し／＼に呼びかけました。

「和尚様は、天竺へお經を授かりに行く方ぢや御座いませんか。」

「如何にもさうだ、が、お前はそれを聞いてどうするのぢや。」

「あゝ嬉し／＼——私は今日まであなたのおいでを待つてゐたのです。先だつて觀音様がこゝへお寄りになつて、天竺へ行く和尚様のお供をして行けば、罪が消えると仰有つてゝしたから、どうぞ私を救ひ出して、お伴れなすつて下さいませ。」

石箱の間から手を合せて拜む。三藏も不憚に思つたが、さて、どうして救ひ出さうかと考へてゐると、悟空はその様子を見て、この山上に貼つてある金字の制札を剝けば、こゝから出られると申します。

三藏はそのいふ通り伯欽と一緒に山頂に上つて見ると、釋迦如來の筆と覺しく、六字の呪文を記した札が大きな石に貼りつけてあります。三藏恭しく禮拜してからその札を剝ぎ取らうとした時、いづこよりともなく、何ともいへぬいゝ香りの風が吹いて來て、札を虚空に巻き上げ、見る／＼西の方へ飛んで行つてしまつた。

自分が手を下さぬのに、札が剝けて飛んで行つたのは、吉か凶かわからないが、兎に角悟空にこのことを告げるため、兩人は再び山を下りました。



三藏法師は再び山を下りて來て、制札がひとりでに飛んでしまつた話をする、悟空は非常な喜びやう。

「あれさへ無くなれば娑婆へ出られます——今こゝを飛び出しますが、びつくりなさるといけないから、どうぞ遠のいてゐて下さい。」

三藏と伯欽は何のことかわからないが、そのいふ通りなつて山を下る。暫くするとポイントと二尺玉の花火でもあがつたやうな大きな音がして、クル／＼空中に舞上つた猿が、チヨコンと法師の馬前に落下して來て三拜九拜しました。

「おかげさまで満期放免の身になりました。これから和尚様の荷物でも何でも背負つて、天竺へお供

をして参ります。」

伯欽もこれで安心して兩人に暇を告げ、悟空は行李を荷ひ、三藏の馬前に立つて西の方へと向ひました。

時はすでに秋の末でしたが、何しろ悟空は禪も持たぬ素ッ裸で、五百年間の監禁から出て来たのだから、寒くもあるし第一體裁が悪い。裸で道中がなるものか、何か著物がほしいと思ひつゝ歩いてゐると、とある谷間から突然一疋の大虎が現れて、三藏に躍りかゝつた。

法師は驚いたが、悟空の方は上等の著物が飛び込んで来てくれたと大喜び。久し振りで耳の中の如意棒を取り出し、ポカリ虎の頭を喰はせると、たゞ一打ちでコロリとまゐる。悟空は一本の毛を抜いてこれを小刀にし、クル／＼虎の皮を剥いだかと思ふと、今度は法意棒を縫ひ針にちぢめて、チクチク立派な腰巻に縫ひ上げました。

先刻から、あつ氣に取られて見物してゐた三藏は、途方もない強い奴もあるものだ、びつくりして、

「お前はどうしてそんなに強いのだや、そして、その棒になつたり針になつたりするものは、一體なんだ。」

聞かれた悟空は得意満面、オホンと一つ氣取つた咳拂ひをした上、

「私は仙人から通力を授かつてますから、こんな虎の一疋ぐらゐはお茶の子さい／＼ですよ。又この棒は龍宮からせしめて来た神珍鐵如意棒と申しましてな、のばせば天にもとゞき、ちぢめると耳に入るといふ調法な品です。ハイこの通り……」

と歸天齋正一よろしくで、ステツキの使ひ分けをお目にかける。三藏はこれはいゝ家來を得たと心強く思ひ、馬を早めて西へ／＼と進まれました。

やがて秋も過ぎて冬の初めとなり、物寂しい枯れ野の中をトボ／＼歩いて行くと、道のそばから現れたのは六人の山賊、いづれも鈴ヶ森の雲助みたいな獰猛な奴。

「オイ、命が惜しくば身ぐるみぬいで置いて行け。四の五のいふとぶつた斬るぞツ。」

いふことはエラさうだが、芝居にしても由來こんなのは下廻りの役、あとで散々な目に逢ふにきまつてゐます。悟空は平氣の平左で、馬上に慄へてゐる三藏をかばひながら、

「和尚様、御心配遊ばすな——フン、お前等はまだ駄け出しの小泥棒だな。このオレを知らんか、オレは貴様等の大親分だぞ、さアこれまで盗んだ品物を残らず俺に献上しろ！」

からはかれた山賊は、嚇となつて八方から斬つてかゝつたが、悟空の體には傷一つ付かない。スマし込んでセ、ラ笑つてゐるので、山賊ども目を見合せて呆れ返つてゐます。悟空は悠々と耳の中から如意棒を引張り出して、

「サア、今度はオレの鐵の棒をくらつて見ろッ。」

といふが早いか、驚いて逃げ出す六人を追ひかけて一人残らずたゞき殺し、その中のよさうな上著を剝いで一著に及び、これで身支度も出来たわいと、にこ／＼もので戻つて來ました。始終を見てゐた三藏は、眉をひそめて御機嫌甚だ斜めです。

「如何に悪者だからといつて、何も殺すには當らんではないか。なんでアんな亂暴をしたのぢや。」折角の手柄をたしなめられて、悟空は大いに面白くない。

「だつてそりや御無理ですよ。今私が泥棒どもを殺さなけりや、あなたが彼奴等に殺されてしまふぢやありませんか……」

チエツと口の中で舌打ちをすると、三藏の眉はヒリ／＼と動いた。

悟空の言譯を聞いた三藏は、やゝ語氣が荒くなつて、

「わしは出家だから、たとひ人に殺されやうが、人を殺すやうなことはせん。お前は佛門に入つた身で、あんな亂暴をするやうでは、天竺へ行つたところで果報を得ることは出来まいぞ。」

性來氣短な悟空、かういはれるとぐつとしやくにさはつた。

「ハ、アさうで御座んすかい。どうせ天竺に行つても無駄なら、こゝらで失敬してしまひませう。」左様ならとも何ともいはず、ヒヨイと雲に乗つたかと思ふと、スタコラ東の方へ飛んで行つてしま

ひました。

三藏も仕方がないから、荷物を馬の背に乗せ、自分で手綱を引いて歩いて行くと、一人の品のいゝお婆さんに行き會つた。

「和尚様はどちらへおいでよ？ なに天竺とへ——十萬八千里もある國へたつた一人で行かうとは、さて／＼向う見ずな……」

「いや、先刻まで弟子を一人つれてゐましたが、まことに一酷者で、わしの説諭を氣に食はんと申し、東の方へ逃げ歸つてしまひました。」

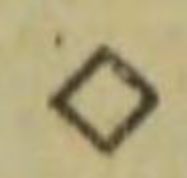
「さうでしたか、私も恰度東へ歸りますから、そのお弟子によく話をして、こゝへ戻るやうにしてあげませう。」

それからお婆さんは、手に持つてゐた風呂敷包みを解いて、中から著物と帽子を出し、「この二品をあなたに差上げるから、そのお弟子が歸つて見えたら、これを著せなさるがい。そして若しもお弟子が悪いことをした時は、呪文をお唱へなさい。」

と三藏の耳に口をあてゝ、クシヤクシヤ緊縮呪といふ呪文を授けたと思ふと、忽ちお婆さんの身體から後光がさして、東の空を靜々と渡つて行つた。

三藏これを望み見て、さては觀音様の化身であつたるか、あな有難や勿體なやと後姿を伏し拜み、

教はつた呪文を暗誦しながら、悟空の歸參を待つてゐます。



一方中ッ腹の悟空は、花果山の古巢をさして飛び歸る途中、東海龍王のもとへ立寄つて脱走の願末を打ちあげたが、一向に同情してくれませぬ。

「そりや悟空さん間違つてゐますよ。今花果山に歸つたところが、やうやく猿の大將で終るだけぢやありませんか。早くその和尚様のところへ戻つて、天竺へおいでなさい。」

かういはれて見ると、どうも自分が早まつたやうでもある。悟空は頭をかゝへて小半時考へ込んでみたが、元來が率直な質だから後悔することも早い。

「さうだ、俺が悪かつた——やつぱり歸つて行つて、和尚様のお供をしよう。」

雲に乗つて今來た方へ飛んで歸る途中、觀音菩薩にあつてヒヤカされたが、テレ隠しをいつて通り過ぎ、やがて以前の處へ著いて見ると、三藏はぼんやり路傍に立つてゐます。悟空は頭掻き／＼前に出て、

「和尚様は、まだこゝにいらしたんですか。」

「さうぢや、お前の歸るのを待つてゐたのだが、一體お前はどこへ行つて來たのぢや。」

「なにその、ちよつと龍宮へ茶を飲みに行つて來たんで……」

「さうか、それはよかつた。わしも大分腹が空いて來たから、その風呂敷包からほし飯を出してくれ。」

三藏もなか／＼人が悪い。先刻觀音様から教はつたお呪ひを試して見ようとすするのだが、悟空は何も知らずに開けて見ると、ほし飯の外に着物と帽子があります。

「和尚様、これはお國から持つていらしたんですか。」

「さうぢや、わしが幼少の頃用ひた品ぢや。その帽子をかぶれば習はずに經が讀めるし、著物をきれば自然に禮儀がわかる——」

いはゆる佛家の謠も方便、三藏がいゝ加減なことをいふと、悟空はうまく畏にかゝつて、急にこの品がほしくなりました。

「私の上着は泥棒のお古ですし、帽子も持つてゐません。どうぞこれを私に下さいませんか。」

三藏心中にほくそ笑みながら、惜し／＼顔をした擧句にやつとやることにすると、悟空は嬉し喜んですぐそれを着け始める。三藏はこれを見ながら口をもぐ／＼して、緊縮咒を唱へようと待つてゐます。

やがて悟空が著物をつけ、帽子をかぶつたのを見すました三藏、をそはつた通りの咒文を口の中で

ムニヤ／＼やると、サア大變、悟空は頭をかゝへて地べたへブツ倒れた。

「痛い！ 痛い！！ 助けてくれーい。」

悲鳴をあげてころがりながら、帽子をぬがうとして、滅茶々に引破いたが、中の金輪が頭の肉にくひ込んで離れ、ばこそ。三藏も不思議なき、目に驚いて、咒文を止めて見ると、悟空の痛みはケロリとなほつたが、忽ち眞赤になつて怒り出し、三藏目がけて打つてかゝつた。

「この糞坊主、俺をひどい目にあはせたなツ。」

三藏はすまし込んでまたムニヤ／＼、悟空は如意棒を投げ出し、頭を抱へて涙ボロ／＼。

「あゝ痛い／＼——和尚様、どうぞ堪忍して下さい。」

「これからわしのいふことをきいて、悪いことをしないか。」

「えゝ、何でもきゝます、決して悪いことを致しませんから……」

讀者諸君の中には覺えのある方もあるでせう。何か悪戯をして、お父さんに折檻される時とおんなじ状態です。三藏が咒文をやめると痛みもぴたりと止まる。悟空は金輪のいはれ因縁を聞いて、

「これは観音様が、私を天竺までお供させようとなさつてとせう。もう決して和尚様を棄てたりなんか致しませんから、どうぞ今の咒文だけはやらないで下さい。」

「さすがの暴れ者も、この金輪には閉口頓首したと見え、まめまめしく立動いて三藏を馬に乗せ、自分分は荷物を背負つて、また西に向けて出立しました。」

(二) 黒風魔王降参

數日の後迎り著いたのは、蛇盤山麓の鷹愁澗といふ谿川。三藏馬を駐めて四方の景色を眺めてゐるうちに、川の中から五六丈もあらうといふ龍が現れて躍りかゝつて來た。悟空は慌て、三藏を馬から抱き下し、遠くの小山に避難させてから、もとの處へ歸つて見ると、三藏の乗馬は龍にさらはれて姿が見えない。悟空齒齧みをして口惜じがり、例の如意棒を引延して、鰻か鱒でも追ひ出すやうに、滅茶苦茶に川の中を引掻き廻す。

折柄、龍は馬を平げてしまつて、これから晝寢でもしようと思つてゐたところだつたが、川が泥に濁されたのでゐたゝまらず、躍り出して悟空にくつてかゝる。兩々祕術を盡して奮戦するうち、龍の方はとてもかなはぬと思つたか、小さな蛇に變じて草叢の中に隠れてしまひ、いくら捜しても見付かりません。

悟空は業を煮やし、界限の氏神を呼び出して龍の素性を聞いて見ると、先に觀音菩薩が通りかゝつて、放して行つたのだといふ話。しからば觀音様を訪問して一談判試みようとするころへ、その

意が天に通じて、観音様のお弟子が連れて来てくれました。

悟空は観音様には二日も三日も置いてゐるのですが、こゝで一つトツちめてやらうと思ひ、ムキになつて詰め寄りました。

「あなたは慈悲大悲の菩薩といはれてゐる癖に、私の頭にこんな金輪をはめさせ、私を苦しめるとは何事ですか。第一にこれを伺ひませう。」

「若しさうせぬと再び悪いことをして、天界を騒がすだらうと思つたからぢや。お前に佛果を得させようとの、慈悲からしたのが分らぬのか。」

「そんならこゝへ龍を放して置いて、和尚様の馬を食はせたのはどうしたんです。これも慈悲ですか、さあ承はりませう。」

「いやあの龍は經を授かりに行く人の乗用にするつもりで、待たして置いたのだ。お前が何もいはないから知らずに馬を食べたのだらう。」

そこで観音菩薩は、お弟子に龍を呼び出させ、柳の枝でその身體を撫でると、忽ちたくましい白馬と變りました。観音様は更に柳の葉を三枚摘み、三本の毛にして悟空の後頭部に植ゑつけ、

「これはお前へ命手ぢや、若し大難に遇つたら、これを抜いて危急をのがれるがいゝ。必ず三藏を大事に守護して行けよ。」

といつて雲に乗つて南へ去られました。

悟空は不足な三本の毛をもらつて、立派に人間並になつたわけです。



三藏師弟はまた西に進むこと二ヶ月餘り、はや冬も過ぎて草木も芽ぐむ春の初め、とある山中に「観音禪院」といふ大きな額を掲げた廣大な寺に、一夜の宿を求めた。

この寺の老住職は親切に二人をもてなしたが、三藏が釋迦如來から授かつた錦欄の袈裟を見るや、忽ち慾心起し、廣謀といふ心悪い和尚にすゝめられ、三藏師弟の寝てゐる禪堂に火をつけて二人を焼殺し、袈裟をうばひ取らうとしました。

しかし通力を持つ悟空はこれに氣付かぬ筈がありません。「よし、それならこつちで裏を搔いてやらう」と、廣目天王といふ火除けの神様のところへ飛んで行つて、防火幕を借り、禪堂にだけかぶせたから、火焰は四方に散らばつて本堂、方丈、鐘樓、悉く燃え上る騒ぎ。悟空は禪堂の屋根によち登り「ふゝん、態あ見やがれ」とあざ笑つて見物してゐます。

ところがその近所の黒風洞にゐる黒風大王といふ男、火事見舞に駐け付けたが、よくあるやつで火事場泥棒と變じ、どさくさ紛れに錦欄の袈裟を盗んで行つてしまつた。後でそれを知つた二人は大狼

狼。だん／＼聞いて見ると、犯人はどうも黒風らしいといふので、悟空は舂斗雲に飛び乗り、今でいふ空中偵察と出かけた。

黒風洞では大王が近傍の悪仲間を呼び集めて、件の袈裟をいせびらかしてゐます。

「昨夕はからずこの袈裟を手に入れましてな、その心祝ひに一杯差上げようと思ひ、皆さんをお呼びしたんで……」

「いやあこれは立派なものだ——稀代の珍品だ。」

など、客はほめそやしてゐます。悟空空中から瞳を凝らして見ると、主人は黒熊の精で、仲間の客といふのもそれ／＼妖怪變化のものらしい。悟空はいきなり雲を飛び降りて、

「この化物め、盗んだ袈裟を返せッ！ 愚圖々々すると皆殺しにしてしまふぞ。」

と呼ばはつたり。黒風一時は驚いたが、大身の槍を取出して来て勢ひ鋭く立向ひ、戦ふこと數十合。やがて日の暮近くなるや黒風は洞の中に飛び込み、ぴたりと石の門を閉ぢてしまつた。

悟空もこれには致し方なく、殊に師の僧も待ちわびていらつしやるだらうと思つたので、一旦矛を収めて観音禪院に引揚げました。

翌朝になつて悟空は考へた。暇どつてゐてあの袈裟をよそに隠されてもしては一大事、これは一つ、観音様のお力を借り、平和手段によつて回収するに如かずと、例の舂斗雲に乗つて南天に赴き、観音を引張出して黒風洞にやつて来る。途中行き會つたのは一人の修験者、黒風のもとへ贈り物に行くものと見えて、長命の仙丹二粒をビードロの皿に入れて持つてゐます。

悟空これを見るや、如意棒を振上げ一撃の下になぐり殺して、その仙丹を奪ひ取り、

「此奴は狼の精ですからかまひませんよ——観音様、どうかあなたは今の修験者になつて下さい。私は丸薬になつて黒風の腹に飛び込み、あばれ廻つてあの袈裟を出させませう。どうです、この計略は面白いでせう。」

観音菩薩も悪戯がお嫌ひでないと思へ、よし／＼とうなづかれてすぐ修験者に變られた。悟空も丸薬に化けて皿の中に入らば、観音は勿體らしく捧げて黒風洞をお訪ねに相成る。

黒風は何も知らないから、大喜びで早速献上物を嘔下すと、悟空胃袋の中にかつぽれ、ステ、コ、フラ／＼ダンス、あらゆる藝術を發揮したからたまらない。腹をおさへて、

「助けてくれーい、死んぢまう、死んぢまう。」

と悲鳴をあげて苦悶します。菩薩はそこで本體を現し給ひ、

「命が惜しくば、盗んだ袈裟を返すがよい。」

おごそかに申し渡されたので、黒風は急いで手下を呼び、袈裟を持つて来るやういひつけました。悟空は愉快でたまらず、盲腸直腸の方まで舞下つて、滅茶苦茶に踊つてゐます。

黒風の腹の中でダンスをしてゐた悟空は、目的の袈裟が返つたのを見て、今度は鼻の奥に戻りムツムツ突付く。黒風たまらずハクシヨンと大きなくしゃみをした拍子に、鼻の孔から飛び出したのを見たと、喧嘩相手の悟空だから、

「よくも俺をひどい目にあはせたな。」

と、いきなり槍で突きかゝりました。

この時、観音菩薩は、かねて用意して来た金輪を取出して、黒風の頭に載せ、ムニヤ／＼おまじなひをいふと、恰度悟空が三藏にやられたやうに頭をかゝへて七轉八倒、

「あ痛つ／＼、御免なさい／＼。」

泣き叫んでお詫びをする。全くどんな奴でもこの金輪にはカナワない。日本にもこんな重寶な品があつたら、早速議會の惡彌次暴力議員あたりへ嵌めてやりたいもんです。

(三) 八戒お目見得

菩薩は黒風を赦し、お弟子にしてつれてお歸りになり、悟空は袈裟を持つて観音禪院に待つてゐる三藏のもとへ戻り、やがてそこを出立する。一週間ばかりの後、烏斯藏國に着いて、高太公といふ金

持をおとづれ宿を求めますと、何か取込事があると思えて、ザワ／＼騒いでをります。

主人は三藏師弟を請じ入れて、嘆息しながら語るには、

「三年前私の娘に婿を取りましたが、初めは人柄ない、男でしたのに、だん／＼本性を現して、今ではまるで豚同様になりました。飯を普通の三十人前も食ふのはまあ我慢も致しますが、この半年ばかり前から、娘を離れ座敷に閉ぢ籠めて誰にも遇はせません。今日も修験者を頼んで来て、あの化物を退散させようとしてゐるところで御座います。」

悟空はこれを聞いてこともなげに打ち笑ひ、

「御主人、何も心配することはありません。私がきつと退治してお目にかけます。」

直ぐ離れ座敷に行つて見ると、婿は留守で、娘はひとり薄暗い室に泣き倒れてゐる。悟空は娘を本宅へ歸らせ、自分はその女と同じ姿になり、すました顔して寢室の中で待つてゐました。

暫くすると豚婿はどこからか歸つて来て、眼尻をダラリと下げ、フ／＼／＼鼻息をはずませながら近寄つて来た。悟空は文字通りの肘鐵砲を一發ズドンとくらはせたが、贖物の女房とは氣が付かないから、御機嫌をとらうと猫撫で聲で甘い言葉をかけます。

「お前は何か怒つてゐるのかい。俺の歸りが遅かつたので、すねてゐるのかい。それならこの通りあやまりますよ。」

世間のあまい御亭主にはよくありさうな圖ですな。悟空は心中可笑しくてたまらないが、わざとしをれた風をして溜息をつき、

「いゝえ、そんなことぢやありませんのよ。實は今日お父さんが門の外に来て、お前はどこが良くてあんな豚みたいな男と夫婦になつてゐるんだ。家の恥になるから行者を頼んで来て追拂つてもらふなど、それはくひどい悪口をいふんです。わたしそれが心配でなりませんわ。」

悟空なかく、聲色がうまい。豚君安んしたといふやうに笑つて、

「そんなことを心配するひとがあるもんかね。俺は變化の術も心得てゐるし、九本足の熊手も持つてゐるし、どんな強い奴が来たつて負けはしないよ、大丈夫だよ。」

「ですけど、お父さんは孫悟空とかいふ、とても強い人を頼んで來るといふんですもの……」

豚君はこれを聞くと、顔色をかへて立上り、

「それや大變だ！ 奴に來られちやとてまかないつこはない。」

この時、悟空ほんたうの姿にかへり、むんづとばかり豚君の袂をつかまへたから喫驚敗亡。袂を振り裂いて外に飛び出し、雲に乗つて一日散に逃げ出す。悟空も、筋斗雲にまたがり、のがさじと追ひかける。

暫くは悟空豚君を追跡の光景——。

豚君雲に乗つて懸命に逃げ出したが、悟空の筋斗雲とはスピードが違ふ。古巢の福陵山に著かるとするころ、たうとう追つゝかれてしまひました。

豚君は絶體絶命、仕方がないから振返つて熊手を振りかざしつゝ、から威張りをはじめた。

「そもく俺を誰だと思ふ。昔、天の川の將軍だつたが、酔つ拂つて天女にふざけたゝめ、今は下界に追ひ拂はれてゐる猪剛鬣だぞ。五百年前、天界を騒がせた前科者の山猿め、なんで俺にかゝるのだツ。」

今の先、女房だと思つてでれくしたのを、ちやんと知つてゐられるし、それに女犯で追放を食つたのを、縮りのない口で偉さうに威張つて見たところが、一向に睨みが利かない。悟空はブツとぶき出して、

「おい薄のろ、威張るなよ。俺は今改心して三藏法師の弟子になり、天竺へお經をもらひに行く途中だが、高太公に頼まれて貴様を退治に來たんだ。さあ降参するか、それともこの棒で眠らせてやらうか、どうぢや。」

これを聞いた豚君、からり熊手を投出し、悟空の前に這ひつくばつた。

「兄貴、そんなら早くさういつてくれゝばいゝのに。實は私もね、觀音様に承はつて、その和尚様の來るのを待つてゐたんですよ。」

悟空は初め信用しなかつたが、だん／＼話を聞いて見ると、諷でもなさうなので、兎に角、同道してつれ歸る。三藏も改悛の情顯著なりと見て、特にこれまでの罪を赦し、新たに弟子にして八戒といふ法名を下さいました。

(四) 毒瓦斯魔王

新弟子の八戒は悟空に代つて荷物かつぎの役、師弟三人高太公のもとを辭して旅路をかさね、黄風嶺といふ山にさしかると、この山の主黄風魔王の配下で、虎先鋒といふ虎の精が現れて三人に打つてかゝつた。八戒はお目見得に手柄を現さうと、例の熊手を振り／＼馬力をかけて奮闘したので、虎先鋒もかなはぬと思つたか急にスタコラ逃げ出す。八戒と悟空は一緒になつてこれを追ひかけて行きます。

しかしこれは虎先鋒の策略で、途中でぬけ殻の忍術を使ひ、身の皮をぬいで石に打ちかけ、本身は三藏法師のところへ飛んで行つて、一つかみにさらつて行きました。二人はそれとは知らないから、曲者見つけたとばかりポカ／＼なぐつたが、びくりともしない。よく／＼見ると虎の皮をかぶせた石だから驚いた。

「さては彼奴にだまされたか、こりやかうしてはをられんぞ。」

急いで前のところへ歸つて見ると、南無三寶、三藏の影も形も見えませぬ。

兩人は慌てふためき、手分けをして山を捜し廻る中に、『黄風洞』といふ額をかけた大きな洞穴が見つかつた。さすが文字の國だけに、妖怪魔物の類ひまで看板を出して／＼くれるから調法です。悟空は扉の隙間から覗いて見ると、虎先鋒と黄風魔王は三藏を中にして、

「この坊主、おいしさうな坊主ぢや。煮て食はうか焼いて食はうか、それとも、フライにでもしようか。」

と料理方研究中といふ危急な場合。悟空はカツとなつてドン／＼われるやうに門をた／＼く。

「和尚様を返せ。返さんと貴様達を皆殺しにするぞッ。」

「おや、猿が來たらしいな。ようし、ついでに彼奴も打ち殺して食つてやらう。」

黄風魔王は三つ股の槍を提下て現れ出で、戦ふこと約三時間、これは虎先鋒よりずつと手ごはい。そこで悟空は一掴みの手を抜いて、息を吹かけ、數千の小悟空に變じて魔王に飛びかゝらせたが、魔王は大きな口をあき、ふ／＼と息をつくと、黄色な風が起つて虚空はるかに吹き飛ばされてしまふ。その上にこの風が悟空の眼にはひり、涙がポロ／＼流れてとても開いてをられませぬ。まご／＼してゐると、突き殺されさうだから、残念ながら一先づ逃げ歸りました。

この時分に、こんなきゝ目の強い毒ガスがあつたんだから、偉いもんでせう。



無残なるかた孫悟空、黄風魔王の毒氣にあてられ、俄盲の浅ましき。探り探つてやう／＼に、八戒のあるところへ歸つて来た。

「あゝあ、こんなひどい目にあつたことはない。眼玉が痛くてとてもたまらん。どつかこの邊に眼科の先生がないか見付けて来てくれないか。」

「そりや兄貴、無理だよ。こんな山の中に眼科醫院があるものかね。」

「それもさうだな。しかし早く眼をなほさないと、和尚様の身の上が心配だからなあ。」

八戒も心配でないことはないが、さてひとりで押しかけて行つて、黄風魔王と戦ふ勇氣もない。まさか今晩中に和尚様を食べもしまいから、萬事は明日のことにしようと、仕方なく／＼山を下つて、一軒の民家に宿を求めました。

この家は老人の獨り暮しだつたが、一行が遭難の話を知りていろ／＼といたはつてくれます。

「それはさぞお困りでしたらう。あの魔王の風に吹かれると、凡人なら即死してしまひますぢや——左様、この邊には別に眼醫者といつてはないが、幸ひ私のうちに風眼の妙薬がありますから、これを

つけて御覽なさい。」

悟空はその薬をさしてもらつて、八戒と一緒に眠りにつきましたが、翌朝眼をあいて見ると、痛みも霞も取れて、いつもよりもよく見えるくらゐ。しかも驚いたことには、家も老人もいつの間にか無くなつて、二人は柳の下にゴロ寝してゐるのです。ふと見れば柳の枝に詩の短冊が下げてあつて、都々逸に譯すと「お前の眼病なほつた上は、悪魔退治にすぐおいで」といふ意味が、まがふ方なき観音菩薩の筆蹟で書付けてあります。悟空は南の方を伏し拜み、

「あゝ有難い、これもみな観音様のお蔭だ——八公、俺は、兎に角、和尚様の安否を見に行つてくるから、お前はこゝで荷物と馬の番をしてゐてくれ。」

いふが早いか一疋の虻に身を變じて、ブーンと黄風洞に飛んで行く。

三藏は前日来、庭の榛の木に縛り付けられ、今にも食はれてしまふことゝ嘆いてゐたが、ふと、一疋の虻が飛んで来て自分の坊主頭の上にとまりました。しかし追ふことも出来ないから、むづ痒いのを我慢してゐると、悟空の聲で、「和尚様、和尚様」と呼ぶのが聞えます。三藏は地獄で佛に遇つた心地。

「悟空かい？ お前はどこにゐるのぢや、早く来て助けてくれ。」

「へい、私は失敬して和尚様のおつむの上にと止つてゐます。今日の中にはきつと救ひ出してあげます

から、安心して待つてゐて下さいませ。」

かういひ置いて、今度は黄風魔王の部屋に飛んで行つて見ると、恰度斥候に出した手下が歸つて来て、敵状を報告してゐるところです。

「申し上げます。唯今山を廻つて見ますと、豚のやうな坊主が、ポカンとして馬の番をしてをりましたか、昨日の髯ッ面はどこにも見えません。」

「うん左様か、あの猿はきつと風にあたつて死んだのだらう。もう靈吉菩薩さへ来なければ、何も恐ろしいものはない。」

いま魔王がいつた靈吉菩薩といふのは、天帝の命で風を止めることの出来る定風丹を預かり、魔王のお目付をしてゐる佛様です。悟空はいふことを聞いたと喜んで、すぐ筋斗雲に乗り、小須彌山に住む靈吉菩薩をおとづれ、三藏救助方の陳情をする。菩薩諒承、飛龍寶杖といふ飛行するステッキを携へて、悟空と一緒に出勤になりました。

悟空は菩薩から計りごとを授かり、門をメチャクチャにたゞいてあらん限り魔王の悪口をいふと、案の定カン／＼に怒つて、門の外におびき出されて来た。

「このコケ猿め、性懲りもなくほんたうに殺されに來たなッ。」

と二本槍を振つて躍りかゝり、暫く悟空と渡り合つてゐたが、やがてカツと口を開いて得意の毒瓦斯を吹出さうとした。

黄風魔王が毒瓦斯を發散しようとした時、天上の靈吉菩薩、バツと定風丹を投付けると、アツ／＼と息が詰まつて、まるで啞者が疝氣でも起したやう。更に今度は飛龍寶杖を投下すると、忽ち金色の龍と變り、魔王の頭をつかんで、雲の上に引張り上げてしまふ。見れば魔王は本體の小鼠に返りチヨロ／＼菩薩の前を走り廻るさま、今までの悍猛傲岸と比べれば、全く他愛ないもんです。

もう恐ろしい敵がゐないから、悟空は駆け入つて三藏を助け出し、八戒は抜け目なく兵糧を分捕り、靈吉菩薩に厚く恩を謝した上、また西の方へと足を向けました。

(五) 沙悟淨も入門

「寒蟬敗柳に鳴き、大火西に向つて流る」といふんだから、蟬の聲も終り近くなり、太陽は赤道を越えて南緯に移つた秋の初めのことでせう。進むほどに、一行は見はてもつかぬ大きな河に行當りました。河べりには『流沙河、廣さ八百里』と記した石碑が建ち、濁水滔々、岸をも押流さんばかりの勢ひです。

こゝを一番芝居でやるならば、「そうれ黄風山の西方に、落合ふ水の流沙河、頃しも秋の習ひにて

…雨後の川水いやまさり、矢よりも早き急流は、すさまじくもまた恐ろしき」とか何とか、本を斜に構へた大薩摩と、踏臺に片足乗つけた三味線よろしくあつて、浅黄幕をサツと切つて落す。書割には、遙遠い高山を見せ、フワ／＼動く布片の波の間から、急調子のツケと諸共に、頭のスツ禿げた色の黒い大人道が、半月の槍を上段に構へたまゝセリ上りになり、キツと見得を切らうといふところで、す—もつとも、この入道、生れつきの團栗眼だから、わざ／＼骨を折つて目玉をむく世話はいりません。

閑話休題。この大人道は先きの回で一度紹介して置いた、鬮腰を首飾りにしてゐる沙悟浄といふ和尚です。三藏目がけて鋭く打つてかゝるのを、八戒遮り止めて戦ふこと二十餘合。勝敗いづ果つべしとも見えないので、悟空が横合から助太刀に出ると、こはかなはじと思つたか、身を翻して河の底に逃げ込んでしまつた。

八戒こゝで水の底を覗き込み、さつきの悟浄を真似てチョツと見得。

「俺は昔、天の川の船頭を勤めてゐたから、水泳の大名入だ。はげ入道どこへ隠れたつて、逃してなるものか。」

いひも終らずふんどし一點の丸裸になり、ドブと川に飛び込んだ。

もとより八戒口ほど水が達者でないから、いゝ加減戦つて水の上を走り出て来る。悟空は後に廻

つて、追つかけて来た入道をはさみ撃ちにしよつとすると、早くもさつてまた水中に逃げ込み、それからはいくら八戒が誘ひをかけに行つても現れて来ません。ひとりでは敵ひもせぬ癖に、かうなると八戒は不服な顔をします。

「ナーンだ、俺が一人で退治しようとしてゐると、兄貴が横つちよから手出しをするから、逃してしまつたんじゃないか。」

「八公、さうやかましくいふな。今日はもう遅いから、明日ゆつくり謀事をめぐらして、生捕にしようぢやないか——和尚様も今晚はこの川岸でおやすみ下さい。」

悟空はかうなだめて寝ながらいろ／＼と考へて見たが、どうもいゝ智慧が浮ばない。かなはぬ時の神頼み、矢張り観音様におすがり申す外はないと、翌朝雲に乗つて普陀落山をたづね、ありし様子を物語つて助力を乞ひました。

観音菩薩はニヤ／＼お笑ひになつて、

「お前はまた強がつて、經文を授かりに行くことをいはなかつたんだらう。あの入道には先年天竺へ行く和尚に、供をして参るやう言合めて置いた筈ぢや。それさへいへば何でもないので、くだらんことをして厄介を持込む奴ぢやな。」

と木父といふお弟子を呼び、自分に代つて沙悟浄を説得して来るやう仰せ付けになりました。

ヤツカイモツカイといふ語呂は、けだしこの時から始まつたんだといふ話。



木父は觀音菩薩から大きな瓢箪をあづかり、悟空と共に流沙河に来て、沙悟淨の名を呼ぶと、忽ち浪をはね上げて躍り出しました。

「木父さま、何か觀音菩薩からの御用で御座いますか。」

「いつぞや菩薩が仰有つた天竺へ行く和尚さんが見えてゐるのに、貴様はなんでお供をして行かぬのぢや。」

「エ？ その和尚様は一體どこにおいですか。」

「あの川岸に坐つてゐるのがさうぢや。」

聞くと悟淨はうろたへて著物の前を掻き合せ、三藏の前に走り行き、平蜘蛛のやうになつてお詫びをする。

「私の眼玉は節穴同然、お經を授かりにいらつしやる、尊い和尚様とは知らずに、とんだ失禮を致しました。どうぞお許しなすつて下さいませ。」

「フウム、お前は眞から佛の道に入らうとするのかどうぢや。」

「はい、私は先年觀音様から沙悟淨といふ法名までいただき、あなた様のおいでをお待ち申してゐたのですもの、お言葉にそむいて何と致しませう。」

そこで三藏はお剃刀を授けて、弟子の列に加へ、悟空八戒の兄弟分にされました。これでいよいよ天竺探検隊員のメンバーが全部揃つたわけです。

その時、木父は悟淨の首にかけてある鬮腰を取つて、携へて來た大瓢箪に結びつけ、一艘の船に仕立て、三藏を乗せる。八戒悟淨その左右に立ち、悟空馬を引いて後に従ひ、木父は雲の上からこれを守護しつゝ、無事に流沙河を渡つて向う岸に著きました。木父もこれで主命を果したので件の瓢箪を取り戻しましたが、それと同時に人魂のやうな火が燃え上つて、九つの鬮腰はどこかへ消えうせてしまつた。悟淨の業もこれで幾分軽くなつたといふわけ。

三藏は木父に向つて厚く禮を述べ、四人揃つてまた西の方へと志されます。

師弟揃つて

(一) 色に迷ふ八戒

それから數日、一行はとある田舎道に差しかゝつて、その夜の宿を求めてゐるうち、松林の中に立

派な邸宅のあるのを見つけた。悟空つか／＼門内に入つて見ると取付きに應接の間があつて、壁に山水の横幅を懸け、香の煙がゆら／＼と立上つて、住む人のたしなみ床しい住居です。悟空は感心して眺めてみると、中からいともなまめかしい女の聲。

「どなたですか——女ばかりの家をお覗きになつちや困りますね。」

「いえその、私どもは四人で天竺に参るものですが、一つ宿をお願ひしたいと存じましたので……」

悟空どきまぎしながらたのむのを、女はニツコリ笑つて手軽く引き受け、
「それはお安い御用ですわ。さア皆様御遠慮なく、こちらへお入り遊ばせな。」
と、愛嬌よく一同を請じ入れました。

こんな時は一番眼の早い八戒、下目使ひにその女をぬすみ見ると化粧こそしてゐないが、残んの色香まだ捨て難い姥櫻。それがまめ／＼しくお茶や御飯を給仕してくれるのですから、好きものゝ八戒はもう有頂天で、いつもなら五杯食ふところを、知らず／＼十杯も食ふといふ始末。

一方三藏はかたくなつて女の身の上などをたづねると、滑らかな舌でペラ／＼といろ／＼なことを物語ります。

「私は三年前に連れ合ひを亡くしまして、三人の娘と暮してゐるので御座いますの。何分男がゐませんで家は家業に差支ますから、私も後添へをもらひ、娘たちにも亭主を持たせようと思つてゐるところへ、恰度あなた方がいらしつて下さいましたが、これも何かの御縁で御座いませうねえ。」

何か意味ありげに、いはゆる秋波といふ一種微妙な電氣を、三藏に向つて放射しかける。三藏はこの言を聞き、心中大恐慌、これを漢文でいふと「聾啞を粧ひ、瞑目寧心寂然として答へず」とあります。



最初の電氣が。まだ三藏法師に感じないと見た後家さんは、更にボルトを強めて放射致します。

「私たち母子も四人、あなた方も四人、恰度宜しいでは御座いませんか。ねえ和尚様、つまらぬ苦勞をして天竺なんかへおいでになるより、いつそこ／＼に落着くことになさいました。親の慾目でいふのぢやありませんが、娘たちはみな十人並以上の縹緞ですし、田畑や家作も有り餘るほど持つてゐますから、決して生活向には御心配をかけるやうなことは致しません。どうで御座んせう皆さん、これから髪をおのばしになつて私どもの旦那様になり、面白可笑しく暮して行かうでは御座いませんか。」

先刻からの話に、三藏はたゞもう呆れ返つて、下を向いたつきり黙りこくつてゐる。八戒は一人でウヅ／＼してゐましたが、たうとう我慢が出来なくなつて、三藏のそばへにじり寄つた。

「和尚様、先刻から奥さんがいろ／＼親切に仰有つてゐるぢやありませんか。一つ何とか御返事をなさ

「いませ。」

「たわけたことを申すな。お前も出家の身ではないか、それで色や慾に心を動かすとは、何といふことぢや。」

三藏は聲も荒らかに八戒を叱りつけると、それを聞いた後家さんは顔色をかへて立上り、奥の間に入つてピタリ間の戸を閉ぢてしまひました。

不平でたまらないのは八戒です。

「かうやつて暗い室に残されたのも自分で求めたことだから、仕方がないが、何も食はないこの馬が可哀さうだ。どれ、どこかへ連れて行つて草でも食はして來ませう。」

ブツ／＼獨り言をいひながら、馬を引張つて出かけて行つたが、實際は敵は本能寺にありで、馬にかこつけて、娘を垣間見に行かうといふのです。悟空にそれと悟つたから、蜻蛉に身をかへて八戒のあとをつけて行きました。

果して八戒は馬に草を食はせようなどとはせず、大急ぎで裏門に廻り、頻に中を覗き込んでみると、恰度そこへ先刻の御家さんが出て來た。

「おや、馬を引いてもう御出立になるの？ あなたも私の家の婿になるより、あの意固地な和尚と一緒に、乞食をしながら天竺とかへ行くのが好きと見えますね。」

「いゝえ、どうしまして。和尚様は天子のいひつけでお經をもらひに行くんですから、あゝいつてお断りしたんでせうが、私は違ひます、違ひます。ですが私はこんなに肩がむくれてゐるので、若しかしたらお嬢さんに嫌はれはしませんかしら。」

八戒はさすがに、自分ながら好男子ではないと思つてゐると見え、柄になく恥かしがる。

「いゝえ、そんなことがあるもんですか。それならもう一度和尚さんと相談していらつじやいよ。」

「なあに相談なんかいいりはしません。何もあの人私の親父だといふんではなし、私の勝手でもありませんよ。」

「さうですか、ぢや娘にこのことを話して來ますから……」

と後家さんは家に入る。八戒はゾク／＼喜びながら歸つて來ます。

すつかりこの様子を見た悟空は、先きに歸つて來て三藏と悟淨に話してゐるところへ、八戒何食はぬ顔をして室へ入つて來た。三人は可笑しくてたまらない。すると間もなく、間の襖が開いて、例の後家さんが三人の娘をつれてやつて來ました。

「さア和尚様に御挨拶なさい。これが眞々と申しまして今年二十歳になります。次の愛々は十八、末の隣々は十六で御座いますが、どなたが婿になつて下さるのでせう？」

何様自慢の娘だけあつて、天女が天降つたやうなシャン揃ひ。八戒はトロリとなつて魂天外に飛

んだやうな顔をしてゐる。

この時、悟空は立上つて、

「もう先刻に、裏門のところまで話が出来てゐるでせう。さあお婿さんはこの男ですから連れていらつしやい。」

八戒の手をとつて、女共と一緒に奥の間へ押してやる。八戒はヒヨロ／＼しながら、四人に圍まれて中へ入つて行きました。



八戒は有頂天になつて、女達と一緒に一番の奥座敷に行くと、何よりも先きに自分の細君になる娘のことを聞きます。

「奥さん、一體どのお嬢さんを私に下さいますね？」

「さア、私もそれに迷つてゐるんですよ。どれか一人に定めたら、外のが羨ましがるでせうし、どうしたらよう御座いますか知ら……」

「さうですね。そんならいつそ三人共いたゞくことにしませうか。」

「ホ、ホ、御冗談仰有つて——ぢやかう致しませう、あなたがこの風呂敷を被つていらしつて、

そしてつかまへた娘をあなたに差上げることにしませう。」

そこで八戒は頭から風呂敷を被せられ、變な腰付をしながら、「めくら鬼」をはじめめる。

「八戒さんこツち、手の鳴る方へ。」

「とらまへて嬢にしよう。」

とんだ忠臣蔵七段目です。八戒夢中になつてあちこちと探り廻り、柱に抱きついたり、壁に突き當つたり、たうとうめまひがしてベタリ床の上に倒れてしまつた。

「おゝ苦しい——お嬢さんたちははしこくつて、とてもつかまりませんや。」

「なにけしこいといふ譯ぢやないんですけれど、皆恥かしかつて逃げるからなんです。ぢや今度はかうなさいませ、こゝに三人の肌著を捨て、置きますから、あなたが拾ひ當てたものゝ持主を、花嫁に定めるとしませう。」

慾張りの八戒は三枚とも拾つてやらうと、鼻をクン／＼いはせながら、床の上を這ひずり廻る。その中漸く一枚が手にさはつたので、占めたとばかり身に纏ふや否や、身體をジリ／＼しめつけられ、あツと叫んで打ち倒れた。見れば肌著と思つたのは荒縄で、八戒は身動きも出来ぬやうに縛り付けられ、四人の女はもう消え去つて、どこに行つたかわかりません。

一方三藏等三人は、明け方になつて目ざめて見ますと、昨夕の立派な屋敷は無くなつてしまひ、松

林の中にゴロ寝をしてゐたのでした。一同呆れ果て、

「さては妖怪變化につまゝれたんだな。」

とよく／＼四邊を見廻すと、松の枝に一枚の短冊が下げてあつて、何やら書きつけてある。これも判り易いやうに歌か新體詩かに譯すといふんだが、ちよつとむづかしさうだから、原文のまゝ失敬して置かう。

黎山老母不思凡。南海菩薩請下山。普賢文殊皆是客。化成美女在林間。聖僧澹漠禪機定。

八戒貪淫劣性頑。從此洗心須改過。若生意慢路途難。

これで見ると四人の菩薩が姿を變じて、三藏等の道心が堅いか否かを試されたのだとわかつた。三藏は合掌して南の空を伏し拜んでゐる時、森の奥の方から、

「和尚様ア、助けて下さい！」

と八戒の泣き叫ぶ聲が聞える。急いで聲のする方へ行つて見ると、八戒は松の枝に逆さづりにされてゐます。

「やア、三國一のお婿さん。昨夕の首尾は如何で御座つたな？」

悟空が意地悪くひやかしにかゝつたので、八戒面目なさに牙をかみしめて痛みをこらへてゐる。悟浄見るに見兼ねて、繩を解いておろしてやつたが、悟空はなほ追究をやめません。

「おい、お前はあの女が誰だか知つてゐるかい？」

「いゝや、すつかり眼が眩んでしまつて、何にもわからなかつた。」

「さうだらう、あれはお前などの山の神にたるやうな方ぢやないんだ。みんな立派な佛様だよ。」

先刻の短冊を示されて慚汗背にあまねしといふ態。三藏の前に両手をついて心から詫び入ります。

「何とも面目次第も御座いません。これからは決して變な氣を起しませんから、どうぞ御勘辨なすつて下さいませ。」

三藏は深く將來を戒め、連れ立つてそこを出立される。八戒ベツをかきながら悄悄切つてついて行くさま、滑稽にもまた哀れで御座います。

(二) 人參果窃盜事件

道はだん／＼登りになつて、一行は萬壽山と呼ぶ風光絶佳な山に差しかゝつた。見れば彼方の木の間に「五莊觀」といふ額を揚げた大きな高樓が聳え立つてゐます。

三藏等がその門前にたゞずんでゐると、中から綺麗な唐子が出て来て、「あなたは天竺へ經文をもらひに行かれる、唐の三藏法師ではございませんか。」



「いかにも私は三藏ですが、どうして私の名を御承知ですか。」

「こゝの主人は鎮元子と申す仙人で、たゞ今、他所へ行つて留守で御座いますけれども、三藏法師が立寄られたら、粗忽のないやうにおもてなし致せとの吩咐けでした。今、裏の畑から果物を取つて来てあげますから、暫く中で御休息なすつてみて下さい。」

二人はかういつて裏の方に行つたが、やがて朱色のお盆に大きな果物を二つ載せて持つて来た。三藏は何の氣になしにこれを見ると、生れ落ちてまだ三日と経たぬやうな赤ん坊だから驚きました。

「おや、これはひどい事をなさる。今年はどこも豊年だといふのに、こゝでは人間を食うんですか？　こんなものを御馳走などとは何といふことです。」

「いゝえ、これは御存じがないかも知れないが、人參果と申して木に生つた果物です。決して怪しいものではないから自分たちの室へ持つて歸つて、おさがり頂戴とばかりムシャク食ひはじめた。

二人でいろくすとすゝめるが、赤ん坊が木に生る譯がないと、顔をそむけて見ようともしない。仕方がないから自分たちの室へ持つて歸つて、おさがり頂戴とばかりムシャク食ひはじめた。

「あゝおいしい。あの和尚、人參果が長命の薬なのを知らないのです、お蔭でわれ々の口に入つたんだ。全く舌がトロけるやうだね。」

この時、八戒は臺所に来て飯の支度をしてゐたが、隣の室で二人が話しながらうまさうに食つてゐるのを聞いて、涎ダラ、すぐ外に出て悟空を手招ぎしました。

「兄貴、お前は人參果といふものを知つてゐるかい？」

「いや、話には聞いたが見たことはない。何でも一つ食ふと四萬八千年生き延びるとかいふ話だが、その人參果がどつかにあるのか？」

「あるとも、こゝの内の裏にその木があるんだ。どうかして二つ三つちよろまかせないか知ら。」

「譯はないさ、俺が取つて来てやらう。」

悟空は忍術を使つて裏の畑に飛んで行つて見ると、芭蕉に似た大木に、赤ん坊そのままの果物が、ウヨウヨ生つてゐて、宛ら赤ん坊展覧會でも見るがやう。悟空得意の木登りでその中から三個だけ失敬して歸り、三人で平らげてしまつて、舌なめずりをしてゐます。

これが知られずに濟めば何事も起らなかつたんだが、唐子の一人が戸の間から見つけて三藏に告げ、散々に悪口をいひました。

「あなたの弟子は大泥棒です、私の主人が祕藏してゐる人參果を盗んで知らん顔をしてゐます。あんな泥棒を弟子に持つて、それで天竺にお經を取りに行くなどと、大きな顔をしてゐるとはちやんちゃ、可笑しいや……」

いはれて三藏は大に驚いた。

「え、それはほんたうのことですか。よろしい、たゞ今三人を調べて見ますから……おい悟空、八戒、悟浄、みんなこゝへ出て来い！」

師僧の呼ぶ聲がいつもと違つて荒々しいので、八戒と悟浄は、さては今の一件が露顯したかと尻込みしたが、悟空は平氣の平ちやん。

「なに、たかが飲み食ひの話ぢやないか、わかつたところが大了たことでもあるまい。ウヂくせずと俺について来い。」

二人の先に立つて三藏の前に行く、傍らに原告の唐子が口をとんがらして、罪状を摘發してやうと待ち構へてゐる。いよく三藏裁判長の下に窃盜罪の公判が開かれやうといふのです。



三藏は八戒が平常大食の上に、食意地のきたないことを知つてゐるから、主犯者は大方此奴だらうと、先づ八戒に聞きました。

「お前だらう、人參果を盗んで食つたのは——」

「へーえ、そんなことがあつたんですか、私は一向に存じませんが……」

文字通り何食はん顔をして、犯行を否認したが、三藏にはそのわざとらしい顔付や陳述振りから、

一目で怪しいとわかります。

「お前等は出家ではないか。盗んだら盗んだと眞直にいへば、わしが詫びてやるのに、虚偽の申し立てをするを許さないぞ。」

悟空はこれを聞いて如何にも尤もだと思ひ、淡白に白狀に及ぶ。

「實は先刻八戒が食べたいと申しますので、私が三つだけ落して參り、三人で分けて食べたんです。」原告の唐子はそれ見たことかといふ腹で、意地悪く被告の不利になるやうなことを供述します。

「なあに三つばかりなもんか、澤山取つて來て腹一杯食つた癖に。」

かういふ加減なことをいはれたので短氣な悟空、カツとむかつ腹を立てた。餓鬼め憎いことをいひくさる、あんな果物の三つ四つで、ギヤア〜騒ぐんなら、いつそのこと根こそぎ引倒してくれようと、早速一本の毛を抜いて自分の身代りをこしらへ、本身は裏の畑に飛んで行つて、枝も實も滅茶苦茶にたゞき落した上、神通力でウンと押し倒し、元の部屋に歸つて來て、すまあした顔で頸の鬚などを抜いてます。

唐子の方では先刻からいくら罵倒しても、悟空はじめ誰も黙りこくつてゐるので、兎に角後の證據に、も一度果物のかずを勘定して置かうと、畑に行つて見ると、木は坊主になつて根こそぎにされ、見るも無殘な有様。

「やゝゝ、これは大變だ！ こんな亂暴をするのはあの毛むくぢやらに違ひない——よし、よし、お師匠様のお歸りまで、彼奴等を逃さぬやうにして置いて、仇を取つていたゞかう。」

二人はかう相談をきめて、客殿の表に廻り、ピタリ扉をしめ、外から錠をかけてしまった。

「この盗つ人めら、人參果を盗んだ上に、世界に二つとない木まで倒すとは、何たる惡黨だ。お師匠様がお歸りになつたら、ひどい目にあはせてやるから待つてをれッ。」

かくと聞いた三藏法師、嘆息して心から悟空をお怨みになる。

「貴様はよく災難を起す奴ぢや。出家の身でそんな亂暴狼籍をするとは、何といふことだ。」

「和尚様、決して御心配なさいませぬ、まア私に任せて下さい。」

と例の眠り蟲の術で、番をしてゐる二人の唐子を眠らせた上、何やら呪文を唱へると、錠前が落ちてバラリ扉が開く。悟空は急いで三藏を馬に乗せ、五莊觀を後に暫くはマラソン競走の態。

やがて五十里ばかり走つたかと思ふ頃、四人が木蔭に休んで、一息入れてゐると、何處からともなく、拂子を手にした一人の行脚僧が現れて、うやくしく三藏に禮をした。

「和尚様にはどちらから參られましたな？」

「はい、私は唐の國から天竺へ參るものでございます。」

「では、途中五莊觀にお立寄りになりましたでせうな。」

この問答を聞いてゐた悟空は、急に横合ひからしやくり出て、

「いゝや、そんなところはつい氣が付かんで、通り過ぎて參りました。」

するとくだんの行脚僧は、はつたとばかり悟空を睨み付け、

「この猿め、わしをだまさうとする氣か。わしは五莊觀のあるじ鎮元大仙だぞ、さあ一緒に歸つてあの木を元の通りにして返せ！」

見現された悟空はやけ糞になつて、いきなり如意棒で打つてかゝる。大仙騒がず拂子であしらつてゐたが、その中に袖裡乾坤の術といふ、袖の中に天地を包む法を使ひ、法衣の袖に馬諸共四人を引き包み、軽々とぶら下げて、五莊觀へ立ち歸りました。

悟空等中でじたばた藻掻いて見たが、どうすることも出来ません。

(三) 大仙も感嘆

五莊觀に歸つた鎮元大仙は、四人を木偶人形でもつかむやうに、ひよい／＼と袖の中からつまみ出して、柳の木に縛り付け、龍の皮で作つた笞を取り出し、弟子にいひつけて笞刑をくらはせることにした。

弟子は笞を執つて立上つたが、

「お師匠様、どの坊主からひッばたきませうか？」

「さうさな、三藏が傲慢無禮だから、あれから始めるがい。」

悟空はこれを聞くと大聲で叫んだ。

「そんな馬鹿なことがあるもんか。人參果を盗んだのも、木をぶつ倒したのも皆俺だ。和尚様は赦して、俺を打つてくれ！」

「うむ、それも一理がある、感心に師匠をかばひをるな——ぢや、その猿からたゞき始める。」

この時、悟空は兩の股を鐵のやうに堅くしたから、打たれたつて平氣なもの、按摩にでも揉まれるやうに、いゝ氣持で打たれてゐます。鐵面皮といふのは今の世の中にも澤山あるが、鐵の股はちよつと珍しい。

そのうち日が暮かゝつて來たので、後は明日のことにしよう、大仙はじめ一同部屋に入つて寝てしまつた。

後に三藏怨み泣き、デン——と太棹の一の弦が重苦しく響いて、しんみりした物語になるところ。

「お前たちはいつもさまじくなくことをし出かして、わしに卷添ひの罪を著せる。明日は笞打たれる筈だから、こんな鐵面皮の身體では、たうとうお釋迦様に遇はないで死んでしまふかも知れない。あゝ何といふ因果な身の上だらう。」

師匠の怨みつらみを聞いて、悟空は身を切られるやうにつらい。

「和尚様、何ともお申し譯がありません。しかしさうクヨクヨなさいますな、今夜中に私がきつとお救ひ申しますから——」

やがて人々の寢静まつたのを窺ひ、自分は先づ身體を細くして繩をぬけ出した。それから三人のいましめを解き、柳の枝を折つてそれを繩で縛りつけ、口に何やら呪文を唱へてふーつと息を吹かける、忽ち四人の姿と變り、本人たちでもどつちが自分だか見分けが付かないほどだ。しすましたりと四人は夜を徹して、西方さして急ぎ行く、えつさつさ、えつさつさのえつさつさ。

やがて明日となりぬれば、何も知らぬ鎮元大仙は、早々と起出で、また一同の處刑にかゝる。この日は三藏を一番に、八戒悟淨といふ順で笞打たせ、最後に悟空の番になると、四人は忽ち柳の枝に變つてしまつたから驚きました。

「あの山猿なか／＼アヂをやりをるな——ようし、も一度つかまへてひどい目にあはしてやらう。」

大仙は雲に乗つて瞬く間に一同に追ひつき、悟空等が死物狂ひに抵抗するのを物ともせず、ふわり袖で包んで引上げて來た。こんなお爺さんが日本の警視廳にゐたら、ピス健だつて説教強盗だつて一たまりもあるまいに——。

前回に懲りて大仙も今度は油断をしません。すぐ弟子どもに命じて大きな鍋に油を煮立てさせ、目の前で悟空を釜煎りの刑に處さうとした。しかし悟空はこはくも何とも思はない。

「久しく風呂に入らなかつたから恰度幸ひ、鍋の中でゆつくり垢を流してやらう——だが待てよ、大仙も曲者だから何か鍋の中に仕掛があるとあぶない、兎に角一ぺんためしてからにしよう。」

と、そばにあつた大きな石を自分の姿にかへ、本身は雲の上に登つて眺めてゐます。

その中、油がぐたぐたぎつて来たので、弟子たち三四人で悟空を抱き入れようとしたが動かばこそ。二十餘人がうりで漸くかつぎ上げ、どぼんと鍋に投げ込んだはい、が、忽ち底がわかれて煮えくり返つた油は四方に散亂、弟子共は皆顔や手足を火傷する騒ぎ。大仙カン／＼に憤り、

「猿め、よくも石に化けて鍋を打割つたな。この腹癒せには三藏坊主を天ぷらに揚げてしまへッ」と新らしい鍋の用意を、弟子に命じました。



雲の上で見てゐた悟空は、師匠を天ぷらにされてはたまらんと、急いで飛び下りて来た。

「まあ暫く、和尚様を煮ることだけは勘辨して下さい。實は先刻小便がつまつたので、お料理鍋をきたなくしては悪いと、ちよつと洗手に行つて来たんです。どうぞ和尚様の代りに私を鍋に入れて下さい。」

大仙は前日来悟空の通力と師匠思ひを、心ひそかに感心してゐたが、今またこれを聞くやニツコリ打ち笑ひ、悟空の前に来て、いきなり握手を求めました。

「お前は悪戯もするが、腕前と精神の立派なものには感服した。あの人參の木を元通り生かしてくれたら、お前と兄弟の約束をしよう。」

「それは有難い、あの木はきつと元通りにしますから、どうか和尚様や兄弟の繩を解いて下さい。」

そこで大仙は三藏等三人の繩を解いて正殿に請じ入れる。悟空は三藏に向ひ、

「どうも色々苦しい目に逢はせて相済みませんでした——私はこれから東洋海に行つて仙人をたづね、あの木の起死回生の法を授かつて来ますから、三日間のお暇をいただきます。」

いふが早いか筋斗雲に乗つて、東の方へ飛んで行きました。

悟空はそれから蓬萊洲の福祿壽三星、方丈仙山の東華帝君、瀛洲島の九老仙等當時有名なドクトルたちをたづねて聞いて見たが、人間を蘇生させる法は知つてゐても、誰も木を生かす術に通じたものはない。

その中、追々三日の期間が切れさうになる。若しも空手で歸ると、例の金輪のまじなひで頭を締付けられる心配があるから、氣が氣ではありません。色々思案の末に餘り度々きまりが悪いけれども、矢

張り観音様におすがり申すより外に方法は無いと考へついた。

わが日の本でも金龍山浅草寺などは、御利益莫大である通りの繁昌。僅一銭のお賽銭で家内安全、商賣繁昌から、あの人と夫婦になれますやうなどいふ蟲のいゝ願ひまで聞いて下さるらしい。大和國壺坂寺の観音は盲目を目明きにして下さる。中に油屋のお染なんといふ不良少女は「観音様をかこつけて、逢ひに来たやら南やら……」なんかと、rendezvousの道具にまで使ふ。悟空ほどの者でも苦しくなると、ついおすがりするやうになるのです。

さて、南海普陀落山に著いて観音様に逐一人參果事件の顛末を申し上げ、御助力を嘆願すると、「そんなことなら早く来ていへばよかつたのに——この瓶に蓄へてある甘露水は、枯れ木でも活かす力があるから、何の造作もないことだ。どれく一緒に持つてやらう。」

手輕にお引受けになつて、悟空とともに五莊觀へお成になる。一同は菩薩の台臨よと、庭前に堵列してうやくしく禮拜奉迎します。

観音菩薩は倒れた木の前においてになつて、瓶の甘露水で悟空の手に起死回生の符を描き、手を木の根元に差込ませると、忽ちそこから綺麗な清水が湧出した。菩薩は唐子に命じてその水を玉の椀に汲み取らせ、柳の枝にひたして悟空等三人が抱き起した木にそゝぎかけると、見る／＼中に枝も榮えて葉も茂り、二十三の人參果が元通りに現れて、そのあざやかなことは全く天勝の手品以上。

鎮元大仙大に喜び、すぐ様十個を打ち落とし、菩薩を初め一同にふるまふ。三藏も人參果の正體がわかつたから、安心して一つ食べて見ますと、忽ち氣力増進、身心爽快を覚え、そのきゝ目の著るしいこと、とても何とかピンの效能書の比ぢやありません。

観音様がお歸りになつた後で、大仙は約束通り悟空と兄弟のちぎりを結び、もう一日々々と三藏師弟を引留めて、毎日あらん限りの御馳走をしてもてなしました。

(四) 悟空を破門

五莊觀に滞在すること五日、大仙が名残を惜しんでなほもと引留めるのを、やう／＼振もぎつて出發し、一行は白虎嶺と稱する高山に差しかゝりました。

古語に「山高ければ必ず怪有り、嶺峻なれば精を生ず」とあるが、果してこの山にも屍魔と稱する妖怪があつた。先刻から三藏を取つて食はうとしてゐたけれども、悟空があるので近寄れなかつたが、やがて悟空が糧食の徵發に出かけたのを見すまし、凄いやうなシャランに化けて、シャナリ／＼蓮歩を運ばして来る。

女人を崇め尊ぶこと當今のハイカラ先生に劣らぬ八戒、ペコペコしながら近づき、

「令嬢にはどちらへお越しで？ ハ、ア我々がひもじからうと、御馳走を持つて獲て下さいましたのですつて。御親切にそれはハヤどうも——和尚様、この令嬢があなたに供養をなさりたいといふのですが……」

三藏といへども美人の親切は悪くはない。

「それは御奇特に有難う御座います。ではお志しを受けて頂戴致しませう。」

女から青磁の鉢を受取つて、すでに食はうとする時、空中で、「そんな物を召上つちやいけません」といふ聲がするや、悟空は疾風のやうに飛び下りて来て、ポカリ如意棒で女の頭をくらはせた。屍魔は急に解屍の法を使つて、本身は空中に逃げ去り、女の死骸をそこに置いて行つたので、三藏は喫驚仰天。

「悟空何をするツ、なぜこんな結構な娘さんを殺したのぢや——」

「和尚様、今の女は確に化物です。その證據にはこの鉢の中の御馳走を御覽なさい。」

見ると中には蛆蟲や蠹の類が、ウヂヤ／＼してゐるので、三藏も顔色を變へて驚いてゐる。しかし八戒は自分が氣のあつた女を殺されてしまつたので、口惜しくてならない。

「悟空はあんなことをいひますけれども、あれは全くこの邊の豪家の令嬢です。鉢の中の蟲だつて悟空が和尚様の眼を眩ますために、術を使つて變へたのに違ひありません。」

八戒の讒訴に三藏も心動かされ決し兼ねて迷つてゐる時、屍魔は今度こそだましてやらうと、八十餘歳の梅干婆に變じ、竹の杖をついて、シク／＼泣きながら歩いて來ました。八戒はいゝ證人が現れたといふつもりで、頻に非妖怪説を主張する。

「それ御覽なさい。先刻の令嬢のお母さんが、娘が殺されたので、泣いて尋ねに來たぢやアありませんか。」

まだツベコベいふので、悟空は癪にさはつてたまりません。

「この阿呆、馬鹿も休み／＼いへ。十七八の娘に八十の母親がどこの世界にあるもんか。これもやつぱり化物だツ。」

驅け寄つて行つたかと思ふと、またポカリ。しかし今度もうまく本身はぬけて、婆の死骸だけ置いて行つたので、三藏はすつかり八戒のいふことを信じてしまつた。

「お前はなぜ無暗に人を殺すのぢや、そんな兇狀持が天竺に行つたからつて何になる！ さつさと國に歸つてしまへ——ムニヤ／＼。」

おまけに例の緊箍咒まで唱へたから、悟空頭をか／＼へて七轉八倒。

「痛い／＼、和尚様ゆるして下さい——今こゝで歸つては、何時あなたに御恩返しが出来ませう。後の世まで恩知らずの名を残すのはいやです。どうぞさういはずに、つれていつて下さい。」

節義を重んずる高風、豈それ欽すべきにあらずやです。三藏袂にすがり付いて口説き立てられ、さすがに憐憫の情を催して、

「そんなら今度だけは許してやるが、またとこのやうな亂暴をしては相成らんぞ。」

と、くどくど將來を訓戒される。三藏ほどの和尚でも悟空の忠心を見抜き得ないとは不明な話。

空中から一伍一什を見た屍魔は、もうこの上は悟空に邪魔される心配はないと、今度は爺さんの姿になつて近づいて來ました。



悟空の眼には、すぐその爺が化物だとわかつたが、うっかりたゞき殺しても、今までのやうに本身に逃げられては何にもならないし、その上、師匠にしかられるのが恐ろしい。さればといつて見す見す師匠が食ひ殺されては大變だから、今度こそ徹底的に退治てやうと思案を定め、咒文を唱へて土地の神々を呼び集めた上、空中にゐて妖怪の逃げ路をふさいでゐるやうにたのんだ。

一同領承、包圍の準備全く成つたところで、

「此奴、三度も和尚様をだまさうとするかッ。」

と如意棒でポカリくらはせる。今度は確に手答へあつて、爺の死骸は雨に曝された白骨に變つて

しまひました。

「和尚様、これが化物の正體で御座います。こゝへ來てよく御覽なさいませ。」

「左様か——しかし死んだばかりで、すぐ白骨になることは可笑しいぢやないか。」

「いゝや、あれはこゝで行倒れた亡者の化物なんです。この通り脊骨に白骨夫人と書いてあるのが證據で御座います。」

三藏はまだ半信半疑でゐると、先刻女を殺されたのをまだ怨んでゐる八戒は、むくれた口を一層ひんむくつて、悟空を讒言します。

「和尚様、だまされちやいけません。奴は三度も人殺しをしながら、緊箍咒が恐ろしさに、術を使つてあんな骸骨にしたんです。」

當今でも同僚の悪口をいつて、上役におべつかを使ふ八戒見たいな人間が澤山ある。上役も上役でたうとう讒言を信用してしまひ、即座に解雇しようとした。

「お前はまるで殺人鬼ぢや。さういつまでも亂暴性がなほらんやうでは、天竺へつれては行けないから、サツサと國へ歸つてしまへ。」

「和尚様、それは御無理です。私が化物を殺してあなたをお助けしたのに、あんな阿呆のいふことを信じて、私をお拂ひ箱になさらうとはそりやあんまりでせう——あゝあ、兩界山でお救ひをうけてか

ら、千辛萬苦してこれまで御守護申し上げて来たのに、こゝでこんな目に逢ふとは、全く「鳥盡きて弓袋に納まり、狡兎死して良狗烹らる」のたとへの通りだ。」

悟空は興奮の結果、少々過激な言葉が出たので、三藏すつかり怒つてしまひ、即座に懲戒免職の辭令を書いて突き付けました。

「愚圖々々いはずにこれを持つて行け！ もうこれからは師匠でも弟子でもないぞ。」

悟空も仕方がないと思つたから、沙悟淨に向つて、

「それぢや俺は國に歸る、これから行先々で、悪い化物が出た時には、悟空といふ弟子があるぞといつて化物を追拂ふが、くれぐれも和尚様の身の上を頼んだぞ。」

と振り返り、悄然として立ち去りました。一朝の怒りでかういふ忠義な部下を追放するとは、三藏一期の失策、世の上長たるもの豈それ心せざるべけんやですな。

破月洞危難

一 三藏さらはる

一行三人になつて白虎嶺を後に、とある森林に差しかゝつた時、三藏は腹が空いたので、八戒を食糧調達にやりました。待てど暮せど歸つて来ません。それもその筈、八戒は十里ばかり先に رفتが、一軒も家が見當らないので、草叢の中で疲れを休めてゐる中、そのまゝグウ〜寢込んでしまつてゐたのです。

そのうち日も暮れかゝつて来たから、今度は沙悟淨を捜しに出し、三藏獨り居残つて林中をぶらついてゐると、不圖林の南の方に立派な塔の聳えてゐるのを見つけた。三藏は二人の歸りを待つ間に拜んで来ようと思ひ、何の氣なしに門を入つて行くと、石疊の上に青い顔で牙の生えた化物が、屍をかいて寢込んでゐます。

三藏びつくりして逃げ出さうとしたが、その物音に目をさました化物は、追つかけて来て三藏の首根つこをつかまへた。

「貴様はどここの者だ？ なに、弟子二人と天竺に行く……それは時ならぬ御馳走が舞込んで来たもんだ。弟子が来たら一緒に料理して一杯飲んでやらう——これ家来ども、酒の用意をして置きな。」

舌なめずりをしながら、八戒と悟淨が来るのを待つてゐました。

一方、八戒の捜索に出かけた悟淨はかれこれ十里ばかりも捜したが、どこへ行つたものか皆目見當らない。ほんたうに厄介モツカイな八戒だとこぼしてゐると、不圖その邊の草叢の中で「何かうまいものが食べたい……ムニヤ〜。」といふさゝやき聲が聞える。

悟淨怪しんで草を掻き分けて見れば、八戒の奴正體もなく寢むりこけて、だらしなく開いた口か

ら涎をたらし、寢言をいつてゐるのですから憤慨しました。

「この阿呆め、和尚様の御用もうちやらかして、こんなところで寝てけつかる——さア、一緒に歸れッ。」

ぐい／＼耳を引張つて松林に戻つて来たが、馬と荷物はあるけれども、三藏の姿が見えません。

これは大變、和尚様は化物にさらはれたに違ひない。八戒、大體貴様が悪いからこんなことになるんだ。」

悟淨が驚きながら面責するのを八戒セ、ラ笑つて、

「なあに大丈夫だよ、心配しなさんな。こんな清々したところに化物なんてゐるもんか——それ、あの向うに見える塔にでも行つて、晝寝をしてゐられるんだらう。」

自分と同じことに考へてゐる。二人は急いで塔の前に来て見ると、ぴたり閉ざされた門の上に「破子山破月洞」と題してあります。

「おい破月洞の人、こつちに俺たちの和尚様が来てゐるだらう。一つ呼び出してくれないか。」

八戒が大聲で怒鳴りますと、中から出て来た先刻の化物。

「横柄なことをいふな——あの和尚と一緒に酒の肴にしてやらうと、貴様たちの来るを待つてゐたところだ。」

いきなり大だんびらで斬つてかゝる。八戒悟淨も各々得物を揮つて應戦し、こゝに大立廻りが開始されました。

この時、三藏は洞内の一室に縛られて、もう化物の晩酌の肴になるものと観念してゐたところへ、絹ずれの音も静かに一人の美人が入つて来て、物優しく聞きました。

「和尚様、あなたはどちらの方です、どうしてこゝへ縛られておいでになつたんです。」

三藏はこれも化物の一味と思つてゐるから、答辯甚だブツキラ棒。

「食ふなら早く食つてしまつたがいゝ。わしは天竺へ經文を受けに行く者だが、今更何も聞かなくたつていゝぢやないか。」

「いゝえ、私は人を食ふやうな化物ではございません。私は寶參國王の三女百花羞と申す者ですが、十三年以前、頃は夜も長月、ある晩月を眺めてゐるところを、今の主人黄袍郎にさらはれて来て、心にもない契りを結び、二人の子まで生みました。あなたがお經を授かりに行かれるとあるからは、きつとお救ひ申します。その代りには私の手紙を持つて行つて、私がこゝにゐることを兩親に傳へて下さいませ。」

三藏の繩を解いた上、急いで一通の手紙をしたゝめ、三藏に手渡しました。殺されると覺悟してゐた三藏は全く夢心地です。

「どうも有難うございます。それとは知らず先刻は失禮を申しました。この手紙は必ずお届けしますが、さてどうしてこゝを逃げ出したものでせう。」

「萬事私にお任せ下すつて、しばらくの間、裏門で待つてゐて下さい。」

百花羞夫人は三藏を裏門の外の藪に隠して置いて、すぐ表門に引返し、

「旦那様！ ちよつと話がありますから、私のそばへ来て頂戴。」

と呼びかけました。化物は合戦の最中だったが、元來大のサイノロジストなので、細君の可愛い聲を聞くや、戦ひなんかはうつちやらかして洞中に歸つて來ました。

「百子や、何だい——何か急ぎの用でもあつて呼んだのかい。」

青面の魔王もだらしのないことおびたぶしい。夫人は何とかだまして三藏を許させたいと思ふから、嬌態を作つて夫の膝にしなだれかゝり、

「ねえ貴郎や……」

と眼からは強烈なる秋波の放送を始めました。



百花羞夫人は、先づ充分にエレキをかけて置いて、さて亭主龍路の口を切りました。

「外のこともございませませんが、先刻、私が眠つてゐて不思議な夢を見ましたのよ——私が幼少の時分、心願を立て、立派な旦那を授かるやう、若しその願ひがかなひました節は、誰でも和尚様に功德致しますからと誓ひを立てましたの。だからこそあなたのやうないゝ旦那様が見つかったんでございませう……」

この邊で亭主の膝を二三べんグリ〜。

「ところが今の夢の中に、金の兜をかぶつた神様がおいでになつて、誓ひを忘れてゐた罪をお責めになり、劍で斬られやうとしたところで眼がさめたのでございます。不思議に思つて出て來ますと、あすこに和尚様が縛られてゐましたが、今の夢はあれを赦してやれとの神様の御意で御座いませう。ねえ貴郎、私をほんたうに愛して下さるなら、どうぞあの和尚様を報してやつて下さいませう。ね、ね、報して頂戴ね。」

青面魔王はもうとろ〜と溶けるばかりになつて、いやも應もありはしません。

「あゝ、いゝとも〜。俺は何時だつてお前のいふことをいかなといつた例がないぢやないか。お前が和尚を助けたいんなら、お前の思ふ通りにしなさいよ。」

許略成功した百花羞は大喜びで、裏門にある三藏にこのことを告げる。魔王は表門に引返して、「これ兩人、よく聞け！ 俺はお前等を恐れたわけぢやないが、女房の命乞ひであの和尚を助けてや

る。早く裏門にいつてつれてゆけ。」
と叫んで洞内に引込んでしまふ。八戒、悟浄はそのいふ通り裏門にいつて見ると、果して藪の中か
ら三蔵が出て来たから、三人無事を喜び合ひ、急いでそこを出立しました。
それから三日の後、三蔵等は寶象國の王城に着き、國王に拜謁してありし次第を物語つた上、預か
り手紙を捧呈する。國王は十三年間消息不通だつた愛嬢からのたよりなので、半ば喜び半ば悲しみな
がら讀み下して見ると、次のやうな文面です。

不孝の女百花羞よりお懐しき御兩親様の御前に申上げ參らせ候。わらは事十三年前青面
魔王に誘拐され深山の奥に至り遂にその妻と相成り、今は二人の兒まで儲け候へども、それ
も妖魔の種なる悲しさ。皆々様の御蔑みはもとより覺悟の前に御座候へども、御兩親様に
生死の程御知らせ申し上げたたく、唐國よりの和尚にこの文託し上げ參らせ候。かゝる娘に
ても不びんと思し召し候はゞ、何とぞ軍兵御遣はしに相成り、わらはを御救ひ出し下され
たく、御兩親様の御情にすがり、たゞくこれのみ願ひ上げ參らせ候。あらくかしこ。

讀み終つた國王は、聲をあげてなげき悲しみ、竝びるる群臣に向つて、誰ぞ娘を救ひ出して来てく

れる者はないかと仰せられたが、魔王の通力を恐れて、誰一入行かうといひ出す者もありません。

この様子を次の間で聞いてゐた例の猪八戒。師匠の話で聞けば魔王の奥さんは非常に綺麗な女だとの
こと、それを救ひ出せば王様の喜びはもとより、奥様からも命の親と感謝されるに違ひないと、國
王の前に進み出て自薦しました。

「私が行つて救ひ出してあげませう。あんな小化物はこの私から見れば、何でもありませんや。」
女のことになると、むきになつて肩を入れたがるのは、此奴の癖。しかし國王はそんなことは知ら
ないから大に喜ばれて、

「それはまことに有難い。だが御身は妖怪を退治するやうな、法術を知つておいでか。」
「憚りながら三十六種類の變化に通じてみます、一つやつてお目にかけてませうか。」
口に咒文を唱へると、八九丈といふから出羽ヶ嶽の十二三倍もある大男と變る。群臣驚愕して中に
は逃げ出すものがあるほどなので、八戒大得意。再び元の身體に變り、沙悟浄と一緒に破月洞征伐に
出かけました。

(二) 悟浄も捕虜に

八戒悟浄の兩人雲に乗つて破月洞に到り、いきなり石門をたゞき破つて躍り込まうとする。その物

音を聞いた青面魔王、押つ取り刀で出て見るとこの始末だから、髪を逆立て、怒つた。

「無禮者め！ 貴様たちの師匠を救してやつた恩も忘れ、また引返して来て門を破るとは何事だッ。」
八戒あざ笑つて、

「貴様はそんな面をしてゐて、寶象國の姫君を女房にしてゐるとは憎越至極だ。俺たちは王様の頼みで取返しに来たんだから、痛い目を見ぬ中返上に及べッ。」

いやだなんぞとぬかすなら、取つゝかまへてキューともいはなかつたらうが、自分の顔は棚に上げて口ぎたなく罵倒します。

魔王はこれを聞くと、口もきけないほど怒つてしまひ、物をもいはずに斬つてかゝる。八戒悟淨は熊手と刺又で雙方から挟撃したが、何しろ魔王の方は、女房を取られるか否かの瀬戸際だから一生懸命。旗色悪しと見た八戒、悟淨を顧み、

「俺は急にウソコがしたくて堪まらなくなつた。ちよつと行つて来るから一人で戦つてゐてくれ。」
ずるい奴で、すたこらその場をばづし、草叢にもぐり込んで、そのまま、ぐう／＼寝入つてしまつた。

悟淨はそんなこととは知らんから、暫くはひとりで渡り合つてゐたが、二人でさへ危なかつたんだから、かなひつこはありませぬ。たうとう捕虜になつて、高手小手に縛り上げられました。

洞内に引揚げた魔王、心の中で思ふには「あの唐から来た和尚が、命を助けられた恩を忘れて、女房を取返させようとする筈はない。これはきつと女房がこゝを逃げようとして、手紙でも頼んでやつたのだらう。にくいのはあの阿魔だ——いはゆる可愛さ餘つて憎さが百倍といふやつ。眼を怒らし牙をむいて、夫人の室に飛び込みざま、髻をつかんで引摺り倒した。」

「うぬ、俺がこれほど可愛がつてゐるのに、親のことばかり思つて、よくもこゝを逃げようとしあがつたな。」

「あなた、何をなさるんですッ、何で私がそんな水臭いことをするもんですか。」
「嘘をいふなッ。貴様が夢にかこつけて和尚の命乞ひをしたのは、手紙をたのんでやらうための狂言に違ひない。さうでなければ、何で二人が奪ひ返しに来るものか。」

「いゝえ、私は何も存じません、手紙などを頼んだ覚えはありません。」
「まだいひ抜けをいふか。ようし、今、俺がとりこにした坊主に突き付けて、白状させるから一緒に来いッ。」

大した夫婦喧嘩です。百花羞夫人は観念して引きずられて行くと、魔王はだんびらを抜いて、夫人の胸に當てながら悟淨を罵る。

「貴様達がこゝへ引返して来たのは、この阿魔に頼まれて、親爺のところへ手紙を持つていつたから

だらう。さあ眞直ぐにいへ、誠をいふと貴様も命がないぞ。」

悟浄は平常餘り冴えない質だが、根が剛直なしつかりした男だから、若しうっかりしたことをいって、姫君が殺されでもしては一大事、命にかけても助けてやらうと毅然としていつた。

「これ、粗忽をするな——手紙などをつかつた覚えは断じてない。それは俺たちが寶象國の王様にお目にかゝつた時、姫君の肖像畫を出して、かういふ女に逢つたことがないかと問はれたので、破月洞で見た旨を申し上げると、王様が俺たちにお頼みになつたから救ひ出しに來たまでだ。殺すなら俺を殺せ、何も知らぬ姫君を殺してはならんぞ。」

悟浄の犠牲的精神は全く見上げたもの。魔王もこれを聞いてすつかり疑ひを晴らし、同時に例のサイノ口を發揮して、百花羞を抱き起しながらペコ／＼あやまる。

「俺の勘違ひから亂暴をしてほんとに濟まなかつたね。さぞびつくりしたらうが、まあ勘辨しておくれ。おゝよし／＼、泣くな／＼。」

塵を拂つてやつたり、髪を撫でてやつたり、御機嫌取り／＼奥の間につれて行きました。



青面魔王は愛妻の怒りに觸れては一大事と、澤山に好きさうな料理をこさへさせて酒盛をはじめ、

詭言やら追従やら、盛んにあまいところを出してゐたが、内縁だけではどうも心配だから、舅に會つて一つ籍を入れてもらはうと思ひ付いた。

「俺は、これから寶象國に行つて、お前のお父さんに會つてくるからね。ちよつとの間、留守居を頼むよ。」

と體をゆすぶつたかと思ふと、忽ち眉目秀麗な貴公子に變る。夫人も思はず見とれて、

「まあ、お立派ですこと。だが父のところ御酒など召上つても、必ず酔つ拂つてほんたうの姿をお出しなさいますなよ。」

「大丈夫だよ——ぢや行つてくるからね。」
夫人に別れを告げ、雲に乗つて寶象國に向ひました。

寶象國の宮中では、國王はじめ三藏等が、八戒悟浄の消息如何と待つてゐたところへ、門番が來て謁見者がある旨を取次ぐ。

「たゞ今、陛下の三番目の婿様だといふ方が見えましたか、如何取計らひませうや？」
「たに、三番目の婿？ わしには二人しか婿はないが、何者のことであらうの。」

と侍従の人々に聞かれる。
「三番目の婿様と申しますからは、多分第三の王女百花羞様をさらつて參つた、破月洞とやらの妖

怪ではありますまいか。」

「如何にも、その妖怪かも知れん。だがそんな者に會ふ用はない。早く追ひ歸せ！」

國王は顔色を失つて、面會謝絶を命ぜられたが、三藏かたはらから、

「しばらくお待ち下さい。あの妖怪は、雲や霧に乗つて歩きますから、陛下のお許しがなくとも、参らうと思へば勝手にはひつて参りませう。それよりはお召し入れになつた方が無難かと存ぜられますが……」

「それもさうぢやの——然らばすぐさま呼び入れい。」

殿中の男女は、どんなおつかない化物がやつて來ることかと、息を殺して見てみると、そこへしづしづ現れて來たのは、案に相違して水のたれるやうな美丈夫。ルドルフ・ヴァレンチノ、ラモン・ナヴァロそこ退けといふやうないゝ男なので、群臣あつと感嘆して開いた口がふさがらない有様。

今まで恐れてゐた國王は、すつかり嬉しくなつてしまひ、

「ウ、ウ、お前か、百花羞の婿と申すのは……よく参つた。して何時どうして彼女と夫婦になつたのぢや？」

魔王は胸中してやつたりと思つたが、そんなことは顔にもあらはさずに、出鱈目の長物語をはじめました。

「私は碗子山の麓、破月村の者でございますが、十三年前獵に出かけました時、一疋の虎が美しい女をくはへて走つてゆくのに逢ひましたゆゑ、ねらひ定めて一矢射ますと、虎は女を棄て、矢を受けたまゝ逃げてゆきました。女は介抱の甲斐あつて幸ひにも蘇生しましたが、家を聞いてもたゞ民家の者だと申すばかり。その後夫婦のちぎりを結び二人の兒まで儲けましたが、近頃こちらの姫君といふことがわかつたので、お詫ひに参つた次第で御座います——」

一同奇異な物語に、聲を潜めて聞入る中を、辯舌いともさはやかに、なほ出鱈目を續ける。

「件の虎はその後山に隠れて矢創をなほし、劫を積んで變化の術を習ひ、人畜を害してゐると聞きましたが、近頃人の噂によれば、天竺に行く三藏といふ和尚を殺し自分はその姿に變じて、大膽にも宮中に入込んだとの話。今日参殿して見ますと、果せるかな、陛下の隣にすまし込んで坐つてをります。そこにあるのは三藏法師では御座いません、正しく虎です。」

三藏を指さしてハツタと睨み付けた。本人の三藏はもとより滿廷眼をキヨロ／＼、國王も不審に思つて、

「それがどうして、お前に分るか。」

「はい、私は長らく山で虎狩をしてゐましたから、いくら上手に化けたところが、私の眼はくらませません。御疑ひあらば、目前で本相を現してお目にかけてませう。」

とやをら立上つて、三藏の前に進みました。

(三) 虎にされた三藏

魔王は黒眼定身の法といふ人をけものに變らせる法を使ひ、水を含んでブーツと三藏に吹きかけると、不思議や一匹の大虎と變じ、ウオーと凄い聲で唸つたから、殿中は上を下への大騒ぎ。一同われ先きにと奥に逃げ込み、急に軍兵を集めて虎の巻狩を始めたが、三藏には神々の守護があるから、突いても斬つても突いても傷一つ付かん。わあ、騒いだ末、日の暮方になつてやうやくからめとり、無理無態に鐵の檻に押込めました。飲んでトラになつた奴の、留置場に入れられるのは、いくらもあるやうだが、これは甚だ可哀さうです。

國王はやつと安堵し、婿殿の手柄を褒めそやして大饗宴を開かれる。殊に酒興を助けるために選抜された十八人の官女が、このいゝ男の婿さんに氣に入らうと、馬力をかけて歌つたり踊つたり盛んにエロを發散するので、魔王はもう大恐れ。一人残つてがぶくあふつてゐたが、夜も十二時頃になつて次第に酔ひの廻るにつれ、われ知らず正體を現し、そばにゐた官女をばくり、一口にかみ殺してしまひました。

他の官女どもは、この體を見て膽をぶつ潰し、キヤーツと叫んでちりぐに逃げ出したが、皆擔下

のあたりで腰を抜かしてしまひ、誰一人これを宿直の役人に告げ得る者もありません。

この時、三藏の乗馬は、金亭旅館の厩にながれてゐましたが、三藏が虎になつたといふ噂を聞き、これはきつと妖怪の仕業に違ひない、力と頼む悟空は、追放され、八戒悟淨は出たつきり歸つて来ず、どうしても自分が救ひ出す外はないと決心し、手綱を切つて本身の小龍に返り、雲に乗つて御殿に飛んで行く。見れば魔王は唯一人上殿に坐り込み、官女の肉を下物に酒を飲んでゐるので、小龍は身を官女の姿に變じ、嬌態をつくつて魔王のそばに進み寄つた。

「婿君様、お一人でお淋しう御座いませうから、私がお酌を致しませう。その代り私だけは食べないで頂戴。」

魔王は喜んで酌をさせてゐたが、やがて徒然になつたか、

「お前は何か踊りが出来るだらう。一つ流行のダンスでもやつて見せんか。」

「はい、しかし素手の踊りでは興がございませんから、どうぞあなたのお腰の物を、貸して下さいまし。」

魔王の大劔を借りて打ち振り打ち振り、いゝ加減なダンスをやるのを田舎者の魔王は何も知らないから、眼を細くして見とれてゐます。小龍はその隙を見すまし、眞つ二つと斬りかゝつたが、彼もさ

る者、ひらりと體をかはしながら、燭臺を取つて受止める。この時小龍も正體を現し、御殿から雲の上へ飛び出して戦ふこと十數合。魔王の勢ひなかく、鋭く、だん／＼受太刀になるので、顔を目掛けてハツシとばかり、劍を投げつけたが、魔王は片手でむんづと引つゝかみ、一方の手で力まかせに燭臺を抛り付けた。

小龍は身をかはす暇なく、したゝか腿を打たれたので、こはかなほじと急いで雲から逃げ下り、御水河の水底深く潛み隠れる。くやしうけれども相手が強いらだから致し方がない。やがて魔王が見失つて立去つたのを見すまし、金亭旅館の厩に戻つて寝てゐました。

さて八戒は悟浄をだまして、草の中で惰眠を貪つてゐましたが、ふと眼をさまして見ると、もう夜中です。さすがに周章狼狽して、間拔けた顔をしながら、金亭旅館に歸つて見ると、白馬ばかりで師匠の姿が見えない。

「さあ大變。馬がこんなに怪我をしてゐるし、和尚様は誰かにさらはれたに違ひない。」
そこら中をうろ／＼するばかり。白馬はこの時一聲高く、

「ひゝん、八戒さん。お前さんは一體どこで何してゐたんです。」

と怒鳴り付ける。何しろ馬が人間語を發したんだから、八戒驚くの驚かないの、すつと尻餅をついてぶつ離れ、それから四つん這ひになつて逃げ出さうとした。

馬に話しかけられちや、誰だつて驚きませう。八戒青くなつて逃げ出さうとする衣の袖をしつかとくはへて引戻し、

「兄貴、何もそんなに驚くことはありません。まあ落着いて私のいふことを聞いて下さい。」

と、三藏が虎にされた一件その他を物語つたが、闘志を失つてゐる八戒は、頭をかへて尻込みするばかり。

「俺の力では、到底あの化物に勝つてつこはないよ。マゴ／＼してゐてふんづかまるより、命あつての物種だ、早く一緒に逃げようぢやないか。」

又コソ／＼はひ出さうとするのを、馬は眼に涙を浮べてくはへ止める。とてもトンチンカンな照原多助です。

「どうして兄貴はそんなに臆病なんです。お師匠様の難儀を見捨て、逃亡するなんていふことがありませんか。あなたがどうしてもかなはないのなら、これからすぐ華果山に行つて、悟空さんを呼んで来て下さい。お師匠様を救へるのは悟空さんの外にありません。」

「だつてそれや駄目だよ。奴はこの前の破門一件で俺を怨でるから、うつかり行かうもんなら、あの如意棒でたゞつ殺されてしまふ。」

「大丈夫です、悟空さんはそんな了見の狭い方ぢやありませんよ。和尚様の難澁なさつてゐることを

聞けば、きつと飛んで来て、救つてくれます。グツ／＼せずに早く行つて来て下さい。」
最初溢つてゐた八戒も、白馬の熱心な激勵の辭に感憤して、たうとう行く氣になり、
「お前のいふことはよくわかつた。少々きまりが悪いけども、仕方がないからたのんで来よう。」
ひらりと雲にまたがり、華果山さして飛んで行きました。

(四) 悟空に頼んで

悟空はさきに八戒の讒言で三藏から勘當され、餘儀なく故郷華果山に歸つて見ますと、山は留守中
獵人に荒されて、大戦當時のベルギー以上に慘憺たる光景を呈してゐた。悟空憤慨して神風の法を使
ひ、岩石を飛ばして押寄せて来た獵人を皆殺しにし、「再び華果山を修む、齊天大聖」といふ大看板
を掲げて、小猿どもを相手にお山の大将をきめ込んでゐます。

ある日のこと、大勢の家來をつれてピクニックに出かけ、眺望のいゝ山の上で御馳走を開き、酒宴
を始めると、遙末座に見馴れぬ風をした男が、顔を隠してうづくまつてゐます。恰度、放蕩息子
が二三日家をあけて、親爺の前に現れた時のやうな形。

「おい、そこにうづくまつてゐるのは誰だ、顔を見せろ。」

悟空にははれてモデ／＼しなから、剽輕な顔を持上げたのを見れば、猪悟能こと法名は八戒。

「よう兄貴暫く、御機嫌よう、相變らずお盛んで……」

平手でびしゃ／＼額をたゞきながら、てれ隠しにいろんな追従をいふ。悟空思はず噴き出して、

「ハ、ハ、ハ、何だ八戒ぢやないか……しかしお前は和尚様のお供をせずに、何でこゝへ来たんだ。

和尚様に何か變事でもあつたのか？」

師匠思ひの悟空は、八戒に讒言された怨みも、また破門になつたことも、別に氣に止めてゐぬらし
く、頻りに三藏の身の上を心配するので、八戒は心中占めたと思ひ、虚實取りまぜて、先達て中の遭
難一條を話す。悟空はうなづきながら聞いてゐたが、

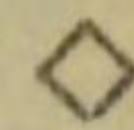
「だからいはんこつちやない。俺がお前たちと別れる時、若し化物に逢つたら、俺の名をいへと教へ
て置いたぢやないか。お前は間抜けだから忘れていはなかつたんだらう。」

とそろ／＼誘ひにかゝつて来る。八戒はこゝぞとばかり悟空を激させるやうに辯口をふるふ。

「兄貴、俺がそれを忘れるもんか。ただどの青面魔王の野郎鼻の先で笑ひあがつてね、なんだあ
んなヘナチヨコ猿、若しやつて来たたら皮を剥ぎ筋を抜いて、天ふらにして食つてやるなぞと、とても
失敬なことをぬかすんだよ。」

これ聞いて悟空は、棘のやうに顔を赤くし、齒をガタ／＼かみ合せ、地團駄踏んで怒り出した。

「うーむ、無、無禮千萬な奴め。よし、これから飛んで行つて臆にしてやるッ。」



極度に興奮した悟空は、取る手もおそしと虎の皮のふんどしを締め、他所行の法衣を羽おり、八政とともに、舂斗雲に一層のスピートをかけて、青面魔王の本城破月洞に馳せ向つた。

折柄洞門の前に二人の頭はない子供が、ジャンケンポンかなんかして遊び戯れてゐたが、悟空はいきなり二人の頭を引つつかんで、逃げ出さうとする。火のつくやうな子供の泣き聲に驚いて、駆け出して来たのは百花羞夫人。

「これ／＼何といふことをするのぢや！ その子の父は普通の者ぢやない。少しでも粗相をすると、とんだ目に逢ひますぞ。」

「そんな者は恐くも何ともない。俺は三藏法師の一の弟子孫悟空といふ者だ。合弟子の沙悟浄が洞の中につかまつてゐる筈、それを放免するならこの子供を返してやらう。」

夫人はこれ聞いて急いで洞内の監房に駆け込み、

「昨日私が危ふく夫のために殺されようとしたのを、あなたがうまく辯護して下さいましたから、私もあなたをお助けしようと思つてゐたところですよ。今恰度、悟空といふ方が見えてお話がありましたから、早く行つて私の子供も返すやうに仰有つて下さい。」

と悟浄の繩を解いてくれた。悟浄は喜んで表へ飛び出し、二人に會つてこれまでの一伍一件を話し子供は返してやるやうに頼んだが、胸に一計を案じ出した悟空は、契約を履行しようとしな

「なあにかまふもんかな。お前たちはこの小伴を寶象國につれて行つて、御殿の上から投落せ。化物はこれを見ると驚いてこゝへ歸つて来るに違ひないから、俺が待つてゐて生捕りにしてやる。」

二人に子供を渡して、寶象國へやつてしまつたから、夫人は悟空に武者振りついて泣出しました。「この誑つきめ。お前はあの和尚様の弟子などといひながら、誑をついていゝのか。さあ子供を返せ返せ。」

しかし美人の紅涙も、悟空には一向きゝ目がない。「さう怨みごとをいひなさんなよ。どうせあれだつて化物の種類ぢやがアせんか。あんたは化物の子供を可愛がつて、お父さんやお母さんを思はねえんですかい。」

「さうではないんだけど、私だまされて、こゝの家内になり、子供まで生んだんです——あゝ、私どうしよう／＼。」

取亂して悶え泣くのを、悟空柄になくやさしい聲を出して、背中などを撫でながら慰める。「奥さん、そんなにお泣きなさるな。今に私がその化物を退治して、御両親のおそばへお連れ申しま

— 113 —

— 112 —

「すーあんたはその間どこぞへ隠れて、待つてゐなさい。」

夫人は仕方なく、いはれるまゝに洞内深く身を隠した後で、悟空は夫人と寸分違はぬ姿に變り、閨房に入つて魔王の歸りを待つてゐます。何しろ鬘も衣裳もいらすに、お尻をひよいとゆすぶりさへすりや、思ふまゝに變装が出来るんだから調法至極。

一方寶象國へ飛んで行つた八戒と悟淨は、二人の子供をひねり殺した上、宮中目がけてばらばらと投下した。泥鰌が降るといふのは話にあるが、人間が降つたのは開關以來の大椿事。宮中の文武百官顔色をかへて驚き騒いでゐるのを見て、

「それは青面魔王の餓鬼ともだ。どうだい、驚いたらう。」

と雲の上から大聲でのゝしる。折柄魔王は二日酔ひの氣味で横になつてゐたが、その聲を聞いて表へ出て見ると、件の有様。

縛つて置いた悟淨がぬけ出して來た上、子供までさらはれたのを見ると、留守中重大事件が突發したに違ひない。何にしても一旦歸つて見なくてはと、魔王は國王に會ふ暇もなく、直ぐ雲に乗つて破月洞へ歸つて來る。

待受けてゐた賈夫人の悟空、魔王の姿を見るや、物をもいはずその胸に取りすがつて、おい／＼泣き出しました。

(五) 魔王の化の皮

百花羞夫人に變装した悟空が、魔王の胸に取りすがつて泣きじやくるさまは、正に海棠の雨に惱むといった風情。魔王はこれが賈物とは心付かないから、愛妻のつもりで背中やお尻などを撫で／＼、極力いたはります。

「百子や、お前なぜそんなに泣くのだい。わけをいつたらい／＼ぢやないか、え、え。」

「あなた、なぜ早く歸つていらつしやらないんです。今朝方八戒といふ豚のやうな坊主が來て、あの悟淨を奪つて行つたばかりか、二人の子供まで攫つて行つたぢやありませんか。それにあなたは今頃酒臭い息をして歸つていらつしやるなんて、ひどいわ／＼。」

魔王はこれを聞くと地團駄ふんでくやしがつた。

「畜生々々、ぢやほんたうに子供を搔つ拂ひあがつたんだな——ようし、今から飛んで行つてかたきを取つてやるから、ちよつと待つてゐてくれ。もう泣くな／＼。」

夫人を引寄せ、お別れのキッスをしようとする。その時、悟空は正體を現し、ぐいと魔王の脣をひねり上げた。

「薄ぎたない、止めてくれ——俺は唐の三蔵の一弟子孫悟空様だぞ。ゆゑあつて一時勘當を受け郷里に歸つてゐたが、貴様が師匠を苦しめ、且つ俺の悪口をいつたと聞いてやつ付けに來たんだ。さア神妙にこの棒を受けて、くたばつてしまへッ。」

花のやうな美女が髻面の和尚に變つて罵るので、一時はびつくりしたが、魔王も負けてはゐない。「なにを、この猿面冠者。貴様の悪口なんかいつた覚えはないが、俺にとつては子供のかたき、さア逃げようたつて逃がさんぞ。」

家來に命じて四方の門を締させ、押つとりかこんで打つてかゝる。悟空くると宙返りをするや、忽ち三面六臂の大男となり、見る見る中に如意棒で家來どもを殴り殺し、更に靑面魔王と一騎打ちの大立廻り。そのうち悟空の腕やまさりけん、一棒發止と魔王の眉間に打ち込んだと見るが否や、姿は見えずなりにけり。

悟空は直ちに中天に駆け登つて八方を物色したが、どこへ逃げたか更にわからない。さては彼奴は地上界の妖怪ではなかつたのだと、一足飛びに南天門に舞上り、しかくの趣を上帝に奏上して、天上界の神々たちの點呼をしてもらひました。

その結果、果して二十八宿中の奎星が、十三日前（下界の十三年）から家をあけてゐることがわかつたから、残りの星員たちは仲間の面汚しだとして、天上隈なく搜索を始めた。奎星は悟空に打たれてから、雨雲の中に姿を隠してゐたが、仲間の聲にひよつくり頭を出したのが運の盡き、忽ち捕縛されて上帝の御前に拉致される。

上帝の峻嚴なる訊問により、奎星包み切れずに自由したところによると、彼は天上披香殿の官女と相愛の戀におち、下界で同棲しようとして約束して、女を寶象國の王女に生れ代らせ、自分は妖怪となつて十三年間破月洞にあまり夢を結んだのだといふ話。上帝はこれを聞いてその罪輕からずとなし、太上老君が丹をねる爐の隠亡に左遷して、この裁判のケリがつく。好いた女と同棲したぐらゐで、隠亡に追落されるとは、當世と違ひ昔の天上の法律はきびしいもんです。



そこで悟空は破月洞に歸り、百花羞を連れて寶象國にまゐりますと、何しろ十三年目の親子の再會ですから、國王皇后夢かとはかり打ち喜び、相抱いて嬉し泣きに泣くばかりです。國王は厚く悟空に禮を述べてから、臣下に命じて三蔵の前に案内させると、虎にされてゐる三蔵は、肉でもくれる見物が來たとも思つたか、檻の間から頭を出して、舌をペロ／＼させてゐる。

「和尚様、情ない姿におなり遊ばしましたなあ。あなたは八戒の讒言を信じ、私を大悪人のやうに罵つて勘當なさいましたが、どうしてこんな姿になられたんです。」

悟空少々戯弄氣味でかういひましたが、魔王の妖術にかゝつてゐるから、馬の耳に念佛同然、たゞ檻の中をうろくしてゐるばかり。

かたはらにゐた沙悟淨は、悟空がこの前の破門一件を根に持つてゐて、三藏を虎のまゝにして置き元の人間に戻してくれんのではないかと心配し出した。

「兄貴、さういや味をいふもんぢやない。昔の諺にも坊主の顔と思はず佛の顔と思、といふことがあるぢやないか。かうしてこゝに來た以上は、以前のことにはあつさり水に流して、たのむから和尚様を元通りにしておくれよ。」

元より悟空は、そんな尻の穴の狭い男ぢやない。

「さうとも、どうしてこのまゝに打ちちやつて置けるものかな。さア誰か水を一杯持つて來てくれ。」と水を含んで、プツと虎の顔に吹かけると、忽ち魔王の術が破れて三藏の本體に返つた。これは悟空でなくとも、トラになつた奴の顔に冷水をぶつかけたら、大概本性がつきませう。

三藏はあたりキヨロく、悟空の姿を見るや驚いて聞く。

「お前は悟空ではないか、どうしてこゝへ來たのぢや。」

悟淨引取つて、三藏が虎にされてからの顛末を、事細やかに物語ると、三藏は悟空の手を握つて心から感謝する。

「サンクエウ、ベリ、マツチ。お前を勘當したのは、全くわしのあやまちぢやつた。國へ歸つた時は、きつと皇帝に申し上げてお前を功一級にしていたゞかう。」

寶象國王も共々に喜んで、四人の師弟を厚くもてなし、たほ王女再生の恩に酬ゆるため、澤山の金銀財寶を贈らうとしたが、欲得づくでしたんぢやないからと、一切辭退してまた西に旅立ちました。商品切手かなんかをもらつて、御用商人の便宜をはかつてやるやうな、どこかのお役人とは、ちと精神が違ふ。

金角銀角兄弟

(一) 八戒また失敗

旅路を重ねる中に、また春がめぐつて來た。ある日一行が險峻な山道に差しかゝると、一人の木樵が現れていふには、

「あゝた方は唐の國からいらつしたんでせう、それなら御用心たさいましょ。この平頂山の蓮華洞といふ洞穴に、金角銀角といふ兄弟の魔王が住んでゐますが、唐から來る坊さん方の人相書をこしらへて、通りかゝつたら食つてやらうと、先達て中から待ち構へてゐますぜ。」

悟空は、大したこともあるまいとは思つたが、兎に角、偵察するに如くはなしと考へて、三藏に諮つた。

「如何でせう和尚様、私と悟浄が残つてあなたを護衛してゐますから、八戒に山の様子を探らせにやつては……」

「さうぢやの、それがよろしからう——これ八戒、お前御苦勞でもちよつと行つて見て来ておくれ。」八戒心中底氣味悪く思つたが、師命もだし難く、澁々ながら熊手をかついで出かけて行く。

悟空は前例に鑑み、八戒に餘り信用が置けないから、行動監視のため虻に身を變じ、耳の裏にとまつて付いて行くと、一里も來ないうちから不平たらくです。

「悟空の奴め、餘計なことをいふもんだから、こんないやな役目を仰せ付かつた。癩にさはるからこの邊で一眠りして、歸つていゝ加減なことをいつてやらう。」

獨り言をいひながら、草の中にもぐり込んで十八番の晝寢を始めた。悟空これを見すまして啄木鳥になり、こつそり飛び下りて八戒の肩を突つく。八戒むにや／＼いひながら肩を袖で隠すと、今度は耳を突つく。うるさくたかるので、さすがの寢坊も寢付かれません。

「畜生、いま／＼しい小鳥だな——ようし、仕方がないから歸つた時の出鱈目報告を稽古しよう。」とかたはらの石にお膝儀をしながら、自問自答をやり出ししました。

「俺が歸ると、きつと和尚様が化物がゐたかとお聞きになるに違ひない。そしたら四五百疋のまじたといつてやらう。山の名はと聞かれたら石頭山、門は鐵葉門といふ風にすらく／＼澁みなく返事をすれば、あの猿だつてきつとだませる。うまい／＼。」

悟空が可笑しさをこらへて見てゐるとも知らず、何度も稽古してから、やがて何食はぬ顔をして三藏のところへ歸つて來ました。



悟空は八戒より一足先きに歸つて來て本身に返り、ちゃんと出鱈目の種を明かしておきました。八戒はそんなことは夢にも知りません。

「和尚様、たゞ今戻りました、いや大變な山で御座いますぜ。」

「御苦勞々々、そしてほんとに化物がゐるたかい？」

「みましたとも／＼、何でも大小取りませ四五疋はをりました。私は門の近くまで行つて、確に見届けて來たんで……。」

先刻石を相手に稽古した通り、眞面目腐つて答へるのを、聞いてゐた悟空。

「ふうん、八公お前は草の中に寝てゐて、よく化物の數まで調べて來たね、まだ夢でも見てゐるんぢや」

ないかい。」

「兄貴、失敬なこといひつこなしにしようぜ——一體俺がいつどこで晝寝をしたい。」

「さうか、ぢやこの山は何といふ山だね？」

「知らなくつてさ、石頭山よ。」

「よし、お前はもう口をきくな、俺がお前のいふ通りを、すつかりしやべつてやらう。いゝか——洞門は鐵葉門さ。中の廣さはと問はれれば、百間四方といふだらう。門の上に釘が立てゝあつたか問はれれば、つい氣が付きませんでしただらう。かうすらく返事をすれば、あの猿だつてきつとたませる。うまい——と、かうぢやないか、どうだ？」

八戒はあらひざらひ出鱈目を復習されたので、喫驚仰天、頭を兩手でかゝへて、ひたあやまりにあやまる。

「全く濟まないことをした、兄貴の天眼通には眞から恐れ入つてしまつた。今度こそはほんたに行つて見てくるから、どうぞ御勘辨々々。」

「この馬鹿野郎！ 和尚様にいひつけられながら、俺の悪口をいつたり、晝寝をしたり、その上大嘘をついてよくも和尚様をだまさうとしたな。以後の見せしめ、はり倒してやるぞッ。」

悟空が怒つて如意棒を振上げるのを、悟浄中に入つてさまゝになだめ、追ふやうにして八戒を出してやる。今度は誰も隨いては行かないが、すゝき尾花の類まで悟空の變化でないかと疑はれ、おつかなびつくりで、山道を急いで行きます。

銀角魔王はかねて三藏等を捕へようと、この日も三十名ばかりの手下をつれて巡邏してゐるうち、道でばつたり八戒と行きあつた。銀角携へた人相書と照し合せて、

「それ、彼奴こそ猪八戒に違ひないぞ。」

と叫ぶ聲に、驚いて逃げ出さうとしたが、銀角は刀を抜いて勢ひ鋭く追ひかけて来る。八戒も仕方なく熊手を滅茶苦茶に振り廻して戦つてゐるうち、藤蔓に足をからまれてすとんと轉んだのを、手下の小化物得たりと折り重なつて縛り上げてしまひました。よくも度々捕虜になりたがる奴です。

銀角は八戒を引き立て、蓮華洞に歸り、兄の金角に告げると、人相書と引き合せて見て大喜び。

「確かにこれは猪八戒だ。あまりうまさうでもない奴だが、まあ池へでもつけて置いて、油を抜いてからいふしてハムにでもして食はう。何しろ此奴があるくらゐなら、三藏も近所に來てゐるに違ひないから、も一度行つて見て來てくれ。たゞ悟空といふ奴には油断するなよ。」

兄のいひつけに銀角は、すぐまた山の上に引返し、御馳走おそしと網を張つて待つてゐました。三藏の方では八戒の歸りを今かくと待つてゐたが、いくら經つても姿が見えない。

「八戒はどうしたのであらう。何か變事でもあつたのではあるまいか。」

「あの阿呆、また寝てゝもゐるんで御座いませう。兎に角皆で行つて尋ねると致しませうか。」
悟空は馬の手綱を引き、悟淨は後に従ひ、山の中に入つて行きますと、はるかにこれを見付けた銀角は、急に年寄つた道士、日本の修験者、山伏の類の姿と變り、足に怪我した風をして路端に倒れてゐる。

「痛い、痛い。誰か助けて下さい。」

如何にも哀れげな聲でさけんでゐるところへ、三藏は通りかゝつて参りました。

(二) 泰山壓頂の法

人の難儀を見ぬ振りには出来ぬ三藏が、急いでそばに行つて見ると、足からだら／＼血を流した道士が如何にも痛さうな風をして、草の中にあへぎ苦しんでゐます。

「おゝこれはひどい傷だ。一體あなたはどくなさつたんですか。」

「はい、どなたか存じませんが、いゝところへ来て下さいました。私は山の西側にある清幽觀の道士ですが、たゞ今こゝで虎に遇ひ、一生懸命に逃げるうち、石につまづいてこんな大怪我をしたので、どうにかお前に私を助けてつれて行つて下さいませう。」

「それはお氣の毒な。御安心なさい、きつとお助けします——これ悟空や、お前この方を負つて行つておあげ。」

悟空はこの老人を化物と見抜いて、殴り殺さうと思ひましたが、また何時かのやうに叱られては困ると、素直におんぶして二人の後を付いて行く。

やがて四五里ほど来た頃、先に立つた三藏と悟淨は、山の窪みに下りて見えなくなつたから、この隙に投げ殺してやらうと身構へをする。魔王は早くもそれと悟つて、負はれながら咒文を唱へ、須彌山を呼んで悟空の頭に載しかけたが、悟空もさる者、ひよいと首をひねつて左の肩で受止めた。

「ふゝんだ、こんなヘツポコ山で俺が潰せるもんかい。」

冷笑された銀角、さらばと蛾眉山を落したが、今度は右の肩で受け止め、二つの山を平氣で擔ひながら、飛ぶやうにして三藏の後を追つて行きます。

銀角は益々驚き、取つて置きの泰山壓頂の法を念じ、泰山を呼んで空中から落したので、さすがの悟空ももう受止める餘力がない。電車に轢かれた蟊蛙のやうに、忽ちベシヤンコに押し潰されてしまひました。

仕すまじたりと銀角は、後追ひかけて行つて、雲の上から両手に三藏と悟淨を引つかみ、得意満面で蓮華洞に歸つて来る。

「金角兄貴、酒の肴に彼奴等をみんな取つゝかまへて来たよ。」

「さうか、それはお手柄々々——だが、肝腎の悟空は見えないぢやないか、あれをつかまへて来なくちやまだ駄目だよ。」

「そこに拔かりがあるんもなかね。悟空の奴は泰山でおつぺして来たから大丈夫さ。俺達が行くまでのこともないから、誰か家来をやつて、あの二つの寶に盛り込んで来させませうや。」

この二つの寶といふのは、金の瓢箪に玉の壺のことで、名を呼ばれて答へた者は、すぐその中に吸ひ込まれて罐詰同様になり、なほ咒文を書いてあるペーパーを貼れば、骨も肉もどろろくに溶けてしまふといふ、險難な品です。金角はこれを精細鬼、伶俐蟲と、ふ利口さうな名前の家来に渡して、悟空を罐詰にして来るやうに命じ、三藏と悟浄をば廊下の天井につるして、どう料理しようかなどと相談してゐました。

悟空は山の下に押しつぶされたが、壓死してしまつた譯ぢやありません。震災の際、潰れた家の梁に、背中を押し付けられたぐらゐ。しかし嘗て五行山に封じ込まれた時と同様、全く身動きが出来ないのだから、さすが剛毅の彼も心細くなつて泣き出しました。

「和尚様あ、あなたはどこへいらつしやいました。天竺までお共しようと思つて居ましたのに、今こんな目に遇ふとは、何といふ因果でせう。あゝ魔念だ、口惜しいワ！」

泣き聲だつてなみくの泣き聲と違ふ。天地をゆるがすやうな大した泣き聲だから、忽ちその地方の守り神たちに聞え、さては天竺に行く和尚の用心棒が苦しめられてゐる、救はずんばあるべからずと、一同で山をはね上げて助け出した。

死ぬかと思つた悟空、幸ひに命を拾つたので、神々に再生の恩を謝し、なほ魔王兄弟の實力などを聞いてゐるところへ、遙向うから二つの寶を持つた精細鬼、伶俐蟲の兩人が、何かしやべりながらやつて来ました。

悟空はこれを見るや、神々たちを立去らせた上、自分は氣高い仙人の姿と變つて、二人の来るのを待つてゐます。

やがてやつて来た精細鬼と伶俐蟲の兩人、この仙人を悟空の化けたのとは知らんから、丁寧に尋ねました。

「もし、あなたはこの邊で見かけぬお方ですが、どちらからいらつしやいました？」

「わしか、わしは蓬萊山から仙術の教授に參つた者ぢやが、兄いたちはどこに行かれるのぢやないか？」

時代遅れの老政客みたいに、いやにも勿態ぶつていふと、兩人は仙人の本場たる蓬萊山の人と聞い

て、一層尊敬します。

「へい、さうで御座いますか——私どもはこの山奥にある蓮華洞の小者ですが、御主人の命令で、孫悟空といふ奴を捕へに行くところで御座います。」

「さうかい、それはいゝところで逢つたものぢや。わしもあの悟空にはちと遺恨があるから、一緒にやつてお手傳ひをしてあげよう。」

「いやそれには及びません。もう主人がちゃんと山で押さへ付けてあるんですから、私たちはこの寶物を持つて行つて、悟空を詰め込んで來さへすりやいゝんです。」

「ほう、それは珍しい寶物ぢや。一體どうして人を盛り込むぢやね。」

兩人は褒められて自慢らしく、瓢箪と壺を取出し、人間を吸ひ込んでどろ／＼に溶かす方法まで説明して聞かせる。悟空内心大に驚いたが、一つ計略で巻上げてやらうと考へ、輕蔑したやうに鼻の先で笑つて、

「なーんだ、これなら大したものぢやない——わしの持つてゐる寶の方がずつと上等ぢやて。」と股の間の毛を一本抜き取り、二尺三寸ばかりの大瓢箪に變らせて引出しました。兩人は眼を圓くして驚き、

「いやあ、これは美事なもんだ。してその瓢箪で、どんなことが出来るんで御座いますか。」

「わしのは人間なんて小さいものでなく、天が盛り込めるのぢやよ。」

「え、全くですかい、それは？」

「全くともさ——疑はしく思ふなら、眼の前で盛込んで見せようかね。」

これを聞いた兩人は、「どうだい、寶物を交換してもらはうぢやないか。」と、こそ／＼相談をはじめました。悟空は心中で「占め／＼」と喜びながら、

「おい／＼、何を内緒話しをするのぢや——若しこれが欲しいんなら、少しわしの方が損が行くけれども、その二品と取換へてやつてもいゝが……」

悟空なかく掛引が上手だ。地方の觀光客などは、よくこんな手でいか物をつかまされます。

「さうですか、さうして下されば願つたりかなつたりです。ですが一ぺん天を盛入れて見せて下さいませんか。」

「いゝとも、今すぐやつて見せよう。」

咒文を唱へてひそかに三藏を守護する神々を呼び、天上玉帝に申し上げて暫くの間、日光をさへざり、下界を暗くしてもらつて來るやうに頼む。

やがてその準備が整つたとの復命があつたので、悟空は口の中でストトン節かなんかいゝ加減な咒文を唱へ、ボンと瓢箪を投げました。天上ではこれを合圖に黒い旗をひろげて日輪を隠したから、世

空手の二人、しよげ切つて歸つて行く後を、悟空は蒼蠅に變つて付いて行きます。騙取した寶は、如意棒同様大小自在になるのですから、一向邪魔にはなりません。

蓮華洞ではちやうと金角銀角兩魔王が、テーブルを圍んで、さいつおさへつ飲んでゐたところへ、兩人が歸つて來ました。

「お、待つてゐた。猿鍋をして食ふから早くこゝへ持つて來い。」

まるで兩國のもゝんじ屋に行つてゐるやうです。二人は穴にでも入りたいやう、低頭平身して、詐欺にかゝつた顛末を陳述すると、果して金角は齒がみをして怒つた。

「この間抜け野郎め、あの大事な寶物を取られて、よくもノメノメと歸つて來たな。よし、罰として今ひねり殺してやるッ。」

銀角は二人が眞負だから、そばからいろ／＼と宥める。

「まあ兄貴、勘辨してやりなさい。その代り悟空をふんづかまへて、あの寶も取返しますから。」

「でもあの山から抜け出したやうな通力のある奴を、どうしてつかまへるんだ？」

「まだ七星劍と芭蕉扇が手許に残つてますし、挽金繩は壓龍洞のおふくろのところにある筈だから、おふくろを呼んであの繩を借り受けませう。さうすれば、悟空を捕縛するぐらゐは何でもありませう。」

金角も漸くこれに同意したので、今度は巴山虎に倚海龍といふ家來を使ひに出すことにしました。

蒼蠅になつて室の隅にとまつてゐた悟空は、すつかりこの話を盗み聞き、虎龍兩人が出かけて行くのを見るや、その後について飛んで行く。やがて目的の壓龍洞近くなつた頃、本身に返つていきたり

兩人を殴り殺し、一本の毛を抜いて巴山虎に變らせ、自分は倚海龍の姿となり、使者の振りをして洞内に乗込みました。

魔王のおふくろといふのは、年七十あまりの遣手婆見たいなずるさうな顔をした奴。二人に化けた悟空は、その前に畏まつて使ひの趣を述べる。

「私は蓮華洞から參りました者。御主人様の御言つては、唐の和尚の肉を差上げたいから、是非お越し下さるやう。また、弟子孫悟空を捕縛するのに、御祕藏の挽金繩を拜借したいとのことでございます。」

こんな化物婆でも、悴の招待は嬉しいと見え、早速、駕籠で出かけましたが、五六里ばかり來た頃、悟空は如意棒を取出し、突然駕籠かきを打ち殺した。物音に驚いて顔を出した婆も、續いてピ

シヤリ。見るとこの婆の正體は、毛が針のやうになつてゐる九尾の狐です。

悟空そのふところを探つて挽金繩を奪ひ取り、山崎街道の定九郎宜しくいたりと凄く笑ひ。それから四本の毛を抜いて龍虎兩人と駕籠かきをこしらへ、自分は婆に化けて今度は御後室様氣取り、

悠々駕籠にゆられて行く。
悟空もなかく忙しいや。



偽おふくろの悟空、すました顔で蓮華洞に乘込むと、金角銀角は大急ぎで出迎ひ、床の間の前に据ゑて大變な尊敬しやうです。悟空は婆さんの聲色よろしく、
「お、金に銀や、ねんごろな招待嬉しく思ひますぞ。して今日は一體どういふ催しなのかい？」
「はい、實は今朝ほど唐から参つた和尚を生けどりしましたので、お母さんの長命の薬に、差上げたいと存じ、お招きしたので御座います。」

こんな話をしてゐるところへ、山番の家來が息せき切つて、御注進に駆け付けて来た。
「だ、大事件が突發しました。先刻悟空が途中で御隠居様を慘殺し、自分がその風をしてやつて来た様子です。」

金角はこれを知り、寶劍を抜いていきなり悟空に斬付けけるのを、逸早く體をかはして洞外に逃げ出す。金角なほもと追ひかけようとしたが、その袂を押へた銀角。
「兄貴、私が待つてつかまへて来ます。あなたはこゝで待つていらつしやい。」

といふが早い、同じく門外に飛び出して大音聲。

「こら悟空、貴様の師匠とあの豚を返すから、おふくろと寶物を返せッ。」

「馬鹿いへ、俺は貴様等兄弟をたゞき殺して、和尚様を取返すのだ。」

悟空が如意棒で打つてかゝるを銀角は七星劍で渡り合ひ、雲を蹴つて戦ふこと約二時間。野球なら九回なほ同點、エキストラ・インニングに入らうといふやうな、技倆伯仲の接戦なので、悟空氣をいら立て、さつき婆から分どつた挽金繩を取出し、銀角目がけてばらり投げ付けました。

ところがこれは大失策。元來この繩には縛る咒文と、解く咒文とあるのですが、悟空はそんなことを知らず筈がありません。何にもいはずにたゞ投げかけたから銀角は平氣の平左、繩を受止めて縛る方の咒文を唱へ、あべこべに投げ返したので、悟空はさながらカウ・ボーイの投繩にかゝつた野牛みたい、藻掻けば藻掻くほどかたく締上げられるばかり。

銀角繩先きを引張つて、意氣揚々引あげて来ると、案じてゐた金角は大満悦。ふところを捜して金の瓢箪と玉の壺を取返し、柱に縛り付けて置いて、また奥で酒盛りを始めた。こいつ等アルコールが好きで、やゝともすると酒にするが、これがよくない。

悟空柱に繋がれて暫く神妙な風をしてゐたが、當番の看守がちよつとよそ見をしたひまに、如意棒をやすりにして繩をすり切り、例の通り毛を抜いて身代りをこしらへ、自分は看守になつてのこゝ

魔王の酒の席へ出かけて行つた。

「申し上げます。あの悟空の奴、縛られながら頻に這ひ廻るので、大事な提金繩が切れるかも知れません。何か別な繩を貸していただきますまいか。」

金角は尤もに思ひ、腰の帶を解いて貸してくれたので、悟空直ぐさま歸つて提金繩を失敬し、帶で偽物の自分を縛り上げ、一本の毛で提金繩をこしらへ金角のところへ持つて来る。何にも知らぬ金角がこれを受取つたと見るや、悟空は急に門外に走り出で、正體に返つて怒鳴り立てます。

「金角と銀角の將棋駒野郎、表へ出る。孫悟空の弟、悟空孫が、兄のかたきを討ちに來たぞッ。」

銀角はちよつと首をかしげて考へた後、例の瓢箪を抱へて門の外に飛び出しました。

「おい悟空孫とかいふ奴、相手になつてやつてもいゝが、その前に俺が貴様の名を呼んだら、返事をする勇氣があるか？」

「うむ、返事ぐらゐしてやつてもいゝ。」

何しろ呑氣な敵味方です。銀角は占めたとばかり空中に舞ひ上つて、瓢箪の口を下に向け一聲高く「悟空孫」と叫ぶ。悟空は一度は用心して返事しなかつたが、二度目に呼ばれた時、考へた——何度も呼ばれて返事しないのも卑怯なやうだ、殊に悟空孫は偽名だから大丈夫だらう——と、いらぬところを頭張つて「何だ」と答へたのがまた失敗。忽ち瓢箪の中に吸ひ込まれてしまひました。

もと／＼この瓢箪は偽名と否とに拘らず、返事さへすれば吸ひ込んでしまふ、靈妙不可思議な寶物なのです。

(四) 兄弟が瓢箪に

瓢箪の中はあや目もわかぬ眞の闇で、何一つ見えませんでした。大膽不敵の悟空は別に驚きもしない。五百年前太上老君が俺を八卦爐にぶち込んで黒焼にしようとしたんだけれども、びくともしなかつた。凡人ならこの瓢箪で溶かされるかも知れないが、俺様は大丈夫、そのうち封を切つたら飛び出してやうと、度胸を据ゑて呑氣に晝寢をはじめた。

銀角は大得意で蓮華洞に歸り、

「兄貴、この通り悟空孫といふ奴を瓢箪に盛込んで來た、今度こそ大丈夫だよ。」

「お手柄々々、溶けるまでそつとして置いて、いゝ頃にかけて食べるとしよう。」

海鼠腸か鹽辛みたいになるのを樂しみに、二人はまた酒を始める。悟空は一寢入りして起きて見たが、まだ開けて見る様子がないので、退屈でたまらん。印を結んで胴から上ばかりの身體を造り、あぐび交りで誘ひの謀りごとをやつて見ました。

「ああああ、もう腰まで溶けてしまった。どうせ食ふなら早く食つてくれりやいゝのに……」
銀角がこの聲を聞いて、瓢箪の口を抜いて見た拍子に、小さな羽蟲に變つて外へ飛び出し、直ぐまた家來の姿となつて、ちよこんと金角のそばに坐つてゐます。

瓢箪の中をのぞいた銀角は、

「またすつかり溶けきらない。とてもものごとにもう一時間ばかり、待つとしませう。」

と瓢箪を、傍の家來に預けましたが、何ぞ知らん、この家來が悟空なんだから滑稽です。悟空は富樫左衛門の軍卒みたいに、眞面目な顔で瓢箪を捧持してゐましたが、隙を窺ひ毛を抜いて偽の瓢箪を作り、本物は巧に萬引してしまつた。こんな奴に逢つちや呉服屋なんかたまりつこはない。

大分御醜酌の兩魔王は、そんなことにはちつとも氣付かず、藤八拳か何かをはじめ、ハツハ、チヨイナ、トントンなど、夢中で争つてゐる。悟空赤い舌をペロリと出し、門外に走り出てまた大聲で叫びました。

「やあく、われこそは齊天大聖孫悟空の弟、悟空孫のそのまた弟、悟空孫だ。二人の兄貴を早く返せッ。」

金角これを聞いて少々心配顔。

「心配しなさんな、この瓢箪は千人までは盛り込めるんだから、チヨククラ行つて一緒に詰めて來ませう。」

偽の瓢箪をつかまされてるとは知らず、廣言たら〜で表へ現れ、またこの前の傳を應用する。

「うるさくがやく〜わめくなよ——それよりか俺がこゝで貴様の名を呼ぶが、返事をするかどうだ。」

「ふん、返事をするとも——だがその後で俺が呼んだら手前も返事をするかい。」

「しなくつてさ。しかし俺は呼んで置いて瓢箪に吸ひ込むんだが、貴様も何か持つてるのかい。」

「持つてるとも、俺のは雄の瓢箪だが、手前のは雌だらう。さあ手前から先に呼べッ。」

いよく瓢比べの初まり初まり——。
先番に廻つた銀角大喜びで空中に駆け上り、偽瓢箪を下に向けて、
「悟空孫！」と大音で呼ぶ。悟空チャンと心得てゐるから「ハイ」「ハッ」「應」「イエス・サア」「ウイ・ムツシユウ」「ヤア」「ダア」など、平氣であらゆる返事をしたけれども、何ともないので、銀角は大ヒカーン。

「これや機械でも狂つたか、この場に臨んで残念、無念ツ——」
と悲憤慷慨してもしやうがない。悟空は心中で大笑ひ、
「さあ今度は俺の番だぞ、約束通り返事をしろよ。」

舳斗雲に乗つて空に躍り上り、本物の瓢箪を向けて「銀角大王」とやる。銀角は自分の瓢箪さへだめなんだから、奴のもだめだらうと思つて「オー」と答へるや否や、する／＼吸ひ込まれてしまひました。

悟空は直ぐ封印のペーパーをはり、一氣に蓮華洞に飛んで行つて、瓢箪をゆすぶつて見せながら大音聲。

「見ろ、この通り銀角をつかまへて来た——和尚様を返さんと貴様たちを皆殺しにしてやるぞッ。」



金角は弟が悟空孫といふ餘分な御馳走まで、もり込んで来ることと思つてゐたから、その間に水漬にして置いた八戒を豚カツにでもして、弟の歸りを待たうと準備してゐるところへ、あべこべに悟空孫が銀角を捕まへて、洞内に押寄せて来たといふ騒ぎです。

驚いた金角、一旦は床に倒れて嘆き悲しんだが、憤然として立上るや、芭蕉扇と七星劍をかひつかんで門外におどり出した。

「弟のかたき、覺悟ひろげ。」

「何を小纏な、この甚六野郎。」

といふわけで、雙方秘術の限りを盡し猛烈な亂戦。そのうち洞内から數百の手下が飛び出し、八方から悟空に斬つてかゝつたが、悟空この時ちつとも騒がず、一つかみの毛を抜き、身外身の法で數千の小悟空に變らせ、兩軍入亂れて大した合戦になつた。

金角は頃合ひを見はからつて、取つて置ききの芭蕉扇を取り出し、南の方を望んで煽き立てると、忽ち地上一面の火となつて悟空勢に襲ひかゝる。さながら焼津の原における日本武尊みたい。悟空もこれには閉口したから、急に身の毛をもとに収め、たゞ一本だけ自分の身代りを置いて、本身は例の雲に飛び乗り、蓮華洞の空巢狙ひと出かける。

洞内にはまだ若干の家來が残つてゐるが、悟空は片つ端しからこれをたゞき殺し、テーブルの上に置き忘れてあつた玉の壺を搔つ拂ひ、なほ三藏等の在所を尋ね廻つてゐるところへ、金角も息休めに歸つて来た。悟空あわてゝ急に美少年の手下と變り、金角の胸にすがり付いて、絶え入るばかりに泣き出す。

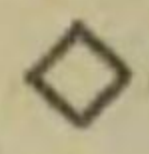
「御主人様残念で御座います。あなたのお留守の間に、悟空孫といふ奴が来て、この通り皆殺しにされましたーあ。」

見ると洞内は屍の山、血の海のやうになつてゐるので、金角も手ばなしでわい／＼泣き出すのを、悟空は甲斐々々しくいたはつて奥座敷は助け入れる。

金角しばらくは寢床の上で泣きじやくりをしてゐたが、その中酒と戦さの疲れが出て、大いびきで寝入ってしまった。悟空今度は枕さがしに轉業、抜き足差し足窺ひ寄り、腰の芭蕉扇を盗んで逃げ出す拍子に、よくあるやつでうっかり足を踏み付けたから、魔王は眼をさまして追かけて來ました。そこで再び七星劍と如意棒の合戦。しかしアル中氣味の金角精氣が續かず、太刀筋亂れて危ふくなつたので、敵を後にどんく逃出し、亡母の隠居所だつた壓龍洞に隠れてしまふ。悟空は強ひて長追ひせず、洞に歸つて梁につるされた三藏沙悟淨、水漬になつてゐる八戒を助出し、互に無事を祝し合ひ、魔王たちが残して行つた御馳走をたら腹食べて、その夜は洞の中に安かな夢を結んだ。寶物を巻上げられた上、散々の敗軍をした金角は残念でたまりません。壓龍洞の女怪や打ちもらされた郎黨を集めて再擧をはかり、おふくろの弟、即ち叔父さんに當る狐阿七を先鋒として、翌早朝蓮華洞へ押寄せて來た。悟空早くもそれと察して、三藏を悟淨に警護させ、八戒とともに門外に出て邀撃戦と出る。

この阿七相當に強い奴で、兩人を相手に奮戦してゐたが、洞内の悟淨これを見て、腕が鳴つてたまらず、三藏を奥深く隠して置いて、横合ひから援兵に出た。阿七不意を打たれてたじろぐところを、八戒得たりと打つてかゝり、熊手に引つけて殺したのは八戒としては珍しい功名。見ればこれは大きな古狐でしたが、九尾の狐婆の弟、なんだから別に不思議はありません。

阿七叔父さんの討たれたのを見た金角は、おぢけ付いて急に逃げ出さうとしたが、この時悟空は空中に飛びあがり、分捕つた瓢箪を下に向けて「金角様」と叫びました。それと知らぬ金角は、家來か呼んだのだらう思ひ、一聲「オー」と返事をする、何かはもつてたまるべき、忽ちするくと吸ひ込まれてしまふ。先客の銀角驚いて「おう兄貴もやつて來たか」と、兄弟瓢箪中に再會といふ珍場面。



何しろ敵の利器を逆用して、金角銀角の二強敵を盛込んでしまつたんだから大成功です。悟空は抜目なく、おとしてあつた七星劍まで拾得して蓮華洞に歸り、敵軍全滅を報告すると、三藏も大喜び。手柄話をしながら一同で愉快な朝餉を終り、やがて出立の準備に取かかりました。その時雲に乗つて東の方から飛んで來た老仙人。

「おい悟空どん、その寶物はわしのものだ、返してつてくれ。」

と呼びかける。さてはまた邪魔がはひつたかと、驚いて見上げれば、かねて知り合ひなる長命仙丹製造元、黒燒屋總本家の主人太上老君です。

「いやあ暫く——だがこの寶物を返せとは、どういふわけなんで……」

「それは皆わしの所有物ぢや。瓢箪は仙丹を入れる器、玉の壺は水入れ、劍は藥を煉りつづす道

具、芭蕉扇は八卦爐の火おこし、摸金繩はわしの帯で、あの二人の化物は金爐に銀爐といふ童子だ。先だつて彼奴等が、寶を持ち逃げしたつきり、行方がわからなかつたが、それをはからずお前さんが召しとつてくれたのだよ。」

悟空は折角苦勞して分捕つた珍品を、むざ／＼返したくはない。

「そんならなぜ無やみに家來を手放して、俺達の妨害をさせたんだ？ あんたの不取締りから俺達にひどく骨を折らしたんぢやないか。あまり蟲のいゝことをいひなさんなよ。」

「はゝゝゝ、それはわしの知つたことぢやない。つまりお前さん達に罪があつて、いろ／＼難行苦行を経なくちや、佛果を得ることが出来ないのだ。」

これを聞いた悟空は、豁然として悟り、快く五つの寶物を返却すると、老君は瓢箪の口をあけて二童子を引出し、つれ立つて天上に歸つて行きました。

烏鷄國王救助

(一) 夢中の哀訴

一行蓮華洞を後にして進むこと數日、ある日の夕方、勅賜寶林寺といふ大寺院に至つて窟を求め

た。この寺の住持は官僚身紛々たる奴で、朝廷のお役人なら兎に角、雲水の坊主などは泊められないと、頑固に斷らうとしたが、悟空は如意棒で石の獅子を粉微塵にくだいておどし付けたので、住持その他急にヘイコラし始めました。

三藏は心中面白くなかつたが、兎に角一晚禪堂を借り受けることにし、三人を早くやすませて、自分ひとり燈下に經文をくりひろげ、心靜かに讀誦してゐる。やがて夜も十時過ぎ、三藏机によりかゝつてうと／＼ねむりかけた時、どこからともなく腥い風が吹いて來て、行燈の火が薄暗くなつたと思ふや、どろ／＼の太鼓の音とともに、現れ出でたる一人の幽的。

「和尚様、々々。」

といとも悲しげな聲でびびかけます。三藏ふと頭をあげて見ると、全身水にぬれた男が、眼に涙をたゝへ悄然としてたゞずんでゐる。

「妖怪、何でわしの禪門に參つた。早々立去れ！」

「いや私はたゞの妖怪變化ではありません。どうぞ私の姿をよく御覽になつて下さい。」

三藏は氣を落着けてよく見ると、世の常ならぬ衣冠束帯の様子、まがふ方なき一國の王の姿です。

「これはどこぞの天子と見受けますが、何ゆゑあつてこゝへ參られましたな。」
問はれて幽靈は、はら／＼と涙を流し、身の上の物語りを初める。差詰め胡弓の沈んだ合の手でも

はひらうといふところ。

「私はこゝから四十里をへだたる烏鷄國の國王です。思ひ廻せば五年前、國內に大旱魃があつた折、私は天地に祈つて雨乞ひをしました。が、何のきゝ目もありません。その時鐘南山から一人の仙人が参り、術を以つて雨を降らせ、民の憂ひを除いてくれましたので、その後兄弟の約を結び、二年間宮中に同居してゐました。ある日二人で、花園を散歩し、八角の井戸の邊に参りました時、突然私を井戸の中に押落し、石でふたをした上に芭蕉を植ゑ、自分は私の姿になり、國を奪つて今なほ國王とあがめられてゐるので御座います——」

三藏は幽靈の物語りを聞いて、同情の念うたゝ禁ずる能はざるものがあります。

「そんならなぜかく〜と、ことの次第を閻魔大王へ訴訟されないのですか？」

「ところが、その悪仙人には莫大な通力があつて、閻魔とも親友の間柄ですから、私の訴へを取上げてくださいません。やむなく三年間泣き寝入になつてゐましたが、今晩夜遊神が風に乗せて私をこゝへ送つて來ながら申しますには、三年の厄難も漸く満期になつたから唐の三藏法師によく願つて見よ、そしてお弟子の孫悟空に魔物を退治してもらへとのことでした。どうぞ烏鷄國にいらして悪仙人を取押へ、理非曲直をつけて下さいませ。」

「さうですか、それはほんたうにお氣の毒な——しかし悟空を差し向けましても、御家來たちがその仙人を實の國王と信じてゐては、迂濶に退治するわけにも行くまいと思ひますが……」

「その御懸念御もつともですが、私の息子が明朝この邊へ獵に來る筈になつてをります。その節きつと和尚様にお目にかゝるでせうから、たゞ今の話をお傳へなすつて下さい。それでも信用しませんでしたら、この玉を證據に見せてやつて下さいませ。」

手に持つてゐた白玉を渡す。三藏は快くたのみを引受けると、幽靈は大喜びです。

「では何分にもおたのみ申します。私はこれから王宮に行つて、後の夢枕に立ち、母子心を合せて悪魔をほろぼすやうにいたさせませう。」

とねんごろに別れを告げて立去る。三藏椽先まで送つて出て、何かにつまづいたと思ふ拍子に眼がさめて見れば、總てこれ一場の夢。たゞし夢中に渡された白玉は、確に手の中に残つてゐます。

「うゝむ、さては夢にてありしよな。」

三藏ちよつと思ひ入れあつて、急に弟子たちを呼び起し逐一夢の様子を話すと、事件好きの悟空は腕をさすりながら乗出しました。

「さういふ證據のある以上は、疑ひありません。よござんす、明朝その仙人を取つかまへて、ひどい目に逢はしてやりませう。」

それから一本の毛を抜いて、金梨地塗の小箱に變らせ、白玉をその中に入れて置いて、太子が來

たらば、かくくするやうにと、細かに打ち合せをするうち、はや東雲の明けの鐘、夜は白々と明けはなれて来た。



悟空は勛斗雲に飛び乗り、烏鷄國に行つて見ると、果して妖雲に圍まれた宮城があります。程なく東門から太子と覺しき青年が、獵裝束の一隊を引つれて出て来たので、悟空は雲から下りて白兎と變じ、これ射よがしと跳び廻る。太子をはじめ八方から矢を放つたが、ひらりくと巧みにこれをはづしつゝ、とうとう寶林寺の方へおびき寄せて来ました。

やがて門前に来るや、悟空は素早く中に駆込み、今度は二寸ばかりの小坊主になつて、三藏の持つてゐる小箱の中に隠れてしまつた。兎を見失つた太子は、きよろしく眼で寺内にはひつて見ると、禪堂の正面に見知らぬ和尚が、すまし込んで坐つてゐます。

「これく、一國の太子が来たのも憚らず、挨拶もせぬ無禮者め——一體貴様はどここの坊主だッ。」

「わしは唐から天竺へ寶を持つて行く者ぢや。お前こそこゝへ參つて寶を拜め！」

三藏は前晚の計畫通りに、わざと怒らせるやうな物のいひやうをすると、若い太子は案の定、眞つ赤になつて激昂する。

「何だ、乞食坊主見たいな風をしてゐる癖に、寶といつたつてろくな物ぢやあるまい。」

「いやく、さにあらず、この箱の中の立帝貨といふ和尚は、よく人間の過去未來を知つてゐる。諺と思はゞ問うて見なさい。」

とて蓋を開けると、悟空は中から飛び出して、南京鼠のやうに、ちよろしくその邊を走りまはります。

「はゝゝゝゝ、こんな豆のやうな者に何がわかるもんか。」

太子が嘲笑するのを聞いた悟空、「ではこれぢやどうだ」とばかり、忽ち一丈餘りの大人道となつて、太子の前にすつくと立はだかりました。

一寸法師が見るく中に、出羽ヶ岳糞食らへといふやうなジャイアントに變つたんだから、太子も心中はこれをたゞ者ぢやないと感嘆しました。

「立帝貨和尚とやら、お前が、ほんたうに過去や未來がわかるなら、この國にあつたことをいつて見い。」

「そんなことはお茶の子だ——第一貴君は烏鷄國の太子でせう、それから五年前に大旱魃があつたでせう、その時鐘南山から仙人が来て雨を降らせてくれたので、貴君のお父さんが喜んで兄弟の約束を結び同居させて置いたでせう。どうです、ついでにお手の筋ぢやありませんかね。」

「如何にもその通りだ、それから二年たつてその仙人は姿を隠してしまつたが……」

「それで今國王になつてゐる人を、貴君は誰だと思つてゐなさる？」

「何でそんなことを聞くのだ、國王は勿論父上にきまつてゐるではないか。」

悟空これを聞くとげら／＼笑ひ出したから、太子は大に憤慨した。

「失禮な奴だ、物もいはずに笑ふといふことがあるか。」

「をかしいから笑つたのですよ——兎に角私が貴君の身の上の一大事を教へて上げるから、家來たちを遠ざけて下さい。」

太子は何かこの和尚の言葉に據りどころがあると思つたから、臣下の者を門外に出したので、悟空はいまの國王が仙人の變身であることを詳しく譯を話しましたが、容易にこれを信じようとはしませんでした。そこで悟空は國王が残して行つた白玉を取り出した。

「この玉に覚えがあるでせう。これは昨晚國王が和尚様の夢枕に立つて置いて行かれたんです。貴君を宮中に入れないやうにしてゐるのも、あの仙人が悪事露顯を恐れてゐるからで、若しこれでも疑はしいと思ふなら、母御に遇つて三年前と今と、夫婦の情愛が同じかどうかを聞いて御覽なさい。」

太子は證據の品まで見せられたのもう疑ふ餘地がない。何しろ今までほんたうの親父だとばかり思つてゐたのが、贋物だつていふんだから、これは誰だつて驚くでせう。顔色をかへて宮中に立歸らうとするのを悟空が引止めて、大に深謀遠慮ふりを發揮する。

「さう慌てなさるな。大勢で歸つちや感付かれるから、貴君ひとりで行つてそつと裏門から入り、母御に逢つてもなるだけ小聲で話すやうになさい。若しさとられると命もあふないですよ。」

太子は一々いふことを聞き、山門を出て、家來たちには、そこで待つてゐるやうに命じ、一鞭あてて、單身宮中に向ひました。



三年間わが兒には引分けられ、たのむ夫の愛情は昔のやうでない上に、前夜はいやな夢さへ見たので、母后はその居室に鬱々として沈んでゐます。そこへひよつこり太子がやつて來たので、一目見るや、もううれし涙。

「お、太子か、遇ひたかつた／＼、遇ひたかつたわいのう。この三年といふものは、お前のことばかり案じてゐました——そして今日はどうして參つたのぢや。」

「母上、おなつかしうございました。今日ひそかに參つたのは、ひとつ伺ひたいことがあつてです。あの父上様の御様子に、三年前と何か變つたことがございませんでせうか？」

問はれて母后は、面を伏せながら愁然として物語る。

「お前が若し聞いてくれなければ、疑ひを抱いたまゝ誰にも話さず、あの世に行つてしまふところだつた——三年前までは國王の御身體が温かであつたものだが、その後はどうしたわけかまるで氷のやうに冷たくなられました。私がつびつゝこのことを伺つて見ても、たゞ年をとつて衰へたのぢやと仰しやるばかりなので、全く不審に思つてゐます。」

太子は心にうなづきながら、持つて來た白玉を母に示し、三藏が見た夢のことを話しますと、贖物を夫と思つてつかへてゐた母の驚きはまた一層。ぼた／＼と涙を流して歎かれます。

「私も昨晚同じやうな夢を見ました。その時王が唐から來た和尚様に化物を退治するやうたのんだと仰せられたが、今お前の話を聞いてすつかりわけがわかりました。どうかその和尚様に願つて、父上のかたきを取るやうにしておくれ。」

妖怪の證據は益々確實、太子はいそいで寶林寺に歸り助力をたのむ。いよ／＼これから偽親父退治の段。

(二) 死骸を盗みに

贖國王の退治を引受けた悟空は、急に事を起すことをせず、萬全の策をとつて一旦太子を宮中に歸

してから、徐に三藏に語つた。

「私は明朝出かけて行つて、化物をやつ付けようと思ふんですが、ちよつと困ることがあります。城内の家來たちは贖物とは知らずに三年間つかへてゐるんですから、私がそれをつかまへたところが、贖物といふ證據がなければ誰も承知しないでせう。ですから私は八戒と一緒に、國王の死骸を捜し出し、これを證據にして化物をとつちめようと思ふんですが、如何でせうか。」

悟空はあれでなか／＼考へが細かいんだからえらい。三藏も一議に及ばず賛成したので、先刻から居眠りをしてゐる八戒をゆり起しました。

「おい起きろよ、これから烏鷄國へ贖物を取りに行くんだ。お前にも半分やるから一緒に來い。」

「なに、俺にも半分よこす？　ぢや行つてやらう。」

悟空に出鱈目でだまされるとも知らず、慾深の八戒はいそ／＼支度を整へ、雲に跨がりつれ立つて城中へ忍び込む。折しも遠寺の鐘は夜半の十二時を報じてゐます。

二人は抜き足差し足で花園にはひつて見ると、前夜幽霊が告げた通り、果して一本の芭蕉の木がありました。

「寶物はこの木の下にあるんだから、掘くり返してくれ。」

普通では働く奴ぢやないんだが、慾と二人づれの八戒は、アラスカの金鑛脈でも掘り當てるやう

なつもりで、熊手と鼻を使ひ、一生懸命になつて木を倒し土を掘る。そのうち四五尺ばかりで石の板に當つたので、これを取りのけて見ると、正しく幽霊の言の通りに井戸があります。

「困つたな、繩がなくなちや下りることは出来ないよ。」

「俺は丈夫な繩を持つてゐるから、著物をぬいで下りて行つてくれ。」

悟空が如意棒を繩に變じて垂らしたのに、素ッ裸の八戒ぶら下つて、恐るゝ下りて行く。まるで下手な井戸換へみたい。

「兄貴、水ばかりで何も寶らしい物がないぜ。」

「寶物は井戸の底にあるんだ、早くもぐつて行つて取つて来い。」

八戒は本氣にして、水の心得あるのを幸ひ、もぐつて行くと、井龍王の住む水晶宮といふ立派な御殿に出た。水晶宮では突然珍妙な顔の男が闖入したので大した人だから、八戒も譯も分らずたゞきよろゝ。

こゝの井龍王は前夜夜遊神が烏鷄國王の魂を、三藏のもとに送り、救ひを求めたことを知つてゐるから、屹度それに關係した用で来たのだらうと悟り、宮中に呼び入れて來意をたづねた。

「あなたは三藏法師のお使ひでせう、何の御用でおいでになつたのです？」

「實は寶物を捜しにやつて来たんですがね……」

「寶物？ こゝにはそんな物はありませんが、多分あの王様のことかも知れない。あれなら遠慮なく持つていらつしやい。」

龍王の案内で一室に行つて見ると、帝王の服装をした死人が横たはつてゐます。

「これでせう、あなたの捜す寶物といふのは——」

「ちよ、冗談ぢやない、何で死人が寶物なもんか。」

「イヤ、これは烏鷄國王の死骸で、三年前落込んで来たんですが、私が定額珠といふ藥を注射して置いたため、顔が元通りになつてゐるんです。あなたが背負つて歸つて、誰かにたのんで生き返させれば、どんな寶物でももらはれますよ。」

「誰が死骸のおんぶなんか——人を馬鹿にしてやがる……」

八戒捨臺詞で急に水際に浮び上がり、待つてゐる悟空に呼びかけた。

「おい、兄貴繩を下してくれ。」

「寶物を取つて来たかい？」

「寶物なんかありやしないよ、死骸を持つて行けとかいつてたけども、斷つて歸つて来た。」

「それが寶物なんだ、なぜ背負つて来なかつたんだ？」

「俺は死骸のおんぶは大嫌ひだ、お前が代りに行つて来い！」

「さうか、ぢや俺は失敬するから、お前はゆつくり井戸の中に滞在しておいで。」
悟空はかういつて、わざと歸る風をしました。



八戒といへども、井戸の中に置いてきぼりを食つちやたまらないから、周章狼狽して聲をかける。
「兄貴々々、まあ待つてくれよう。何もそんなにおこらなかつて、いゝぢやないか。今すぐ行つて持つて来るよ。」

再び井戸の底へもぐつて行つて素ッ裸の上につめたい死骸をおんぶし、しかめッ面をしながら浮び上つて來ました。

悟空今度は繩を下ろしてやつて、手操り上げて見ると、國王の顔形は、さながら生きてゐると同様です。

「はゝあ、これは井龍王が定顔珠を注射して置いてくれたんだな。これや一層都合がいゝぞ——」
公、御苦勞でもまた背負つて寶林寺まで歸つてくれ。」

八戒は不平満々だが、いやだといふと、またどんなことをされるか分らない。澁々氣味の悪い死體を背負つて歸り、禪堂の前に來てどたりと放りおろした。

「和尚様たゞ今。悟空に寶を取りに行くなんてだまされて、こんないやな物を背負はされました。ほんとに兄貴といふ男はひどい奴です。」

三藏、堂を出て死骸を見ると、前夜夢に現れた姿と全く同じで、しかも今にも物をいひさうな顔なのに、心から氣の毒に思ふてはらくと涙をこぼす。八戒はこの死骸のためにひどい目に逢つたと思ふから、むしろいまゝしくてなりません。

「何がそんなに悲しいんですか。これが和尚様のお父さんといふわけでもなし、あかの他人ぢやありませんか。」

「馬鹿なことを申せ、出家といふ者はすべて情の心が大事ぢや。お前は どうしてさう同情心がないのだらうの。」

叱られた八戒は、師匠の慈悲心を利用して、悟空にだまされた恨みを返してやらうと考へついた。

「私だつて情はありますよ。先刻、井龍王が誰かに頼んで、この死骸を生返らせなさいといつてましたから、今それを考へてゐるんです。和尚様がそれほど氣の毒かられるなら、悟空にいひ付けて生返らせたらいいぢやありませんか。」

いはゆる反間の策といふやつ。三藏はげに尤もと思ひ、
「悟空、お前一つこの王様に起死回生の法をかけて見ておくれ。」

「和尚様はまたこの阿呆のいふことを信用なさるんですか。死んでから三年も経つたものを、私かどうして生返させられませう。」

三藏はそれもさうだと考へて、思ひ止まらうとしたが、八戒はまた横から出てしきりに煽る。

「なあに悟空に出来ないことがあるもんですか。面倒臭がつてあんなことをいふんですよ——なんなら例のお呪ひを唱へておやんなさい。」

八戒の辯に動かされて、三藏は再び思ひ直し、飽くまでも難きを強ひます。

「悟空、どうしても國王を蘇生させ得ないといふのか。よし、そんなら緊縮呪で責めてやるぞ——」
世界中で何よりも禁物な呪文を唱へようとする。これに逢つちや到底かないつこがないから、悟空は困じ切つて低頭平身。

「そ、それだけは勘辨して下さい——宜しう御座います。私には別に手段がありませんけれども、太上老君のところへ參つて反魂丹をもらつて来たなら、或は生返さすことが出来るでせう。暫くお待ちなすつて下さい。」

筋斗雲に飛び乗つて天上界の下谷黒門町に、黒焼屋の總本家をたづねる。折柄老君は薬局で藥の調合をしてゐましたが、悟空が例に似ず悄氣返つて来たのを見て、

「おや、確しに今頃来なすつたね。三藏さんとどうして別れておいでかい？」

「いや、烏鷄國王を蘇生させる一件が起りましてね——すみませんが、どうぞ反魂丹を下さいな、それが無いと私はひどい目に逢はなけりやなりませんから……」

元來ケチン坊の老君は、ロハで藥をやりたくはないのだが、うつかり斷ると例の神通力で澤山盗まれるかも知れないから、澁々たつた一粒だけ分けてくれる。

悟空は喜んですぐ寶林寺に歸り、三藏に藥を見せた上、國王の口に含ませて水で腹中へ流し込みました。

(三) 三藏が二人に

口から反魂丹を流し込んで、やゝ暫くする中、國王の胃腸が活動をはじめたらしく、ゴロ／＼と鳴り出して来た。その時、悟空はくちびるへ口をあて、フーツと息を吹入れるとこれが肺臓に入り、心臓の活動とともに血液の循環が開始され、やがてむつくと起上るや三藏の前にひざまづいて、

「和尚様、私は前夜夢でお目にかゝつた烏鷄國王です。おかげ様でまた娑婆へ戻る事が出来ました、有難う御座います。」

と三拜九拜して禮をいふ。三藏は手をとつて上座にする、夢から以後の一ふしぢうを語り聞かせる

と、國王は一同の親切にたゞ嬉し涙にくれてゐます。

折柄寺の納所坊主たちが朝飯を持つて来たが、今まで見たことのない氣高い人が、しかもずぶぬれになつて上座に坐つてゐるので、みな眼を圓くして怪訝な顔。

「こゝにゐらせられるのは烏鷄國の王様、即ちこの寺の大旦那様だ。三年前、化物に殺されたのを、昨夕俺がお救ひ申したのだ。」

と悟空が説明する後から、八戒すかさず、
「だから澤山御馳走をこしらへて来て差上げろツ。」

此奴食ひ物のことになるとなかく、抜け目がない。納所どもは吃驚して奥へ斯くと告げたので、念入りの精進料理を山と作り、住職が自身で出て来て、へこへこ追従する。三年間何も食はなかつた國王も相當平らげたが、特にお相伴の八戒は大當りです。

それから悟空の計り事で、國王に寺から借りた麻の衣を着せ、普通の旅僧の身支度とし、衣冠束帯は後日の褒美の證據に寺へ預け、五人揃つて出立する。ほどなく烏鷄國の宮城に著いた一行は、旅行免狀の査照を求める風をして、賈物の國王に拜謁を願ひ出ました。

五人は取次の役人につれられて賈國王の前に出たが、みな突つ立つたまゝで敬禮をしようともしない。しかし王位を詐取するくらゐのずるい奴だから、溫柔を裝うて別に怒つた顔も見せず、旅行免狀と見比べながら一行に聞く。

「和尚たちは何處からおいでになつた？」
受け答への役を、承るは孫悟空、差し詰め安宅の關の辨慶といふところ。

「私ども五人は唐國の王の命により、天竺に釋迦如來をたづね、お經を授かりに參るもの、今日この國に通るかゝり、旅行免狀をお目にかけに參つたのでござる。」

「左様か——四人には別に委細はない。が、その麻の衣を着た和尚がどうも疑はしい。これ家來ども、その和尚を引出して住所姓名身分職業その他こまかに調べ上げい。」

「いや、陛下暫く。この老人は生來の啞で調べたところが答へが出来ません。私がよく素性を知つてゐますから、代つて供述書を書きませう。」

と筆を執つてすらく次のやうな文句を書いた。

供述書

この老僧聾にして啞なり、もとこの地のものなりしが、五年前早魃に會し、天に雨なく民死するもの多し、時に鐘南より神仙現れ、風を呼び雨をよんで神通を顯はす、然して後暗かに彼れを害して花園の深井に推下し、自ら龍位を侵せり、後三歳、幸ひに吾來り、

死を起し生に回し、法界に轉ぜしむ、今王城に至るは、眞偽を別ち王を扶け怪を滅して、
國家を安んぜんがためなり

賈國王これを見るや、さては見現されたかと、雲を呼んですたこら逃げ出す。八戒と悟淨が追っ
かけようとすると、悟淨制して、

「何も騒ぐことはない。お前たちは皇后と太子を呼んで王様にお會はせしろ、俺は化物を取つかまへ
て来るから……」

と、ひらり筋斗雲に跨がり、見る間に追ひついて空中戦を開始する。化物も暫くは戦つてゐたが、
悟淨の手練に危ふくなるや、急に身を翻してもとの宮中に飛び下り、忽ち三藏と同じ形ちに變つて
しまつた。

悟淨は後追つかけて来たものゝ、三藏が二人出来てどつちが本物か見分けが付かない。うっかり殴
るわけにも行かず、如何はせんと如意棒を上げたり下げたり、まご／＼してゐます。



つてゐるのを、八戒がそばで見ても面白さうにゲラ／＼笑ふので、悟淨大憤慨。

「この阿呆、俺が困つてゐるのに何がかしいのだ。」

「あは／＼、兄貴はいつも俺を阿呆々々といふが、お前の方が餘つ程阿呆だぜ——何もそんなにま
ごまごせすと、ちつと頭の痛くなるのを我慢して、あの咒文をやつてもらへば、どつちが本物のお師
匠様だかわかるぢやないか。それ式のことには気が付かないとは、兄貴も随分間抜けだなあ。」

如何にもその通り、悟淨もこれには一本參つた。そこで二人に緊箍咒を唱へるやうに頼むと、本物
のはビリ／＼感じたが、賈物の痛くも何ともない。八戒大得意で、

「そら俺のいふ通りだらう——此奴が化物に違ひない！」

矢庭に熊手で打つてかゝれば、見現された化物は本相に返つて空中に飛び上る。悟淨と悟淨も跡
追ひかけて行つて挟み打ちにし、三人が／＼で打ち取らうとした時、東北の方から五色の雲がたなび
いて来て、その中から、

「悟淨よ、しばらく待て——」

といふいと妙なる御聲が聞えた。見れば雲の中に文殊菩薩が立つてをられるので、悟淨は如意棒
を收め、菩薩の前に行つてうや／＼しく敬禮する。

「これは文殊菩薩様、何の御用でいらしたのですか。」

「その化物をもらひに來たのぢや、どうかわしに渡してくりやれ。」

「差上げてもいいんですが、一體彼奴は何者なんです？」

「わしの乗つてゐた青毛の獅子ぢや——最初この國の王が佛の道に執心してゐると聞き、釋迦如來の命を受け、わしが旅僧の姿となつて問答に來たことがある。その時王は問答に負けた腹癒せに、わしを縛つて三日三晩を御水河に水漬にしたので、如來はこの化物を遣はし、三年の間王を井に沈めて、わしが三日三晩の水災に報復されたのぢや。」

「さうですか。しかし如來の仰せでああなたの復讐をしたゞけなら文句はないが、三年間皇后をだまして亭主になつてゐたのは、倫理道德にはづれた亂暴な話ぢやがアせんか。」

「いやそれは心配致すな。彼奴は決して婦人の貞操を破るやうなことをしてゐない筈だ。何なら皇后に聞いて見るがよい。」

八戒横合ひから喙を容れて、

「なーんだ、名ばかりの亭主か、意氣地のない野郎だな、はゝゝゝ。」

とあざ笑ふのを、悟空聞き兼ねて叱り付ける。

「この阿呆、たわけをいふな——では菩薩様、早く化物をお連れになつて下さい。」

「畜生、正體に歸れッ！」

と一喝を浴びせると、忽ち青毛の獅子になつたので、菩薩はその背に乗り、雲の中を西方に立去られる。よく佛像でキリン・ビールの商標みたいな獸に乗つかつてゐるのがこの文殊菩薩です。

さて、悟空等三人は意氣揚々、雲を下りて朝廷に歸ると、國王はじめ一同は、命の親とあがめて、心から禮をいひます。國王は、文殊菩薩を苦しめたために、佛の戒めを受けた因果を悟り、三藏に向つて、

「私は今生返つたとて、最早面目なくて王の位にはつけません。どうかあなたが代りになつて、この國を治めて下さい。」

とたのんだがもとより拒絶、では悟空さんにとお鉢を廻したけれども同じく謝絶。政權の奪ひ合ひを仕事にしてゐる、わが國の政黨などとは大分趣を異にしてゐます。

國王は餘儀なく王位に復して、再即位の式を擧げ、國內に大赦や善行の表彰を行ひ、一方三藏師弟を正賓として宮中に大饗宴を開かれる。何しろ三年目に親子夫婦再會の喜び、それもこれも一行のおかげだといふので『烏雞國萬歲』『唐僧御一行萬歲』と、とても大したもて方。さすが大食ひの八戒でさへも、御馳走攻めでふう／＼苦しがるほどです。

翌日三藏師弟が立ししようとすると、國王はじめ皆名ごりを惜んで、澤山の金銀財寶を餞別に贈り

ましたが、清廉な三藏は例の通り固辭して受けません。仕方がないから君臣一同で百餘里の先まで見送り、重々の恩義を謝して袂を別ちました。

紅孩兒と水魔

(一) 小兒の詭計

それから旅路をかさぬること半月餘り、時は冬の初めとなつた。一行はある日けはしい山路に差しかゝつたが、かなたの林の中で「助けて下さい」と救ひを求めぬ悲鳴が聞えます。何事ならんと駆け付けて見れば、七八歳ぐらゐの男の兒が、素ッ裸のまま樹の上に縛り上げられてゐる。

「おゝおゝ可哀さうに、お前はどうしてこんな目に會つたのだ？」

と三藏が言葉かけると、子供は涙をポロ／＼流しながら答へるやう、

「はい、僕の家はこの山の麓で、お父さんは紅十萬といふ金貨なんです。お父さんに金を借りた連中が三日前強盜に来て、お父さんを殺しお母さんをどつかへ連れて行つた上、僕を縛つてこゝへつるして行つたんです。どうか僕を助けて下さい、御恩は一生忘れませんから……」

七つか八つの子供としては、わかり過ぎた話振り。悟空は怪しいと睨んで、

「この餓鬼め、出鱈目をいふと肯かないぞ。父さんも母さんもゐないのにお前ばかり眺かつて、一體何處へ行くつもりだい。」

「おぢさん謹なんかいやしませんよ。近所に親類がありますから僕はそこへ行くんですよ。」

三藏は先刻から可哀さうでたまらなく思つてゐたから、悟空を叱りつけ、八戒に命じて繩を解いて助けトさせる。

「おゝどんなに痛かつたらう。お前はわれ／＼と一緒に歩いて行けるかい。」

「いゝえ、身體中が痛くて、とても歩くことは出来ません。」

「さうだらう／＼——悟空、この子をおんぶして行つてくれ。」

仕方がないから悟空は背負つて歩き出したが、此奴どうしても化物に違ひないと思つたから、隙を見て投げ殺してやらうと、三藏に見付からぬやう、とつとと駆け出す。化物の方も悟空の意中を見抜き、本身は空中に舞上つて、背中の子供を石地藏に變へたから、悟空怒つて石の角を目がけ、力任せに投げ付けました。

しかし假身の石地藏、ごろりころがつたばかり。本身は空中にゐて急につむじ風を起し、土砂を吹きあげ、八戒と悟浄が顔を隠して風をよけてゐる暇に、得たりと三藏をさらつて逃げて行つた。悟空が氣遣つて来て見た時は、もう何處へ行つたか影も形も見えませぬ。

「おい八戒、悟浄、和尚様はどうなさつた？」

「さあ大變、俺達が風で眼をふさいでゐるうちに、あの旋風で天へ巻き上げられたのかな。」

「馬鹿をいへ。さてはあの餓鬼めが風を起し、お前等が氣を取られてゐる間に、和尚様を搦つばらつ

て行つたんだ。こりやかうしてはをられんぞ。」

三人で彼方此方と山中を尋ね廻つたが、皆目行方が分らない。仕方がないから悟空は咒文を唱へて

土地の神々を招集し、犯人搜索の端緒を得べく、署長會議といつたやうなものを開く。

「實は斯くくの次第だが、この邊に心當りの化物が住んでをらんかね。」

「それならこの山の谷間にある火雲洞の主人でせう。何分神通力があるので、奴にはわれくも手古

摺つてをります。」

「さうか、一體その化物はどこから来て何といふ奴だ？」

「あれは牛魔王の悴で紅孩兒と申し、今は羅刹女の養子になつてゐます。火焰山で三百年間修行し

たとか、三昧火といふ恐ろしい法を知つてますから、全く手におへません。」

「何ぢや、牛魔王の悴か。俺は五百年前牛魔王と兄弟分の約束をしたことがあるから、いはゞ俺の

甥だ。それなら大丈夫、すぐこれから取り返しに行かう——諸君は引き取つても宜しい、御苦勞ぢや

警察部長氣取りで神々を歸してから、三人で火雲洞へと急ぎました。



三人道を急いで百里ばかり来た頃、谷川の向う側に「號山枯松洞火雲洞」といふ石の標柱を立て

てある、大きな洞窟を見つけた。悟空は悟浄を馬と荷物の番として谷川の岸に残し、八戒と二人で

洞の前に行つて見ると、門内では大勢の手下がヤアトウく撃劔の稽古をしてゐます。

「おい、誰か主人に取次いでくれんか、俺たちは唐國の和尚様を受取りに来たんだから、早く返

してくれつて——」

極めて横柄な物いひぶり。家來は癩にさはつたが、兎に角奥に入つてこの趣を傳達する。

「大將、たゞ今表に猿と豚に似た二人の和尚が來まして、唐の和尚を返せとか何とか威張りくさつて

をります。」

「うゝ、とうく見付けてやつて來たか。今奴等を酷い目に會はせてやるから、戦ひの用意を致せ。」

魔王は家來に五輛の手車を押出させ、自分は長槍をひつさげて門前に躍出した。見れば腰に錦の

スカートを纏うたばかり、上半身は裸體で、隆々たる筋肉は太刀山の全盛當時をしのばせるやう。し

かも顔の色あくまで白く、丹花の脣、新月の眉、女にしても見まほしき秀麗な御曹子です。悟空は

にこゝく愛想笑ひをして、

「お、甥御か、親戚のよしみに、早く和尚様を返しておくれ。」

「なに親戚だ？ 馬鹿なことをいふな。俺は山猿を親類に持った覚えはないぞ。」

「いや、それはお前が譯を知らんからだ。俺は五百年前天界を騒がせた齊天大聖孫悟空だが、當時天下の豪傑と交ほり結び、お前のお父さんの牛魔王とも兄弟分の杯を取りかほした。お前の生れん先のことだから知るまいが、俺は確にお前の叔父さんだよ。」

魔王は悟空のいふことを信用せず、いきなり槍をふるつて突きかゝつたので、さらばと悟空も如意棒で渡り合ひ交戦二十餘合。八戒は敵がやゝ弱つた頃合ひを見計つて、横合ひから熊手で打ちかゝる。この時、魔王槍を引いて門内に退き、悟空と八戒が追ひかけて来るのを見るや、中央の車の上立つて咒文を唱へると、口からは火、鼻からは煙を吹き出し、それが五輛の車に燃え移つて炎々たる煙が二人に襲ひかゝつて來ます。大晦日の火の車も苦しいが、これはまた更に苦しい。

かういふ時は八戒なかゝすばしつこい。

「兄貴、これはとてもたまらん。逃げよう〜。」

とお先にどんく失敬する。悟空一人残つて、火除けの印を結び、猛火の間に躍り込んで魔王を捜しましたけれども、益々盛んに火を吹き出すので、どこがどこやらさつぱり分らん。さしもの悟空もたまらず火の中から逃げ出すと、魔王も火道具をまとめて、洞の中に引上げました。

(二) 悟空大火傷

悟空は枯松澗の岸に歸つて見ると、八戒が悟淨に向つて、自分がひとりで戦つてよも來たやうに戦話をしています。

「おい八戒、貴様は俺は見捨てゝ逃げて來た癖に、何を偉さうにいつてゐるんだ。若し反對にお前を捨てゝ來たらどうなると思ふ。」

「兄貴さうムキになるなよ、古人も時務を識る者を俊傑といふといつてゐるぢやないか。あんな火の中にゐていつまでも戦つてゐるのは、死を求めると同然、馬鹿々々しい話だよ。」

「小ざかしいことをいふな——しかしあの火の車には全く弱らされた、彼奴の槍なんかちつともこわくはないんだけども……」

さすがに悟空も參つた様子。悟淨はそばから心配顔に、

「彼奴が火術を使ふので勝てないといふんなら、相生相尅の理で、火を消す法を考へればいゝぢやありませんか。」

「うん、さうだ、お前のいふ通りだ——ぢや俺は一走り東海龍王のところへ行つて雨を借りて来るから、ちよつと待つてくれ。」

と勦斗雲に乗つて、東海へ雨借りにと出かけた。

東海龍王には先年、金箍如意棒をもらつて以來、度々世話になつてゐる。今度は雨を貸してくれと難しいことを頼み込んで來たので、龍王はまた厄介者が來たとは思つたが、いふことをきいてやらないと、どんな亂暴をするかも知らないから、弟の三海龍王を貸してよこすことにしました。そこで悟空は三海龍王を引きつれて、枯松澗に歸り、作戰計畫の打ち合せをした上、八戒、悟淨と共に洞門に押しかけて行つて怒鳴り立てる。

「オーイ、早く和尚様を返せ、ぐづぐづしてゐると今度こそ命を取つてやるぞ。」

「は、あ坊主ども懲りずにまたやつて來たな。あの和尚は俺の酒の肴だ、もう助けることはあきらめて、歸つた方がおためだらうぜ。」

紅孩兒が口ぎたなく嘲弄するので、悟空かつとなつて打つてかゝり、丁々發止とやつてゐる中に、魔王は例によつて火の車に上り、火をふきはじめた。悟空もかねて期してゐたことだから、

「ホースに懸れッ！ 注水始め！」

勝勝司結とろしく驚かすをかけると、三海龍王心得て驚くばかりの大雨を降らせたが、元來この

王味火は水に負けないのが特色。のみならず却つて勢ひを加へ、まるで石油でもかけたやうに、一層猛烈になるばかりです。

悟空大に面喰ひ、いらつて火除けの印を結び、火中に飛び込んで敵を搜尋る。これを見た紅孩兒、横合からフツと煙を吹きかけると、悟空の眼に入つて涙ボロ／＼。ひるむところをまた激しく吹きかけられ、クシヤン／＼とむせ返り、これにはたまらず雲に乗つて逃げ出した。



悟空は一旦空中に逃げたが、全身焼けたゞれて、とても痛くてたまらない。水で冷したらなほかと思ひ、醫學を知らぬ悲しさ、急いで舞下り谷川に飛び込んだのが誤り。熱い身體が急に冷たい水に逢つたため、心臟痙攣を起して、うんとそのまま悶絶してしまつた。誰でも火傷した時には、慌て、水になど飛び込んでやいけませんよ。

空中でこの有様を見た三海龍王、

「大變です／＼、悟空さんが土左衛門になりました。」

と大聲で知らせたので、八戒と悟淨が驚いて谷川に駆け付けて見ると、死體になつた悟空、ぶくぶく川下の方に流れて行く。悟淨飛び込んで漸く岸に抱き上げたが、手足はしやちこ張り、全身水

のやうに冷え切つてゐます。

「おゝ兄貴、浅ましい姿になつたなあ。不長老生の術を覚えてゐながら、あの火のためにこんな短命で終るとは、何といふ情ないことをしてくれただんだ……」

友情に厚い悟浄は、聲をあげておい／＼泣き出す。八戒は先刻から悟空の手足や胸をさすつて見てゐたが、何かわかつたやうな顔で、

「悟浄、まあ泣くのは後廻しにしろ。水を飲んだ風もなし、ほんたうに死んだんぢやないやうだから、お前は脚を折り曲げて坐らせてくれ、俺が一つ按摩をして見るから——」

二人が／＼で悟空を起し、膝を曲げてあくらをかゝせ、八戒は両手でさすつたり、たゞいたり一生懸命にマツサージをやる。奴どこで覺えたか案外器用な手付きです。

元來悟空は急激な體熱の變化から、引きつけて呼吸がふさがり、一時、假死の状態におちたのだから、八戒に上手に揉みやはらげられるや、五體の機能が元通り運轉をはじめ、夢中ながら一聲「和尚様！」と叫びました。悟浄喜んで、

「兄貴、氣を確に持つてくれ、俺も八戒もこゝにゐるよ。」

悟空その聲でパツと眼を見開き、

「お前には非常に御苦勞をかけたが、うまく行かなかつた。兎に角けふは歸つてくれ、後日、改めてお禮をするから。」

と龍王を歸し、二人の介抱を受けつゝ、松林の中でうん／＼唸つてゐました。今度といふ今度は悟空も全く參つたやうです。

(三) 八戒の袋詰め

二人の看護で、悟空はだん／＼元氣がついたやうなものゝ火傷がひどいのでなかく／＼元のやうな身體にならない。

「あゝあ、和尚様はさぞ難澁していらつしやるだらうが、この身體ぢやどうすることも出来ない。觀音菩薩のお力を借りれば、あの化物をやつ付けられるだらうけれども、身體が痛んでお迎へに行くことも出来ず、こりやどうしたらよからうな。」

三藏の身の上を案じて愁嘆するのを、悟浄は神經を興奮させぬやうにと、いろ／＼いたはり慰める。八戒不精者といへども奮起せざるわけには行きません。

「ようし、ぢや俺が代りに観音様をお迎へに行つて来よう。」

と支度を整へ南海さして出かけた。

これより先、戦ひに勝つた紅孩兒は一旦洞窟に引上げたが、悟空はあのまゝで引込む奴でないから、きつとどつかから、別な加勢を頼んで来るに違ひない。一つこつちはその裏を搔いてやらうと思ひ、洞を抜け出で空中からひそかに敵情を偵察してゐると、果して八戒が南方さして急ぎ行く様子。

紅孩兒は正しくこれは観音を迎へに行くものと推定して、急いで洞に歸り、

「家來共、今八戒をつれて来て、お前達に丸焼にして御馳走してやるぞ。あの如意の皮袋を用意して待つてをれ！」

といひつけ、近道さして八戒よりも先に廻り、観音の姿に化けて岩の上に端座し、澄し込んで待つてゐました。

八戒は斯くとも知らず、雲に乗つてやつて来ると、前方に観音様がいらしたたので、雲をとどめて丁寧にお辭儀をする。

「これは観音菩薩で御座いますか、恰度いゝところでお目にかゝりました。たゞ今、私がお迎ひに參らうとする途中で御座います。」

「ふむ、お前は三藏の弟子の猪八戒と申す男ぢやつたな。わしを迎ひに来たといふのは、何か三藏の

身の上に變事でも起つたかの？」

勿體ぶつて聞くのを、八戒は當の敵とは知らないから、三藏悟空の遭難、紅孩兒の暴狀を詳しく告げて、菩薩の救助を懇願します。

「左様か、あの火雲洞の主人はわしの友達で、悪いことをするやうな男ではないんだが、きつと何かの行違ひだらう。兎に角一緒に行つて三藏を釋放するやうにさとしてやるから、わしについて參れ。」

八戒は本氣にして、のこゝその後に従ひ、雲を下りて火雲洞に来た時、偽菩薩の紅孩兒は不意に躍りかゝつて八戒を突き倒す。そこへ手下が群がり寄つてしやにむに袋の中に押し込め、梁の木に上り上げてしまつた。袋の鼠でない袋の豚君、中で盛んにじたばたあばれて見たが、どうすることも出来ない。

一方、悟空と悟淨は林の中で八戒の歸りを待つてゐる中、一陣のなまぐさ風が火雲洞の方から吹いて来たと思ふと、悟空は途方もない大きな噴嚏を一つ。

「ハツクシヨン——これは變な風だぞ、ヒヨツとすると八戒が化物に出つくはしたのかも知れん。ちよつと様子見に行つてくるから、こゝに待つてゐてくれ。」

「だつて兄貴は身體が痛いんぢやないか、俺が代りに行つてくるよ。」

「いやお前ぢや駄目だ、大丈夫だから俺に任して置け。」

痛みをこらへつゝ、洞の近所まで来ると、これを見つけた紅孩兒は、手下に命じて一齊に襲ひかゝらせた。悟空はこれ等小者とさへも戦ふ氣力がないので、逃げ出しながら急に身を變じて一つの風呂敷包となり、路端にころがつてゐる。家來たちはこれを手段と知らず、拾ひ上げて主人の前に持つて來ました。

「悟空も大王にやられてからは仙愛がありません。慌てゝこんな包みを捨てゝ逃げて行きました。」
「はゝゝゝ、さうぢやらう、俺の三昧火にかゝつちや、誰だつてかなひつこはないさ——そんなきたない風呂敷包なんか、そこらに打つちやつてしまへ。」

紅孩兒は何氣なく包みを棄てさせる。悟空そこで一本の毛をその包みに變じ、本身は蒼蠅となつてまた洞内に行つて見ると、梁につるされた袋の中で、八戒の泣きじやくる聲が聞えます。



案の定八戒は魔王のとりことなり、しかも可哀相に袋詰めにされて、梁につり上げられてゐることがわかつた。蒼蠅になつてゐる悟空は何とかして助けてやりたいと考へてゐる中、一方紅孩兒は酒盛の支度を初め、部下の六勇士を呼んで、
「これから膳の和尚を蒸し焼にして食ふんだ。お前たちはお父さんのところへ行つて、珍しい御馳走

を差上げますから、いらして下さいとお迎へして來い。」

と命じ、大きな焔爐に火をかんく起して蒸し焼の用意にかゝりました。

これを見た悟空は氣が氣ぢやない。何でも奴がお父さんといったのは、昔知り合ひの牛魔王に違ひないから、一つその姿に化けて紅孩兒を欺き、和尚様を救ふより外に方法はないと思ひつき、六勇士の行手に飛んで行つて、牛魔王と寸分たがはぬ姿になり、すまし込んで待受けてゐます。

そんなこととは知らぬ六人、途中でうまく牛魔王に行き會つたから、大喜びです。

「これは御隠居様、御散歩にでもお出かけでございましたか。たゞ今私どもが主人の命令で恰度お迎ひに參つたところで御座います——」

「なに、忤からの迎ひと申すか、では案内致せ。」

贗親父の悟空、大威張りで火雲洞に行き著くと、紅孩兒は大勢の家來と共に門前に出迎ひ、正座に招き入れて非常なあがめやう。

「よくおいで下さいました。實は昨日唐の三藏和尚を手に入れましたが、彼奴の肉は長命の妙藥なさうですから、是非お父さんに差上げたいと思つて、お招ぎしたのでございます。」

「それは感心によく氣がついてくれた——ぢやが、その和尚といふのは孫悟空といふ者をつれて、天竺へお經を取りに行く人ではないか。」

「如何にも悟空をつれてゐる和尚なのですが……」

「それは危ない。その悟空といふ男はとてつ力廣大で、昔天上界の軍兵十萬餘人で攻めても閉口しなかつた偉い奴ぢや。うっかり三藏を食ふとひどい讐討ちをされるかも知れない、早く三藏を返した方がよからう。」

悟空そろ／＼三藏奪還策と出かけたが、勝誇つてゐる紅孩兒はきかうともしない。

「何ですお父さん、そんな弱いことをいつて——あの悟空は二度とも私に惨敗し、今朝も懲りずにやつて來ましたが、家來どもに追立てられ、慌てゝ風呂敷包を捨て、逃げて行つたやうな弱蟲です。大丈夫ですから、安心して和尚の肉をお上がんなさい。」

「さうかね、それなら食べてもいゝけども、しかし今日はよしにしよう。」

「なぜ今日はいけないんですか。」

「いや、わしも年をとつたので、後生を願ふため、月に四日づゝ生臭物を食はぬ日をきめてあるのぢや。今日は恰度その精進日だから、明日になつたら蒸し焼にして、お前と一緒に賞翫することに致す。」

今度は日延の策に出たが、紅孩兒はこれを聞いて心中頗る不審に思つた。親父はこれまで人食ひを辭賣のやうにしてゐるのに、突然こんなことをいひ出したのはどうも可笑しいと、便所に立つ風をし

て使に行つた六勇士に聞いてみたところが、途中で會つてつれて來たとの話。

「さてこそ偽物に相違ない。お前たちはこつネり隣室に來て、斬りかゝる用意をしてくれ。そしてわしが合圖をしたなら、一度に飛び出してぶつた斬つてしまへ。」

ちやんと手筈をきめた上、知らん顔をしてまた悟空のゐる部屋に歸つた。

「失禮しました——私が今日お父さんをお呼びしたのは、私の生年月日を忘れたので、ついでにそれも伺ひたいのですが、一體いつでしたらうね。」

「さう、わしも年をとつたので忘れてしまつたが、いづれお母さんに聞いた上で、教へてあげよう。」

「ふん、いつも自分は不老長壽だといつてゐる癖に、さう急にぼけてどうする？ 貴様はやつぱり偽

物だらう——それ、家來ども！
と一聲高く合圖をしました。

(四) 觀音に救を乞ふ

紅孩兒の合圖に、隣室に忍んでゐた六勇士は、扉を蹴倒しおめき叫んで斬りかゝつた。しかしこんな奴等にもざ／＼討たれるやうな悟空ぢやありません。口にむにや／＼咒文を唱へると、恰度寫眞の

フラツシユをたいした時のやうな光と變じ、一同が眼をこすつてゐる間に、さつと洞門を飛び出して、悟淨が待つてゐる松林に歸つて來ました。

「いや大失敗々々——悟淨よ、とても俺の力ぢや救ひ出せさうがないから、これから一走り觀音様にお願ひに行つて來るぜ。」

「だつて兄貴は腰が痛みほしくないかい？」

「ナ—ニ大丈夫だ、痛いの痒いのといつてゐる場合ぢやない。」

例によつてかなはぬ時の神頼み。そゝくさ舂斗雲に跨がるや、ス—ツと南海に飛んで行つて、普陀落伽山に無事著陸。觀音菩薩は一通り悟空の訴願を聞いてから仰せられる。

「さうであらう、あれの三昧火は普通の水で消えるやうな火ぢやない。なぜ早くわしのところへ頼みに來なかつたのぢや。」

「實は私があゝの三昧火で大火傷を負はされ、雲に乗ることが出來ませんので、八戒を代りにお願ひに出したんです。ところがあゝの阿呆途中であなたの御姿に化けた化物にだまされ、つかまつてしまつたので、私の參るのが遅れちやつたんです。」

「なに、あの紅孩兒がわしの姿になつて、八戒をだましたと申すか。實に怪しからん奴ぢや。」
怒りの面色すさまじく、いきなりかたはらの壺を取上げてはつしと海中に投げ捨てられる。悟空は

譯が分らず、あつ氣にとられて見てみると、間もなく海の水がぶく／＼わき上つて、波の中から一疋の大きな龜が現れ、背中に壺を載せてはひ上つて來ました。

「悟空、お前あの壺をこゝへ持つて來ておくれ。」

菩薩の言葉に近づいて抱上げようとしたが、とても重くて一寸も動かすことが出來ない。醉拂ひが電信柱に抱付いたやうに、たゞ無暗にいきんでゐるのを、菩薩が遠くから眺めてお笑ひになり。

「はゝゝゝ、その瓶に南海を盛り入れたから動かないのぢや。この水なら三昧火でも何でも消せるのだが、お前には持てまいから、わしが一緒に三藏を助けて遣はさう。」

と右手でちよいとおさげになると、龜は幾度も頭を下げてまた海に歸つて行く。さすがの悟空も、その通力のほどに舌を巻いて驚嘆するばかり。

菩薩は更に弟子の惠岸を天上界にやつて、一束に刀一ダースづゝたばねたのを三十六把借りて來させ、咒文を唱へて蓮臺になさる。これで化物退治の準備が整うたので、菩薩はその蓮臺に坐り、紫の雲を起して、惠岸悟空とともに號山に向はせられた。



やがて一同は火雲洞の上に來て、壺の水をあけると、近邊一帶は車軸を流すやうな大雨。その時、

菩薩は悟空の手のひらに「迷」の字を書き與へ、これを示して敵をおびき出して来るやうに命ぜられたので、悟空はすぐさま洞門に飛んで行き、扉をたゞきながらめちやくちやに悪口をいひます。「紅孩兒の馬鹿、畜生、腰抜け、ひよつとこ、掏摸、泥棒、巾著切り、胡麻の蠅——さあ出て来て勝負をしろ。」

紅孩兒はこれを聞いてかん／＼に怒り、

「猿め、懲りずにまた來あがつたな！」

と槍を揮つて突きかゝつて來る。悟空も如意棒で應戦すると見せ、じり／＼と退却するので、紅孩兒は怪しいと感付いたが、長追ひせずに歸らうとする様子。悟空こゝぞとばかり、

「いゝ子ぢや／＼、こゝまでいらつしやい、甘酒進上！」

左の拳を開き、愚弄しながら手招きすると、その効驗頗る顯著。紅孩兒は忽ち前後を忘れ、夢中になつてどこまでも追ひかけて來る。世間の色魔だのヴァンパイアなんといはれる奴、皆手の平に「迷」の字を書いてゐるのかも知れない。

悟空はたうとう化物を觀音様の前までおびき寄せて來たので、もう俺の役は濟んだと。素早く菩薩の影に身を隠した。紅孩兒血走つた眼で觀音を睨みつけ、

「やあ貴様はあの猿を助けに來たのか——一體貴様はどここの馬の骨だツ？」

と罵つたけれども、菩薩聞えぬ風をして蓮臺に坐り込んだまゝ、うんともすんともいはない。劫を煮やした紅孩兒はいきなり槍で突かうとしたが、するりと抜けて金光と變じ、空中に舞上つて惠岸悟空とともに、どんなことをするかと高見の見物をしてゐられる。

紅孩兒は得意の絶頂です。

「うはゝゝゝ、あの猿め、何度やつて來ても俺にかなはんので、あんな馬鹿佛を頼んで來たんだが、たゞ一突きで影も形もなくなつたぢやないか。その上こんな蓮臺まで置き忘れて行くとは餘ッ程間抜け者だ——どれ／＼、一つこの上に坐つて見てやらう。」

觀音菩薩の眞似をして蓮臺の上に坐り込み、獨りで悦に入つてゐます。菩薩この時、手にした柳の枝を下に向け、何やら咒文を唱へると蓮臺の花びらが忽ち三十六把の刀と變り、ぶつ／＼兩足を突き刺したからたまらない。驚いた紅孩兒は齒を食ひしばつて痛みをこへ、刀をつかんで抜き取らうとするので、菩薩はまた咒文を念ずると、刀は皆釣針のやうに曲つて肉に食ひ込み、何ともがいても抜けはしません。

「あゝ痛い／＼——佛様、赦して下さい。もうこれから悪事を止めてお弟子になりますから、この刀が取れるやうにして下さい！」

悲鳴をあげて嘆願するので、菩薩はしづ／＼空中から舞下り、

「お前はほんたうに佛弟子になる氣か？」

「なります〜、命さへお助け下さればきつとお弟子になります。」

「それならこゝで授戒して遣はさう。これからは善財童子と名乗るがよいぞよ。」

袂の中から剃刀を出して髪をそり落し、頂に三つ角髪を残してから、柳の枝で刀を拂ふと、一度にばらりと抜けて、紅孩兒の身體には傷あと一つなくなりました。

根から改心してゐない紅孩兒は、痛みも傷もなくなつたのを見ると、再び元の根性に戻つた。この悪菩薩め妖術を以て俺を苦しめたに違ひない、畜生！ かたきを取つてやるぞとばかり、槍押つ取つて突きかゝる。悟空怒つて棒で打たうとするのを、菩薩制しながら袂から一つの金輪を取り出し、

「變れッ！」

と叫んで投げつけ、續いてムニヤ〜呪文を唱へると、忽ち五つの金輪と變り、頭と手足にはまつてびり〜縮つけます。

悟空のは頭だけでもたまらないのに、手足までやられたので、さすがの紅孩兒も七轉八倒。やけ糞になつて三昧火を吹きかけやうとしたが、靈雨に消されて、梅雨時のマツチみたいになつとも燃えつかない。菩薩はこれに目もくれず、

「悟空よ、これは釋迦如來からお預かりした三つの金輪の中の一つぢや。緊箍兒はお前に、

守山大神にやつて、金箍兒はまだ残つてゐたが、今この童子に授けたのぢや。」
かういつてから徐に呪文を解いたので、紅孩兒はやつと正氣に返り、はまつてゐる金輪を取外さうとしたけれども、悟空のと同じく、まるで肉に根が生えたやう、いくら悶えても抜けはしません。恨み重なる紅孩兒が困つてゐるのを見て、悟空、溜飲三斗の思ひ、

「どうだい、弱つたか。觀音様がお前をハイカラにしてやらうと、首輪だの腕輪だの下さつたんだ。」
あざ笑つてひやかしますと、氣短な紅孩兒はまたむかつ腹を立て、突きかゝらうとする。菩薩素早く柳の枝を振り、一聲高く今度は、

「合掌！」

と號令をかけるや、恰度メスメリズムにかゝつたやうに、びたり兩手を合せたまゝ、何としても開けません。重ねの不可思議な法力に、強情我慢の紅孩兒も全く閉口してしまひ、菩薩の前にひれ伏して、心から佛弟子になることを誓ひました。

後世に至つても觀音菩薩の傍に侍立し、まじめな顔で合掌してゐるのは、當時の悪少年紅孩兒の後身なのです。

そこで觀音菩薩は、咒文を念じて、注ぎかけた海水を悉く元の壺に返し、新弟子の善財童子を従へて普陀落迦山にお歸りになる。悟空は一旦松林に歸り、悟淨と一緒に主を失つた火雲洞の餘類を

追拂つて、三藏と八戒を救ひ出し、残してあつた御馳走を鱈腹食つた上、一同で西に出立しました。

(五) 乗船の沈没

時すでに冬も半、満目荒涼、寒風飛雲とともに颯ひ來り、旅のつらさはまた一しほです。行くこと十餘日、前面に恐ろしい水の音が聞えたと思れば、幅十里もあると思はれるやうな大河横たはり、藍黑色の河水、滔々として天をもひたさん勢ひ。一行如何はせんと岸に立つて途方にくれてゐると、いづこよりか一艘の小舟に棹さして來た船頭がある。

「和尚様がた、この爺がお渡しなませう。たゞ船が小さくて二人づゝしか乗れませんから、二度に分れて渡つて下さい。」

師弟が協議の末、先づ八戒に三藏を警護させて、一番の便に乗せ、悟空と悟淨はこつちの岸で見守つてゐます。やがて舟は波に弄ばれながら河の中ほどまで漕いで行きましたが、急に生臭い風が吹いて來たと思ふや、舟はもくもく捲き上つた浪に吸ひ込まれて人諸共影も形もなくなつた。さながら新田義隆矢口の渡し御難。岸の兩人はうろく慌て騒いだが、何にもならない。

「兄貴、ちよつとこゝで待つてゐて下さい。俺が行つて様子を見てくるから……」

悟淨は法衣をぬいで、ざんぶと川に飛び込み、水を分けて進んで行くと、「黒水河神府」と銘打つた宮殿の中で、何やら喜びごとがあるらしく、ざわめいてる聲が聞えます。

「爺や御苦勞々々、よくあの和尚をつかまへて來てくれたね——彼奴の肉は若返りの藥になるさうだから、今晚は叔父さんを招待して晚餐會を催すと致さう。お前たちにはあの豚をやるから、古瀨肉なり東坡肉なり勝手に料理して、うんと喰べたがい。」

「お頭様、有難う存じます。お蔭様で私たちも今夜は大分飲めるで御座いませう。」

先達て火雲洞でも二人が捕虜になつて、危なく食はれるところだつたが、またもお揃ひで酒の肴にされやうとは、三藏と八戒、餘程星廻りが悪いらしい。悟淨門外でこの問答を聞き、こは一大事と矢鱈に門をたゝいて怒鳴り立てる。

「こら化物ツ、和尚様を返せツ！早く出さんと貴様たちを皆殺しにするぞ。」

化物はこれを聞くや、鐵の鞭をさげて門外にをどり出し、罵り騒ぐ悟淨を見て鼻の先で打ち笑ひ、「やかましいわい、この命知らずめ。まごゝしてゐると貴様も取ツつかまへて、一緒に食つてしまふぞ。」

と、ひゆう／＼鞭を振つてかゝつて來る。悟淨暫くは寶杖で渡り合つたが、とてもかなひさうも

ないので、これは水上におびき出して悟空にやつ付けてもらふに如かずと、寶杖をかついですたこら逃げ出す。しかし化物もさるもの、うっかりその手には乗らん。

「逃げるなら逃げる、俺はこれから晚餐會の支度にかゝらなくちやならん——」
さつさと門に入つてしまつたので、折角の計略、向うからはづれて、見ん事、越中禪に終つたかたち。

悟淨も仕方がないからすこ〜陸に歸り、悟空にありし顛末を語つてゐるところへ、水中から落ちぶれた風をした老人が這上つて来て、悟空の前にひざまづいた。

「私は以前この川の領主でしたが、昨年五月西海から化物が来て、無理々々黒水神府を奪ひ取られました。老年の私、力づくではかなひませんから、西海龍王のもとへ參つて訴へたけれども、化物と叔父甥の仲なので正當な訴訟を取上げてくれません。齊天大聖様、どうかあなたの御力で正義の裁判を受けるやうにして下さいませ。」

とはら〜涙を流して、司法權確立のために助力を乞ふのです。
辯護士氣取りで老人の訴へを聞いてゐた悟空、義憤を發して、

「そりや西海龍王がよくない。親戚だからつて、裁判に依估最眞をするのは、司法權を弄ぶもんだ。ようががす、俺が一つ龍王に談判して横領犯人を捕縛させ、ついでに讐を取つて上げやせう。」

すぐ雲に乗つて西海に至り、それから水除けの術を使ひ、波を押分けて進んで行くと、矢張龍宮を志す者と覺しく、黒水神府の印伴纏を著した小使が文箱片手に前方を走つて行くのを見つけた。

悟空追ひかけて行つて如意棒でばかり撲り殺し、文箱を奪つて開けて見ると、中に「黒水河の甥より西海龍王様臺下」と上書きした一通の書面。

前略、今日はからずも唐國の僧三藏を生捕りに致し候については、叔父上様に御賞味願ひ上げ長壽の御祝ひ致したく、何とぞ速に御來臨を賜はば幸甚之に過ぎず候、早々頓首。

としたゝめてあります。悟空はいゝ證據書類を手に入れたと北叟笑みながら、やがて龍宮に赴き刺を通じて面會を求めました。



龍王は、悟空が昔天上界を騒がせた頃の蠻勇振りを知つてゐるから、何の用で來たのか知らんと、恐る〜出迎へる。

「これは齊天大聖にはお珍しい、して何の御用でおいでになりましたな？」